僕と彼女とアルマゲドン

太郎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕と彼女とアルマゲドン

【Ｎコード】
Ｎ７９６８Ａ

【作者名】
太郎鉄

【あらすじ】
幼なじみの美佳が告白してきたので「好きな子がいるから」と断固拒否。ぶちきれた美佳は、好きな子どころか世界中の女の子を、鬼と一緒に片っ端からジェノサイド！どうやら美佳は異世界のお姫様で、わがままし放題。あっという間に国際テロリストの仲間入りでさぁ大変！自衛隊やらミサイルやらがバンバンやってくるも、構わず美佳は片っ端からデストロイ！そんな美佳は僕にも何だか無理難題をふっかけてきて、悪戦苦闘のエブリデイ。それでも笑って、美佳に半ば無理やり付き合わされる僕が、日々ちょっとずつ成長し

ていくお話しなのですーー。

アルマゲドンに至るまで　1（前書き）

ポップなのりに、少し重いテーマを込めてみようと思い、書き始めた作品です。色々見苦しい場面や文章もあるかと思いますが、読んで頂けたら幸いです。

アルマゲドンに至るまで　1

発動までに時間がかかるから、なるべく距離をとろうと思う。だけど、異世界の連中はそんな僕の願いも虚しく、眼前に迫って僕の首をはねようとする。

「勘弁してよ。もうすぐ美佳の誕生日なのに…」

僕は振り返って全力疾走。手頃な廃墟に身を隠す。護身銃の充電にはまだまだ時間がかかりそう。

異世界の連中（鬼みたいというより鬼だねあれは）は僕のことを探してる。腕時計を見ると、午後１１時半をちょっと過ぎてて大慌て。頭の中で美佳の言葉が僕を急かした。

『いい？誕生日になった瞬間に、アルタ前で待ってるからね。遅れたら、今度は残り半分の女の子も皆殺しだからね！』

困ったなぁ、全く。

今、僕は大久保辺りにいるだろうから、そろそろあの鬼を何とかしないと、本当に間に合わない。やれやれ、護身銃の充電はどうでしょう？もうちょい…。僕は廃墟の窓から顔を出して異世界の住人（つまり、本当に鬼なんだ）の様子を伺う。真っ赤な体で頭から一本の角。鋭利な爪がもう凶悪に怖い。ブルブル。でも実際美佳に比べたら、てんで全く怖くない。

ピーーー！！という強烈な音。護身銃の充電完了。鬼が気づいてこっちを見る。僕は廃墟ごしに護身銃のトリガーをガシャッ！玩具みたいな護身銃から、エメラルドグリーンの光がブオンと鬼目掛けて

一直線。鬼の胸のあたりにクリーンヒット！鬼は
「ギョエ」
という断末魔の叫び声とともに四方八方にビチャビチャ砕け散る。
護身銃の名前以上の効果に、いつもながらブルッと震えて、僕は美佳の待つアルタ前に走った。原型なんか留めてないけど。

去年、新宿から半径５キロ四方が消滅してしまったのは美佳のせい…とも言い切れない。いや、まぁ美佳のせいっちゃせいなんだけど、そもそもの元凶は僕にあるし（もちろん千歩くらい譲ればね）、どっちみち意味なんてないんだから、世界中の軍隊さんも躍起になってミサイルやらなんやらを打ちまくるべきではなかったと僕は思う。

そのせいで無関係な人が、関東大震災の百倍は死んじゃったし、その千倍くらいの人が泣いて泣いて泣きじゃくってしまったわけだから、僕が権力を持ったおっさんおばちゃんを少しくらい憎んだって罰は当たらないはずじゃないでしょうか？

かくいう僕だってまだ１５才の中学生だったわけで、いくら僕が元凶だとしても、ここまで壊すのはちょっと酷いし、結構〜泣いた。

『隼太は悪くないのに何で泣くの！男なら胸を張っちゃいなさい！』
胸なんかどうやっても張れないよ美佳…。と、僕がそんな弱気を見せたら今度は日本が世界地図から消えちゃいそうな気がしたからなんとか我慢したものの、それから僕は美佳のワガママに付き合って、日々命をかけたご機嫌取りに勤しんでる。

美佳とは幼なじみで、小学校から一緒だったわけ。で、僕達は仲良く慎ましく育ってきたんだけど、僕の１５才の誕生日に、美佳は僕に告白した。

『隼太の事、ずっと好きだったの。私と付き合ってください！』

と、体育館の裏で手作りのケーキを僕に差し出してそう言った彼女の頬は鬼より真っ赤。僕はその時クラスのアイドルのユミちゃん（あややと宮崎あおいを足して2で割った感じ）が好きで、ごめん無理と断った。美佳はえらいご立腹。

『それじゃ、ユミがいなければいいんだよね？ユミがいなければ、隼太私と付き合ってくれる？』

『いや、そういう問題じゃなくて…つまり僕は好きな人と付き合いたいからさ』

『じゃあ、私の事全く好きじゃない？』

『だって美佳は幼なじみで、恋愛とかそんなじゃないから…』

『じゃあ、世界中に女の子が私しかいなかったら？』

『そりゃ、まぁ、そういう成り行きに…って…おい！？』

美佳は猛ダッシュで教室へ。僕が後を追うと、そこはまったく地獄絵図。美佳は机の上をぴょんぴょん跳ねて、女子を次から次へとジェノサイド。首をチョップでバッサリちょんぎり、胸をパンチでワンツー貫通。阿鼻叫喚に納得して共感できる光景に、僕はすっかり茫然自失。

『オッケイ隼太！まずはアジアの女から皆殺しだね！』

と美佳のVサインで一瞬我に帰って、でもやっぱり目前の光景に我

を忘れて、それでも何とか頑張れ隼太と自分にエールを送ったりした。

『みんなよろしく！』

窓に向かって美佳が叫ぶと空の様子がちょぴりおかしい。なんだか徐々にうねりを見せて、うずまきみたいなものが出来て、穴が開いて鬼みたいのがいっぱい出てきた。ここら辺でひとまず僕は気を失った。

目が覚めると、僕はベッドの上にいて、見覚えのあるおばさんがいて、おばさんが美佳のお母さんだと気付いた頃、同時にさっきの光景が蘇ってきた。あ、夢かと一安心。でも何で僕は美佳の家で寝てるんだろうね？

『ごめんね、隼太ちゃん。あの子、一度言い出すと聞かないから』

僕の覚醒におばさんが気付いて、優しく笑ってそう言ったけど、意味が解らないのでポカンとしてた。

『まったく、あれほどこの世界では大人しくしてなさいっていつも口をすっぱくして言ったのに、これじゃ本当にアジア中の女性が死ぬわ。大体、お父さんが悪いのよ？一人娘だからって溺愛するから、あの子あんなにワガママになっちゃったの。もう、これじゃまた一族総出で戦争じゃない。他の連中も美佳が可愛いからって何でも言う事聞いちゃって。限度ってものを知らなすぎるわ。あ、隼太ちゃんは何も知らなかったわね。ごめんなさい、愚痴っちゃって』

変わらず理解不能＼なおばさんの言葉はひとまず置いて、僕は壁にかかっている時計を見た。９時ジャスト。晩御飯に大分遅れて、これはまずいと起き上がる。

『ごめんなさい、何だかおばさんに知らないうちにお世話になってしまったみたいで。晩御飯に大分遅れているので、このままだと飢えて死にかねないので帰ります』

と僕がお辞儀すると『まだ外危ないわよ』とおばさんが言う。僕は美佳のお母さんはイタい人なんだなと思い始めていたので、ニコッと笑って逃げるようにゴーホーム、と思ったがしかし、ドアを開けて外へ出ると、道端にたくさん女性が転がっていて、首がなかったり胸に穴が空いていたりで死んでいたので、僕は再び気を失う。

宣言通り、美佳と鬼達はアジア中をビュンビュンぴょんぴょん飛び回って、女の子達をばっさばっさと皆殺し。完全に皆殺しじゃなくて、ちっちゃな女の子とかおばさんとかお婆さんは避けていた。殺されたのは、１５～３０くらいの年の頃の皆々様。後に美佳は

『だって隼太、ノーマルでしょ？それにちっちゃな子を殺すのは、何だかかわいそうかな』

と語っていたけど、美佳は全然ノーマルじゃなくない？と聞き返す勇気はもちろんなかった。

そんなわけで世界中が大混乱。美佳と鬼達はその後もばっさばっさと女の子を殺し続け、すっかり国際テロリスト。世界中の半分の女の子が死んだところで、僕はようやく美佳に待ったをかけるのである。

『解った（よく解らないけど）！美佳、君と付き合うよ！とことん君と恋愛するよ！愛して愛して愛しまくるよ！だから女の子を殺すのはもうよそう！僕も今まで、ショックで何が何だか解らなかったけど、やっぱり人殺しはよくないよ！』

美佳は号泣して僕に抱きつき『本当に？』と言う。『本当だとも』と僕は頷く。『だから、鬼達何とかして』
すると美佳は鬼達を集めて集めて集めまくる。美佳の家からほど近い（僕の家からも結構＼近い）新宿上空をわさわさわさわさ赤いのやら青いのやら黄色いのやら黒い鬼が埋め尽くした。お陰で若い女の子のいない新宿が大パニック！

『おいおいミカミカ！まずいよだめだよ！これじゃパニック必至だよ！前みたいに空を割るなりなんなりして元に戻して綺麗消してよ！』
なぜか照れ笑いの美佳は『ごめん、みんなこの世界が気にいっちゃって、異次元は勘弁して下さいって』と舌をペロリ。

それはとってもまずい事の気がした僕の予＼想はまんまと的中。何と言っても国際テロリストの美佳と鬼達。自衛隊が戦車に乗って新宿中を埋め尽くした。
僕と美佳は鬼達を説得しに新宿へ向かうも自衛隊に阻止される。やっぱり国際テロリストの美佳に向かって僕に構＼わず自衛隊がいっぱい発砲。僕に当たりそうな弾をみんな美佳がキャッチして、僕を抱えて空へビュン。

『許さない。私の隼太になんてことするの！』

美佳は鬼達を一斉に自衛隊に向かわせ片っ端からデストロイ。
あっという間に壊滅した。
その後何度か自衛隊がやってくるも、片っ端からデストロイ。
新宿中に人がいなくなった頃、いろんな国からいろんなミサイルが飛んできて、結局いろんな人が死んだ。そりゃあれだけミサイルを

打てば、ちょっとの誤差とちょっとの犠牲は想定の範囲内と後にいろんな国の政府は語る。想定の範囲内で死んだ人の中には、ちっちゃな女の子も、おばさんも、お婆さんもいた。
ところで、鬼達はというと、一匹も死なないで元気いっぱい。僕も、僕の家族も美佳が守ってくれたから元気いっぱいなんだけど、美佳と一緒にいるから、僕らもそろってテロリストの仲間入り。

以来、廃墟となった新宿が僕と美佳のデートスポットになった。プラス思考で素敵に思思うことにしたものの、一回のデートに命を賭けるのは、なかなか結構＼、骨が折れる。

美佳は街に鬼を放って、僕の首を刈るように命令してる。僕は様々な条件の元、鬼を撃退し美佳の元にたどり着かなきゃならない。参った参った。なんでこんなことをするんだいと僕は尋ねる。

『愛って、困難を乗り越えて初めて手に入れられるものでしょ？』

と美佳は答える。おいおい、僕のことを好きなのは君の方じゃなかったっけと思いながら、僕は渋々美佳に従う。それで僕にこの護身銃（恥ずかしながら水鉄砲にしか見えない）を持たせた訳だけど、鬼達は美佳の仲間なわけで、鬼でも殺すの僕は辛いよと美佳に言う。
『大丈夫大丈夫、砕けちっても異次元に帰るだけだから』

あくまで軽く美佳は言う。そんなものかねと、首を傾げつつも納得して、僕は鬼達と、使い勝手の悪い銃を使ってしのぎを削るエブリデイ。

元々歌舞伎町だった廃墟を、僕は全力ダッシュでアルタ前へ走りまくる。1分前にギリギリで間に合う。美佳が
「やっほう隼太」

と嬉しそうに笑ってる。

「ごめん、待った？」

息も絶え絶え僕は言う。

「大丈夫大丈夫。偉いよ隼太。ちゃんと約束守ってくれたね」

というと美佳は僕の頭を撫でる。ピピピ、という音がなる。午前零時に設定した腕時計のアラームだった。

「誕生日おめでとう美佳」

「ありがと、隼太」

「ところで美佳って何才なの？」

「今年でちょうど百…、隼太、女の子に年を聞くとぶっ殺すわよ」

「オッケイ。一生聞きません」

「よろしい。さぁ、今日どこ行く？」

「美佳の誕生日だからさ、美佳の好きな所に行けばいいよ」

「それじゃ、今日は1日中付き合ってもらうからね！」

美佳は僕の手をひっぱって、廃墟の街を歩き回った。この生活に慣れ初めている事を僕はちょっぴり危惧したが、でもまぁ何を嘆いても始まらないし、美佳の事もちょっとずつ好きになってきたのでよ

しとした（僕にはＭっ気があるらしい）。

ところで余談だが、僕達はこの日、初めてのキスをした。

アルマゲドンに至るまで　２　板挟みは辛い事、それから予兆

僕の両親と美佳の両親の議論はいつでも平行線で、一触即発のムードがプンプン漂っていて、出来ればその場に居合わせるのは避けたいと思う。けれど、間を取り持つという役は美佳になんか絶対任せておけないし、残念ながら僕は必ずその場に居合わせなきゃならない宿命にあるのだ。とほほ。

今日も美佳の家で、僕と美佳の両親が、ダイニングテーブルを囲んで不毛な議論を展開させる。

僕の両親（父、春男５２歳。母、真里４９歳）の意見。

「あなた方の娘さんは、自身の欲望により数え切れない程の女性を殺害し、また、それによって国際的な指名手配犯となり、その事から我が家（特に息子）まで巻き込まれ、世界から敵と認識されてしまった。早急に何らかの措置ーー例えば娘さんの身柄を政府に引き渡すーーを取り、現状の看破と、我々が無関係であるという釈明を行って頂きたい」

美佳の両親（父、母ともに、本名年齢不詳）の意見。

「そもそも、我らはこの世界の住人ではない。よってあなた方の常識や倫理感というものに従う必要はないし、当然ながら美佳を権利機関に差し出す事など有り得ない。しかしながら、あなた達家族を巻き込んでしまった原因が娘の不祥事にあるのは事実だ。よってあなた達家族の身の安全は、我々一族の最重要目的としてそれを保証する事とする。これで納得頂けないだろうか」

僕の両親の意見。

「あなた方の提案には、我々一家の社会的地位の回復という項目が完全に欠如している。我々が人間として生活していく上で、これは必要不可決な事であり、これなくしは、いくら生命の安全が保証されていたとしても、根本的な解決にはなり得ない」

ええと、美佳の両親。

「ならば、春男氏と真里氏のみで自ら権利機関に赴き、身の潔白を証明するのが妥当であろう。しかし、御子息を同行させる訳にはいかない。娘は御子息を愛し、将来的に夫とする事を計画している。我々は娘の意志を尊重し、同時に一族の総意として決定した次第である」

あ〜、僕の両親。

「息子なくして釈明は有り得ない。第一に我々のみで釈明したところで、息子が娘さんと婚姻を結んでいるならば、なんら説得力が発生しない。第二に、我々はその婚姻を認めない。あなた方の世界で、結婚というものがどのような手続きのもとに行われるかは存じあげていないが、それは双方の合意があって初めて成立するものである。息子の意志を無視しての婚姻など、我々は絶対認めない」

美佳の両親。

「ならば、御子息の意見を聞こう」

両家の視線が僕にグサグサ突き刺さる。とりわけ、美佳の視線が怖すぎる。僕は溜め息をつきたくて仕方ないけど、溜め息なんかつい

たら美佳のパンチで僕が死んじゃう恐れがあって、なんとかかんとか冷静を装う。

「えっと、まぁ、僕としては、つまり、まだ僕は１６歳で、なんといっても未成年で、父さん母さんの意見に従わなきゃならないのが本当なんだけど、だからといって、美佳の事は嫌いじゃないし、世界がこんなになっちゃったのは僕にも責任の一端があるわけで、仮にこのまま僕が関係ないと言っても、それはそれで本当じゃない気もしないでもないです」

母さんが両手で顔を押さえてシクシク泣き出す。父さんが僕をちょっと睨んで母さんの肩を優しくさする。僕は、世界で一番親不孝者な自信がある。だけど、泣きたいのは僕も一緒。それでも泣けないのが、きっと僕への罰なんだと思う。

僕は、ほんのちょっとの勇気を絞る。

「けど、結婚という事を考えるのはやっぱりまだ無理です。一応、この世界、というかこの国の法律に乗っ取れば１８まで出来ないし、さらに２０歳までは親の合意も必要になる。だからやっぱり、何をするにももうちょっと時間が必要だと思うんです」

こんな事になってるのに法律も何もないけれど、とりあえずお茶を濁さないと、なんだか取り返しのつかない事になりそう（もう充分なってるけど）で、美佳の視線に必死で耐えて、僕はとにかくエスケープ。

「それでは、議論は御子息の結論がでるまで延期としよう」

と、美佳サイド。父さんと母さんは、鬼の護衛のもと家に帰る。い

つ空爆されるかまったくもって解らないのだ。

廃墟となった新宿近辺（僕と美佳の家を除く）は完全に外界から隔離されてる。だから今現在、世界がどういう情勢にあるのか僕達には知るすべがない。食料だの水だのは鬼達がどこからか調達してきてくれるものの、こんな状況では父さん母さんが参るのも無理はない。やれやれ、どうしよ。僕には考える事が沢山ある。

「隼太、今日は7時に新宿駅ね！隼太は家を5時に出発！三体の鬼から無事逃げてね」

美佳には考える事がなさすぎる。

「ねぇ美佳。もし、これで僕が本当に死んじゃったらどうするの？」

僕はふっとよぎった疑問を口にする。美佳はキッパリとこう答える。

「その時は、隼太を追って私も死ぬよ。決まってるじゃん。隼太が死んだら、生きてる意味なんてゼロだもん」

それは

「健康の為なら死ねる」

と言うのと同じくらい矛盾した言葉に聞こえる。思わず、僕は苦笑してしまう。

「やれやれ。それじゃ知らず知らず僕は美佳の命も背負っていたんだ」

「当たり前じゃない。愛し合うって、そういう事でしょ？」

僕は美佳の事を、本当に好きなんだろうか？美佳はどうやら異世界のお姫様で、どういうわけかこの世界で僕の幼なじみとして生きてきて、女の子とか軍隊とかを片っ端から皆殺した、世界中の凶悪犯を全員足してもまだまだ足りないくらい凶悪な女の子で、そんな女の子を僕は本当に好きなんだろうか。

というかその前に、何で美佳は僕の事が好きなんだろう？

僕はそれを何度か尋ねたけれど、美佳は秘密と言って答えない。

女の子の事は、僕には全然解らない。

とりあえず、僕も家へ帰って、お茶を飲んだり本を読んだりして5時になる。護身銃を片手に、美佳の待つ、原型のない新宿駅へと向かった。

その途中で、僕はとんでもないものを目にする。今にして思うと、それはきっと予兆だった。これから始まる、僕1人で背負うには少しばかりヘビーすぎた、あの、悪夢のアルマゲドンの。

結果から言うと、僕は大切なものを沢山失う。でも、この時にはまだ、それがとんでもなくとんでもないモノだと認識するだけで、あんな事になるなんて、まったく予想もしなかった。

僕は甲州街道だった道を走る。頭上に、僕を狙う鬼が来る。僕は護身銃の充電を開始する。

護身銃を充電するには、いくつか条件があったりする。まずまず、鬼が僕の視界にいる事。さらに、鬼が一度僕を視界に入れる事。それが重なった時点で、グリップにあるボタンをポチっと押す。する

と、ちょっとずつ緑色に光りだして、温かくなる。

つまり、完全な不意打ちが出来ないワケ。不意打ちしたければ、この前みたいに、一度見つかってから隠れなきゃならないという、使い勝手の悪い銃。

甲州街道沿いに隠れられそうな建物がないから僕はもうもうひたすら走る。鬼のチョップをかろやかに避け、鬼のキックを鮮やかにかわす。何だかんだで僕も強くなっていた。

ところが絶体絶命大ピンチ。新宿南口が見えてきた所で、眼前にもう2体の鬼が立ち塞がる。さすがの僕も、一度に3体もの鬼を相手に渡り合える自信は皆無。護身銃の充電もまだ…。

頭上にいた鬼は僕の後方に降り立ち、僕は逃げ場をどうやら失う。

さぁさぁどうしよ隼太君。

僕の頭の中に、大好きだったアニメのテーマソングのフレーズがよぎる。

トラブル～と～あそ～べ～♪

どうやらすっかり現実逃避気味の僕に、前から2体、後ろから1体の鬼がザッザと迫り来る。どうやって遊ぼうか、考えて考えぬいて、遊べないと悟ったその時ーー。

暗くなり始めていた空が、一瞬、ピカッと真っ白に光る。鬼達は空を見上げ、何かを叫ぶ。僕もつられて空を見上げる。

言葉を失う（元々喋ってないけどさ）。

それを形容する語彙を勉強不足の僕は持ってない。無理矢理例えるなら、空っていう紙を、内側から何かが破って、僕達を覗いている感じ。

しかもそれは、美佳が鬼を呼んだ時に開けた穴なんかより、遥かに巨大な規模の亀裂。その中に、よくは見えないけど、とてつもなく巨大な、何かがいた。鬼達は、空に向かって、ひたすら吠える。瞬間、空からエメラルドグリーンの光が降る。その光が、護身銃から発射されるものと同じである事に気付いたのはちょっと後。僕はこの時、そこまでクールでいられなかった。

鬼達は跡形もなく消える。

僕は呆然と、その何かを見つめる。何かが何かは解らないけど、それが、とてつもなく黒く大きくて、まがまがしいモノである事だけは、なんとなく解った。

中幕　マイケル・コール大佐と地球防衛軍（前書き）

この回では、視点が主人公隼太から別の人間へと移り変わり、三人称での展開となります。

中幕　マイケル・コール大佐と地球防衛軍

モニカの笑顔が、徐々に記憶から薄れていった。あれほど愛していた女の笑顔も、時は無情に消し去ってゆくのか…。

マイケル・コール大佐は、昨年まで某大国の空軍に所属していた。しかし現在では、同じく昨年、世界規模で起こった、未知の生命体（ヒューマン・フェイクと現在では呼称されている）による大量虐殺を発端とする一連の事件によって設立された、地球防衛軍第３部隊の責任者という地位にある。

地球防衛軍とはいささか陳腐すぎるネーミングであるものの、実際、ヒューマン・フェイク達による大量虐殺及び大量破壊は、この地球にとって未曽有の危機であるという認識が全世界共通にあり、マイケル大佐自身、少しも語弊があるとは思っていない。問題は、ネーミングの陳腐さではなく、ネーミング通りの機能を果たせていない事にある。

地球防衛軍は、少なくともヒューマン・フェイクの被害にあった国家の軍隊及び自衛隊、有志の民間人が混在しており、やはり第一線の基地は日本の相模原にある。某大国のキャンプをそのまま地球防衛軍のものに作り替えた。虐殺以前には、地元の民間人から批判的な声が圧倒的に多かった基地だが、それを覆すに充分なヒューマン・フェイクへの憎悪を民間人は有しており、今では応援ムード一色だった。

昨夜も、ヒューマン・フェイク達の拠点、新宿に大規模な一斉攻撃を行ったが、戦闘機が全て叩き墜とされるといういつも通りの無残な結果に終わってしまう。

まるで、カミカゼだ…。

マイケル大佐はその様に思う。ヒューマン・フェイク相手に現存する兵器は通用しない。それはとっくに解りきっているのに、我々はこの攻撃を止める事がない。

マイケル大佐は、キャンプ内の自室で、１人紫煙をくゆらせていた。自室ーーここに初めて来たときは、マイケル大佐の他に１０人の兵士が寝食を共にしていた。１０人には窮屈すぎる部屋であった。大佐といえど、世界中から兵士がやってくるこのキャンプに、個室が与えられる事はない。

しかし、１人減り２人減り、今日でついにマイケル大佐１人になってしまった。皆、ヒューマン・フェイクに殺されたのだ。

昨日、最後のルームメイトであった、空軍時代からの付き合いもある、ジョージ・ガルシア中佐が出撃する直前、こんな事を漏らしていた。

「大佐、今までお世話になりました」

「今生の別れみたいな挨拶はやめろ、ジョージ。お前は生き残るさ。俺の知っているお前は、タフの塊だったはずだ。あんな化け物にやられてしまうはずがない」

マイケルは、出撃前の兵士に対する言葉の無力をいつも呪っていた。ヒューマン・フェイクへの攻撃は、確実に死へと直結する。それが解りきっているのに、こんな言葉しかかけられない自分が愚かしか

った。

「大丈夫ですよ大佐。もちろん、俺だってただで死ぬ気はありません。奴らに、一矢報いてやります。あの世へ行った時、妹に少しでも顔向けできるようにね」

防衛軍に志願した連中の大半は、ヒューマン・フェイクに大切な者を奪われている。ジョージも、ハイティーンになったばかりの妹を、眼前で奴らに殺されたのだ。

マイケル大佐は、それ以上かける言葉が見当たらず、ただ頷いて、ヒューマン・フェイクを呪う事しか出来なかった。

何故、奴らは若い女ばかり狙って殺害したのか。また、これからもそれは続くのか。そもそも、奴らは何なのか。

「そろそろ、行きます」

「あぁ」

「大佐…」

「何だ？」

「あとを、頼みます。奴らを、必ず…！」

ジョージは、恐らくこの攻撃が奴らに何の効果も与えられない事を知っている。犬死にする運命を知っている。それでも、行かねばならない程の憎しみを抱えている。

お前も、ジョージのように、行くべきじゃないか？モニカの仇を、奴らへの憎しみを弾丸に込めて、無意味と解りきっていても、お前も行くべきじゃないのか？

マイケルが
「解った」
と答えると、ジョージは敬礼してきびすを返し、ドッグへと歩いた。

1人きりになった部屋で、ジョージの、そして死んでいった仲間達の後ろ姿を思い出す。

テーブルの上に、ルームメイト達が置いていった写真立てがある。それぞれ、皆、大切な者と共に、幸せそうな顔で写っている。

夜、就寝の前に、写真を眺めて泣く者がいた。憎悪に顔をひきつらせる者がいた。焦点の合わない目で見つめる者がいた。皆、ヒューマン・フェイクに大切な者を奪われた。そして、ヒューマン・フェイクに殺された。

マイケルは、写真立て一つ一つを、食い入るように見つめた後、その中から一枚を手に取る。

純白のワンピースに身を包んだモニカの肩を、マイケルが組んで、笑っていた。背景に湖。

モニカが死ぬ1時間前に撮影したものだ。

「モニカ…」

マイケルはモニカの笑顔を思い出す。半年ほど前までは鮮明だったこの笑顔が、今では写真を頼らないと思い出せない。

思い出せるのは、胸に文字通り開いた穴を見つめながら、虚ろになっていくモニカの表情だけだ。

モニカ…、お前も望んでいるいのか？俺が今すぐ、飛び立つ事を。

そうだとしても…。

もう少し待っていてくれ。死ぬのは怖くない。お前のいない人生に、意味などゼロだ。

だが、俺は確実にお前の仇を取りたいんだ。

ヒューマン・フェイクが生命体である以上、確実に弱点が存在する。

俺に、それを探る時間をくれ…。その後は必ず、お前に会いに行く。

マイケル大佐は拳を握る。体中の中から、ありとあらゆる憎悪を探し、ありとあらゆる憎悪を込める。

仇は、必ず取ってやる。モニカの分も、ジョージの分も、死んでいった仲間達の分も、俺が必ず取ってやる。

そして、それはさながら天恵の様に、マイケルの元へ訪れる。

「緊急召集。各部隊の責任者は、至急作戦本部に集まる事。繰り返す…」

場内アナウンスに導かれ、マイケルは作戦本部室へと足を運んだ。鉄製の長机に、１０人ほどの責任者がすでに腰をかけていた。その先のスクリーンの傍らに、最高司令官バーンズが立っている。顔中に刻まれた皺と傷は、くぐった修羅場と同じ数だけついている、などと確かジョージが冗談混じりに言っていた。すっかり髪は白くなっているものの、眼光の鋭さは何ら衰える事なく、むしろ凄みを増している。

「諸君、集まってもらったのは他でもない。この映像を見てくれ」

バーンズがそう言い放つと、部屋の灯りが消え、スクリーンに地球が映し出された。それが高速でクローズアップされてゆき、やがて日本、新宿上空へと映像が移ってゆく。

「これは先日、日本時間で午後６時頃、我が国の人口衛星がとらえたものだ」

午後６時といえば、ジョージ達がヒューマン・フェイクに攻撃を開始する直前だ。

廃墟となった新宿を、少年が走っていた。確か、これはＨａｙａｔａという名のヒューマン・フェイク。恐らくはヒューマン・フェイクのリーダー核とされる、Ｍｉｋａという少女と行動を共にしている場面が過去何度も観測されている。

Ｈａｙａｔａの周りを３対の標準型ヒューマン・フェイク（日本人は標準型をＯＮＩと呼んでいた）が囲んでいた。

これはどういう事だ？明らかに標準型は少年を狙っている。奴らは仲間ではないのか？

標準型が少年に歩み寄る。すると一瞬、画像がフラッシュし、真っ白になった。戻ると、標準型と少年が空を見上げていた。

次の瞬間。エメラルドグリーンの光が降り注ぎ、標準型の姿が消えた。

何だこれは？

「さらに…」

とバーンズが言う。

「この3分後、ヒューマン・フェイクへの一斉攻撃に向かったパイロット達からの通信記録を聞いてもらいたい」

部屋のスピーカーから、ザザッ…というノイズが響いた。聞き取りにくいが、確かに人の声である。

【なん……だ。これ…は、見えるか……、お前達にもこれ…が見えるか！！】

ジョージ？これはジョージの声だ。あの勇敢なジョージの声が、明らかに震えている。

【悪魔だ…！巨大な悪魔が！！……悪魔が空を割っている…。】

アルマゲドンに至るまで　3　名無しと僕達の約束

僕と美佳は手を握って歩いてる。

新宿御苑だけは、ボロボロでほとんど何も残っていないにせよ、それが過去新宿御苑であったという面影だけは残ってる。

例えば、所々にまだギリギリで座れるベンチがあったり、あぁ、そういえばここ大きな公園だったよねと思い出させる芝生もちょこっと残ってる。

僕と美佳は見つけたベンチに腰掛けて、美佳が作ったというお弁当を食べている。

たこ足ウインナーと卵焼きとおにぎり3つ。オーソドックスこの上なくても、味はなかなか悪くない。

時間は昼間で陽気はポカポカ。そろそろ夏になるのかな？この生活が始まってから、どうも日にちの感覚が曖昧で、正直なところ今日が何月何日なのかさえ、正確に解っていなかった。

美佳は真っ白なワンピースを着て、僕がせっせとウインナーを口に運ぶ姿を、さも楽しそうに横目で眺める。

「美味しい？」

「うん、正直びっくりするくらい美味しいね。美佳に料理の才能があるとは知らなかったよ」

わかりやすく美佳が照れる。

「そりゃあ、私が作ったんだからもうおいしいに決まってるもんね！聞くだけ無駄だったよね！まさに愚問だよね！」

もう少し謙虚に照れてくれれば、可愛げがあるのにな、と僕は思う。美佳らしいと言えば美佳らしいけど。

僕は、このとりあえずの平和の中で、一週間前の出来事を思い出す。空から僕を覗いてた、あの大きな黒い何か。あれから僕は仮にその何かを《真っ黒》と呼ぶ事にして、色々頭を巡らせる。

《真っ黒》の事を、美佳に話すと、美佳は決まって口を閉ざす。

『隼太、その事誰かに話した？』

『いや、誰にも』

『ならいいけど、誰にも言わないでね。特に、パパとママには絶対ダメだよ！』

一応約束はしたものの、迷ってしまう僕がいる。だって、美佳がこんな事を言う時に、美佳の言うとおりにして、事がいい方向に進んだ事が今までないのだ。

つまり、事を良くする為には、美佳のおじさんとおばさんに《真っ黒》の事を話すべきだと思うのだけど、踏ん切りがつかない僕もいる。

美佳が恐いのももちろんあるけど、それ以上に、《真っ黒》の話し

をした後から、美佳が僕に鬼退治をさせなくなった。護身銃と《真っ黒》の光が同じだった事に、何か関係あるのかな？

なんにせよ、僕個人の事だけ考えると、事態はとても好転していた。

それから唐突に後ろでガサガサ音がする。驚いて振り返ると、さらにさらに驚いた。

髪が長くて髭がボーボーでボロボロの服を着たおじさんが僕達を見ている。

僕と美佳は弁当を置いて立ち上がる。

「おじさん、誰？」

美佳が珍しそうな顔でおじさんに言う。

「おじさんは、名無しだ。おめえさんらこそ、誰だ？」

名無しと名乗った？おじさんは、ボリボリ顔を掻いた後、フワァと大きく伸びをする。

「私は美佳！それでこっちが彼氏の隼太」

言いながら美佳が僕の腕を組む。おいおい、僕達は国際テロリストなんだからいきなり本名を言うのはいかがでしょうかお姉さん…。

「はぁ～、カレシねえ？いいなぁ～、おめえさんらは仲良しなんだなぁ」

またまた名無しはボリボリ顔を掻いて言う。僕はこの名無しというおじさんに不思議な印象を覚える。
明らかに初めて会ったのに、明らかにどこかで会ったことがある感じ。

デジャブってやつ？僕は戸惑う。だけど本当に戸惑うべきは、僕の抱いた印象じゃなく、もっと客観的な事実なのだ。

なんで、こんな所に人がいるんだ？

「美佳、美佳」

僕は囁く。

「この人、ちょっぴり怪しくない？」

「そぉ？それじゃあ殺っちゃう？」

美佳はヒューと口笛を吹く。鬼が1体空から降りて、名無しの前に立ちふさがって、爪を大きく振り上げた。

「いやいや、だから人殺しはよくないって！」

美佳に頼んで鬼を制する。名無しはポカンと鬼を見つめていた。あらま、全然びびってない。

「おじさん、何でこんな所にいるんですか？」

「さぁ、名無しにはよくわからんねぇ。大分前からここにいた気もするし、ついさっきからここにいた気もするしねぇ」

のんびりした口調に、僕はより一層戸惑ってしまう。

「あの、答えになってませんけど…」

「答えとかそういうの、名無しは持ってないもんよう。そういうのは、きっと必要ないからなぁ。名無しは名無しさぁ。どうしてこんな所にいるかって言われても、名無しが名無しだからこんな所にいるとしか言えないさぁ」

何だか名無しとは関わらない方がいい気がしてきた。

「ところで…」

と名無し。

「この子はおめえさんらの友達かい？」

名無しが鬼の方に顎をしゃくる。さて、どう答えたものだろう。間違いなく、僕の友達ではないものね。

「友達よ！私の言うこと何でも聞いてくれるんだから！」

鬼は美佳に振り返って、何だかワケのわかんない言葉を喋りながら頭を下げる。

「大丈夫大丈夫。もう、そんな事気にしないでよ！」

鬼と美佳の会話になんて、当然ながらついていけない。

「へぇえ、おめえさんは、お姫様なのかい？」

僕と美佳は顔を見合わせる。その後、同時に視線を名無しに移した。
やっぱり同時に口を開く。
僕ーー
「何で解るんです？」
美佳ーー
「何でこの子の言葉が解るの？」
今度は美佳に視線を移す。
「え？」
「今、この子はこういったの。《友達なんて、私には勿体なさすぎるお言葉です。姫様》」
ホッホと、名無しが笑う。
「何でも何も、名無しにはそう聞こえたんだから、仕方ねえよなぁ。それに、だってよ、異人さんの言葉が解る人だってたくさんいるだろうよう。ちっとも不思議な事じゃないさぁ」
でも異世界の言語を教えてくれる先生はいない。
「ねぇ隼太。このおじさん、確かに怪しいね」
「うん」
「やっぱり、殺っちゃわない？」

「ダメだってば」

もう、美佳には人を殺して欲しくないもの。

「おじさん、１つ聞いていい？」

僕の腕を離して、美佳が名無しに近づいていく。

「おじさん、うちの一族の人？」

確かに、それ以外に妥当な線は今のところ見当たらないと僕も思う。美佳だって女の子の姿をした鬼なんだし、美佳の両親だって見た目はおじさんとおばさんなんだから。

「名無しには、一族なんていなかっと思うよう。確か名無しは生まれてからずっと名無し１人だけだったと思うなぁ。名無しもよく覚えてないがぁね」

僕は名無しに尋ねてみる。

「それって、やっぱり記憶喪失ってやつなんですか？」

「さぁねぇ、名無しもよくわかんねえ。けれど、何か大切な事をしなきゃなんねぇ事だけは覚えてるなぁ。それが何なのかが、またまたわかんねえんだけどさ」

ふと興味が沸いてきて、僕は名無しに提案してみる。

「もし、よかったらなんですけど、その大切な事を思い出したら、僕達に教えてもらえませんか？」

名無しはニコッと笑って、ゆっくり頷く。

「いいよぉ。名無しは、思い出したらおめえさんらに教えるさぁ。約束するなぁ。名無しは約束っていうのを確かした事がなかったと思うから、何だかちょっぴり嬉しいなぁ」

予想外の言葉に、僕は何だか可笑しくなって、美佳もやっぱり可笑しくなったらしくって、そんな僕達が、名無しも可笑しいらしくって、ついでに鬼も、何だかんだで可笑しいらしく、僕達みんながお日様の下で笑っていた。

どうやら、名無しは美佳に殺されずにすみそうだ。

「それじゃさ、おじさん、指きりしようよ。せっかくだから、きちっとしなきゃ」

美佳が小指を名無しに差し出す。名無しは指きりの意味が解らなかったらしく、戸惑っていた。そんな姿が微笑ましくて、僕は名無しに好感を持つ。

美佳と付き合っている内に、どうやら大分、僕はのん気になったらしい。こんな得体のしれないおじさんに、初対面から好感を持つなんて。

まぁ、家族や美佳以外の人間（美佳は人間じゃないけど）と喋るのが1年ぶりで、僕もきっと嬉しいんだろう。

美佳の指と、名無しの指が交差した。その後で、僕も名無しと指きりをする。

「うん、名無しは指きりをしたから、おめえさんらと約束したぞ。約束をするっていう事は、約束を守るって事だよなぁ。いいなぁ。名無しは、多分ずっと1人だったから、こういうの、いいと思うんだ。名無しは、おめえさんらみたいに、おめえさんらと仲良くなれるかな？」

「大丈夫だよおじさん。指きりしたもん！おじさんと私達、もうとっくに友達だよ！ねぇ、隼太？」

僕は頷く。

「そっかぁ。そいつは、いいな。うん、名無しと、おめえさんらは、友達なんだなぁ」

僕はつい、友達の事を思い出す。みんな今頃どうしてるだろう？今までなるべく考えないようにしていたけど、女の子はみんな美佳に殺されて、男友達は、どうなってるかわからない。難を逃れた奴もいるだろうけど、爆撃で死んじゃった奴もいるかもしれない。

僕は無性に、そいつらみんなに会いたくなって、涙が込み上げてきてしまって、でもなんとかそれを堪える。

僕は、泣いちゃいけないのだ（何故だろう？）。

泣いちゃいけない気がするのだ。

まぎらわすように、僕は名無しに声をかける。

「それじゃあ、僕の住所を教えます。思い出したら、家へいらしてください」

「大丈夫。名無しはそんなの知らなくても、友達の所に行けると思うさぁ。思い出したら、おめえさんらに会いにいくよ。待っててなぁ」

そう言うと、名無しは僕らに微笑んで、反対方向に歩き出した。僕は名無しの後ろ姿が消えるまで、ずっと背中を見つめている。美佳は

「ばいばいおじさん」

と叫びながら、僕の隣で、大きく両腕を振っていた。

アルマゲドンに至るまで　4　美佳が泣いた日、僕は泣けない

僕が《真っ黒》を見た日以来、空爆がない。好ましいと言えば好ましい。それは僕達が危険にさらされるからではなくて、美佳達が人殺しをしなくていいからだ。

けれど、懸念は拭いきれない。これが嵐の前の静けさだったら？

この頃僕は思うのだけど、そろそろ、何かを決めなければならない時が迫っているのかもしれない。

母さんが、口を開かなくなった。

『隼太、お前、いつまでこの生活を続ける気なんだ？』

父さんは言う。

『お前に責任はない。けれど、残念ながらこの事態を抜け出す為には、お前の行動が必要なんだ。お前と美佳ちゃんが離れなければ、永遠にこの生活が繰り返される。周囲を見ろ。荒涼とした廃墟だ。隼太よ、人間というのは、特に、俺達のような戦争を知らない人間というのは、こういう光景に耐えられないように出来ている。父さんはいい。しかし、母さんはどうだ？憔悴しきっている。解るか？今はまだ大丈夫でも、その内必ず医者が必要になる。美佳ちゃん達は、俺達を空爆からは守ってくれるだろう。でも、病気はどうだ？母さんに限らず、俺やお前がなにか大病を患った時、誰が俺達を助けてくれる？』

父さんの言う事は、もっともすぎて胸がとっても痛くなる。この頃母さんは、食事以外で起き上がる事がなくなった。食事と言っても、

果物や野菜を一口二口穫るだけで、栄養不足は否めない。

僕は荒涼とした廃墟を見つめる。耐えられないと思う事は今までなかった。でもそりゃあ、確かに初めから平然としていられる訳でもなかった。

鬼としのぎを削る毎日によって、少しばかり僕はタフになりすぎた気がする。

僕は心配をかけない為に、父さんと母さんには鬼との闘いを話していない。だけど、それでも、母さんは、完全に口を閉ざす前、僕にこんな事を言っていた。

『どうして、そんなに冷たい目が出来るようになったの？』

それについて、美佳に尋ねる。

『冷たい？どうだろ、私にはよくわかんないけど、だいぶたくましくなったのは事実だよね。断然前よりいい男ダゾ！隼太君☆』

美佳の望むようにすればするたび、僕は父さんや母さんから離れていく気がしていく。

僕は打算というものを働かせてみる。美佳と両親を秤にかける。

多分、１年前なら完全に両親に傾いたそれが、今では全く動きやしない。こんな事を考えてしまうのは狡い事だと思う。今更どっちかを捨てる事なんて、僕には出来ない。

美佳が僕の心の、こんなに大きな部分を締めている事の理由が、僕

には全然解らない。

やれやれ、僕と美佳は付き合っているのに、僕が美佳を好きな理由も、美佳が僕を好きな理由も解らないなんて…。

結論ーー

どうしたらいいか解らない。

僕は名無しに会いに行く。名無しなら、何かヒントをくれるんじゃないだろうかと、根拠のない閃きをあてにして。

僕は名無しを捜す。新宿御苑の芝生に行けば、また、会えるような気がしていた。

もちろん、事はそんなにうまい具合に進まない。

名無しはどこにもいやしなかった。だだっ広い御苑を全部捜しても、姿どころか、痕跡さえもありゃしない。疲れた僕は、芝生の上に寝っ転がった。

東京にしては、星の多い夜だった。

それを眺めているうちに、何だかとっても眠くなり、僕はすっかり、夢の中へ落ちていった。

夢の中で名無しに会った。

【おめぇ、どうして名無しを探してるんだぁ？名無しはまだまだ、思い出してないんだぞ？】

今日は、ちょっと聞いてもらいたい事があって…。

【名無しはおめぇの話を何でも聞くぞ。友達の話は何でも聞くんだぁ】

僕は名無しに、僕の進むべき道を尋ねる。

名無しは黙り込んで何度か頷く。

【おめぇはさぁ、どうしたいんだ?】

だからそれを尋ねてるんです。

【それがおかしいぞ。おめぇがどうしてぇかを、何で名無しに聞いたりするんだぁ】

それはそうだけど、でも本当に解らなくって。

【名無しは、名無しのしたい事がまだ解らないから悩んでる。おめぇは、おめぇのしたい事が解ってるのに悩んでる】

いえ、本当に解らないんです。

【それでも、大切なものが何なのかは解ってるだろうよぅ。名無しはそれさえわかんねえんだ。でもなぁ、1つだけ確かな事があっぞぉ】

何です?

【大切なものは、いっぱい持ってたらズルいって事さぁ。いっぱい持ってると、ズルいって事に気付いた奴が、おめぇから何個か奪っていく。数が多ければ、守るのだって大変なんだぁ】

僕は沈黙する。

【なるべく1個にしといたほうがいいぞう。1個なら、頑張れば何とか守れっかんなぁ。無理していっぱい守ろうとすっと、結局何にも守れなくなっちまうとおもわねぇかぃ】

そう思います。

【それなら、答えは簡単でねえか？】

はい。

【うん。それじゃあ、またな】

僕は目覚める。

家に帰る途中で、僕を探していた美佳に会う。美佳はどうやらカンカンで、顔が真っ赤で、かつてないほど鬼みたい。

「どこいってたのよ！まさか、浮気じゃないでしょうね？」

女の子を殺しまくった事実を忘れている程に怒り心頭の美佳を、僕は思い切り抱き締める。

「ちょ、ちょっと隼太！初めては外じゃ嫌だよ！隼太ノーマルじゃなかったの？」

僕は美佳のそんな言葉が、たまらなく愛おしくて、同じくらい悲しくって、目をきつく瞑って、その上歯まで食いしばる。

「隼太、泣いてるの？」

多分泣いているんだと思う。でも、僕は涙を流しちゃいけないはずで（だから、何故？）、そのせいか涙は出てこない。

「美佳…、僕さ、美佳の何が大好きなのか、まったく全然解らないけど、美佳の事が大好きだよ」

「隼太、喧嘩売ってくれてるの？」

「違うよ、本当に、大好きなんだ。ただ、何がそんなに大好きなのか解らないだけで…」

「だったら解ってからいいなさい！」

「ごめん、それを探している時間が、どうやらあんまりなさそうなんだ」

「隼太？」

「明日、僕は、父さん母さんを連れて街を出る」

美佳が僕の体を引き離す。

「どういう事？」

「母さんの体調が良くないんだ。放っておいたら、取り返しがつかなくなるかもしれない」

僕は名無しの言葉を思い出す。

大切なものは、1個にしておいた方がいい。1個なら、頑張れば守れる。

美佳は、僕が守るまでもなく、強すぎる。だったら簡単に、僕は両親を選択する事が出来るんだ。

簡単に…。

「それじゃあ、お母さんを運んだら、また戻ってくるんだよね？」

「それは多分、無理だと思う。色んな手続きがきっとあるだろうし、そういうのを踏んだ後で、僕達に自由があるとは思えないんだ」

「じゃあ、私がお母さんを殺すって言ったら？」

僕は美佳の瞳を見つめる。涙で滲んで、その後ポロポロ零れ落ちた。

こんなに悲しそうな美佳の表情を、僕は見たことがない。僕の決意はどんどん揺らぐ。だって、それはあんまりだ。今の美佳はどう見たって普通のか弱い女の子じゃないか。

バッサリグッサリのジェノサイドを躊躇皆無で敢行した、鬼のお姫様には到底遠くて遠すぎる。

それでも、僕は何とか次の言葉を紡ぎだす。

「悲しいけど、僕は戦う。僕も昔の僕じゃない。母さんだって事もあるけど、君に誰かを、もう無意味に殺して欲しくない」

ヒック、とか、グスっとか、そういう擬音が美佳から聞こえる。全然シリアスな音じゃないのに、全然コミカルに聞こえない。

「も…う、誰も殺さない…から。お願いだから…どこにも…どこにも行かないでよ。隼太がいない…なんて…やだよ。行かないでよ。行っちゃやだよ」

美佳はジャンジャン泣きまくる。これは簡単な選択肢だったはずなのに、選んだ後が、苦しすぎたし辛すぎた。

僕はもう一度、今度はさらに強く強く、美佳をひたすら抱き締める。

「ごめん…」

美佳の涙が肩を濡らす。

「隼太…なんて」

美佳もまたまた、思いっきり僕を引き離す。

「隼太なんて、大っ嫌い！！」

泣き叫びながら、美佳は星空へ消えていく。僕は、美佳の涙でぐっしょり濡れた肩に手を置き、その場に一度うずくまる。そろそろ泣いてもいいんじゃないかと誰かが言う。いやいやお前は泣いたらダメだと僕が言う。

立ち上がって、星空を見つめる。

たまらない喪失感に、僕はしばらく、その場を動けず、ただただ、1人佇んでいた。

この時点で、僕の選択は正しかったはずなのだ。

しかし、明日になると、さらにさらに冗談じゃなく過酷な選択肢が、僕の眼前に突き付けられる事など、当然にして残念ながら、今日の僕には知る由もなく…。

中幕　2　ヒューマン・フェイクに対する考察と光明

記憶を辿るも、やはり、モニカの顔を鮮明に思い出す事はなかった。死に顔の刹那のみが、マイケル・コール大佐にとっての、モニカ・ヘルムスリーの永遠となり、他の造形を全て覆い尽くしている。

それでも、モニカと過ごした日々は、情景として克明に蘇る。

それが、一層辛かった。

その時々で、モニカと何を話したか、モニカと何をしていたのかは、はっきりと思い出せる。しかし、その時々のモニカの表情は１つとして思い出せない。

モニカの笑顔は、眩かったーー何がどのように眩いのか。

モニカの泣き顔は、まるで煌びやかなステンドグラスにひびが入った様なものだったーーそれはつまり、どのような泣き顔だったのか。言葉としての印象によってしか、モニカの表情を振り返る事の出来ないジレンマは、マイケル大佐を加速度的に焦燥にからせる。

あるいはーー

ヒューマン・フェイクを根絶やしにすれば、モニカの表情は俺の記憶に蘇るのではないだろうか。

永遠となった死に顔に、再び生命の灯火が宿るのではないだろうかーー。

憎しみは過度の盲信に変わりつつある。マイケル大佐は、自身の崩壊を懸念しつつも、それを止める事が出来なかった。

縋るものが、何か1つでも欲しいのである。縋るものさえなかったのなら、ヒューマン・フェイクに対する復讐の原動力など、エンジンの切れかかった車に等しい脆弱なものだ。

モニカは帰ってこない。

解っている。

解っているからせめて、記憶の中にだけでも、モニカの笑顔を取り戻したいんだ。

ヒューマン・フェイクから、奪い返してやりたいんだ。

そのためなら、俺はどのような犠牲も厭わない。悪魔にだって、進んで魂を売り渡してやる。

この1年、ヒューマン・フェイクの生態については、数限りない程の議論が、あらゆる分野の科学者達によって展開されていた。

その中で最も焦点を据えられていたのが、ヒューマン・フェイクの身体的な構造である。

標準型の身長は、個体差によって多少のバラつきがあるものの、確認されている限り、平均2メートル前後。人類とそこまで歴然とした差がある訳ではない。

次に体つきであるが（これは視認のみの見解であるため、必ずしも正確であるとは言えないが）、筋肉は発達している。しかし、それは鍛錬を重ねた格闘家と同程度、と専門家は評する。

つまり、容姿が異形であるという点を除けば、ヒューマン・フェイクの身体構造は我々とそこまで変わらない、という事なのである。

にもかかわらず、ヒューマン・フェイクには、あらゆる兵器が通用しない。ミサイルを打ち込まれたところで、その体には傷一つつける事が出来なかったのだ。

しかも、彼（あるいは彼女）らは、人間を簡単に殺傷したり、戦闘機を玩具のように打ち落とす破壊力を備えている。さらには、音速に近いスピードで飛行する能力も有する。

物理的に有り得ない。そもそも、空を飛ぶ為には翼が必要なはずである。まして、音速に近いスピードで飛ぶという事は、体にかかる負荷も並大抵のものではない。生身の人間がほんの少し発達した程度の肉体で、到底耐えられるものではないのだ。

結論は仮定の域を出ないが、科学者達の通説によれば、ヒューマン・フェイクの体の周りには、何らかしらの、不可視のエネルギー（もしくはテクノロジー）が働いているという事になっている。それが時として、あらゆる物理攻撃を阻む鎧となり、あらゆる対象を破壊する武器となり、同時に音速で大空を翔る翼となっているのではないか、と。

いずれにせよ、それが人類にとって、また、この地球にとっても未知のエネルギーである事になんら変わりはなく、結局現存する兵器で不毛な攻撃を繰り返す事しか出来ないのが現状であった。

もし、1体でもヒューマン・フェイクの捕獲に成功したのであったなら、そこからそのエネルギーを研究し、光明を見いだす事も可能であるかもしれない。

だが、ヒューマン・フェイクには、1体でも全人類を根絶するだけの戦闘能力がある。何度か試みるも全て失敗に終わっていた。

ここで1つ、疑問が生まれる。

それほどまでに高い戦闘能力を持ちながら、彼らヒューマン・フェイクは、何故それをしないのかという疑問である。

彼らが意図的に殺害したのは、世界中の十代～三十代の女性だけなのだ。もし、彼らがすでに目的を果たしているとしたらー。

ひょっとすると、こちらから攻撃さえしなければ、人類はもう、安全なのではないか。

こう考える者も少なくない。

しかし、それには何の保証もないし、それ以前に、彼らから大切な者を奪われた人間に、そんなお為ごかしは通用しない。

ヒューマン・フェイクは敵なのだ。泣き寝入るなど、どうしてできようか。

復讐しろ、奴らを根絶やせ、地球を人間のものに取り戻せ。

世論は、地球防衛軍に畳みかける。

俺はそいつらの恨みも全て背負って、奴らを滅ぼさなければならないのだ。

マイケル大佐は言い聞かせる。

何故なら、光明が見えたのだ。人類が、ヒューマン・フェイクに対抗出来る唯一の道が、ついに発見されたのだ。

マイケル大佐はキャンプ内の自室にいた。全神経を、来るべき明日の作戦にむけて集中させる。

明日の作戦が成功すれば、恐らく、戦況は著しい変化を見せる。その作戦の、もっとも重要な位置を占める役割を、自ら志願した。

ノックの音がした。

「どうぞ」

と促すと、明日の作戦でマイケル大佐に同行する、通訳のクリス・ゲインズ二等兵が入ってくる。

「どうした?」

「明日は、よろしくお願いします。自分は、以前から大佐を尊敬しておりました。ご同行できる事に、身の余る光栄を感じております」

クリスはまだ顔にあどけなさを残す新米兵士だが、日本に留学経験があり、日本語の堪能さでは隊で彼の右に出る者はいない。その事から、今回の作戦に大抜擢されたのだ。

「こちらこそ、よろしく頼む。クリス、気を引き締めろよ。明日は

俺達が、人類の運命を背負うんだ」

「心得ています。大佐の足手まといにならないよう尽力します」

「あぁ。今夜は、早く寝ろ」

「はい」

クリスは部屋を出ようとしたが、思い出したように立ち止まり、マイケル大佐に振り返る。

「今夜は、星が綺麗です。大佐も御覧になったらいかがですか？」

マイケル大佐は苦笑する。願でも掛けろというのか。

ふと、モニカの事を思い出す。確かあれは、モニカとモンゴルに旅行に行った時だったか。

地平線の見える草原の上、無限の星が輝いていた。モニカはその光景に感動して〈星に願いを〉を口ずさんでいたっけな。

日本じゃ、モンゴルのそれには到底かなわないだろうが、それもー。

「それも悪くないな」

と呟いた後、クリスの肩を叩いて、マイケル大佐は部屋を出た。

アルマゲドンに至るまで　5　僕は決断を迫られる

僕は父さんと共に、母さんを連れて街を出ようとする。しかし、すごい数のいろんな名前の戦闘機が、空をうじゃうじゃ覆ったので、ひとまずそれを思いとどまる。

「タイミングが悪いな」

玄関に戻ると、父さんが忌々しそうに呟いた。

「せっかく隼太が決心してくれた矢先に…」

確かにタイミングとしては悪すぎる。よりによって今日攻撃を再開しなくてもいいのに。

何だか幸先がとてもよくない予感がする。

そして、悪い予感は大抵当たる。

僕は窓から空を眺める。すると、妙な事に気がついた。恐らく、戦闘機の数は過去最高と言っていい程たくさんあるのに、一機として攻撃してこないのだ。

鬼達も膠着した戦闘機に手を出さない。僕は昨日の美佳の言葉を思い出す。

『もう、誰も殺さないから…』

何だか、胸が痛くなる。もしかして、美佳が命令してるんだろうか

…。

「美佳…」

思わず口に出してしまった僕に、父さんの視線が突き刺さる。

「隼太、辛いのは解るが、もう忘れるんだ」

「…わかってるよ」

膠着状態は続く。戦闘機は空をぐるぐる回るだけで、相変わらず攻撃の気配は見えない。

牽制するように鬼達が戦闘機の周りを囲む。帰れと促しているように見えた。

鬼達の数もどんどん増える。戦闘機に死角をつくらないようにしているらしい。

僕は気付く。

多分、美佳が僕達を守ってくれているのだ。なるべく人を殺さずに、僕達が安全に逃げれるように。

美佳は本当にずるい。最後の最後に、こんな優しくならなくたっていいじゃないか。

「父さん」

「なんだ？」

「行こう。多分、大丈夫だ」

僕は父さんと母さんを先導するように、玄関のドアを開ける。

そして、銃を突き付けられる。

銃を僕に向けてドアの向こうに立っていたのは、外人の兵士だった。軍服に身を包んだ、体格がよく、青い目をした白人。年は３０を何個か過ぎていそうな感じだけど、厳格そうな雰囲気が、その兵士に年齢以上のものを漂わせていた。

傍らにいる、こっちは僕とそこまで年も変わらなそうな若い兵士が、日本語で僕に言った。

「両手を上げて、家の中に戻ってください」

僕は当然、彼の言葉に従った。このようにして、僕と家族は拘束された。

リビングが重い空気に包まれていた。、僕達は銃を突き付けられたまま、頭の上に手を置いて、ダイニングテーブルにうつ伏せにさせられている。兵士2人は僕達の背後に立っていた。

母さんは眠ってしまっていた。父さんは彼らに、母さんが精神的に衰弱している事を説明する。若い兵士が厳格な方にそれを通訳すると、厳格な方が頷いた。何かに安心したような表情だった。

若い兵士が僕達に言う。

「あなた達は、人間ですか？」
突拍子もない質問に、思わず僕と父さんは顔を上げる。
「動かない！」
若い兵士の怒号。
「質問には、はい、いいえ、だけで答えてください。答えるのはあなた、ミスター隼太だけです。解りましたか？」
僕はうつ伏せに戻って
「はい」
と言った。
若い兵士の質問。
「改めて聞きます。あなた達は人間ですか？」
「はい」
「では、あなた達はあの生物ーー我々はヒューマン・フェイクと呼んでいますがーーに今まで拘束されていたのですか？」
僕はそれについて考える。確かに、あれはある種の拘束であったように思う。美佳は力を誇示して、僕達の自由を奪ったのだから。
でも、本当にそうだろうか？僕がここを出る事を早急に決断していたら、美佳はやっぱり納得はしないまでも僕の決断を尊重したのではないだろうか。

事実、美佳達は街を出ようとする僕らを守っていてくれているのだから。

だとすれば、今までここを出れなかったのは、僕の美佳に対する恐れとか、好意が招いたものじゃないのか。

僕が、ここにいたいからいた、それだけの事じゃないのだろうか。

ここで、僕は

「はい」

と言うべきなんだと思う。彼ら兵士の目的とか正体は解らないものの、僕達の今後の立場を考えれば、そう言っておいた方がいいに決まっている。

それでもやっぱり、僕の口から出てきた言葉はーー。

「いいえ」

「では、あなた達は自らの意志でここに留まっていたのですね？」

「いいえ」

「それでは、回答が矛盾しますよ。その矛盾について説明してください。あなたの言葉で構いません」

「僕達ではなく、ここに留まっていたのは僕の意志です。父さんと母さんは、僕に付き合ってくれていただけですから」

父さんが小さな声で

「隼太…」
と呟く。
「なるほど、納得しました。ミスター隼太は、自らの意志でここに留まっていたのですね？」
「はい」
「では、あなたはあの生物達の仲間という事ですか？」
僕は答えるのを躊躇う。これに
「はい」
と言ってしまうのは、いくら何でもまずすぎる。
僕は気付かず震えていた。
「どうしました？早急に答えてください」
「いいえ、だ」
父さんが口を開いてしまう。
「隼太は無理矢理付き合わされいただけだ。やつらの仲間などでは…」
鈍い音がした。
「シャラップ」
という声。厳格な方が銃のグリップで父さんを殴ったらしい。父さんのうめき声が聞こえる。

厳格が英語を喋った。多分、若い兵士に向かって。僕はこの時、若い兵士が通訳であるという認識を初めて持った。

「質問に答えていいのは、ミスター隼太だけです。これは命令です。次に背いたら、撃ちます。いいですね」

「…はい」

「では回答をお願いします」

僕は鬼達を仲間だと思った事がない。その意味で、この回答は「いいえ」のはずだ。しかし、でも、美佳は…。

「時間を無駄にしないでください」

首筋にひんやりとした感触。銃口が、直接肌に触れていた。心拍数がぐんぐん上昇していくのがわかる。まいったな。

僕は

「いいえ」

と答える。

「仲間でないなら、何故、あなたはここに留まっていたのでしょう。あなたの言葉で構わないので教えてください」

「僕はあの、鬼達とは仲間じゃありません。でも、美佳は、美佳は僕にとって、仲間というか、その…」

「美佳というのは、ヒューマン・フェイクのリーダーですね？美佳

がなんだというのです？」

「恋人でした」

しばしの沈黙ーー。きっと驚いているんだと思う。

若い兵士が厳格の方に僕の言葉を伝えているらしい。

「では、あなたは美佳を愛していたからここに留まっていたという事でしょうか？」

「はい…」

唐突に髪の毛を掴まれて、引っ張られる。僕はなにが起こったのか解らない。テーブルに叩きつけられた。痛すぎる。さらに2回繰り返されて、鼻血がどばどば洪水になった。

立たされて、厳格に胸ぐらを掴まれる。殴られる。殴られる。殴られる。

痛みが徐々に消え、意識を失いかけた。

「やめろ！息子に何を！」

父さんが僕を助けようと、立ち上がって厳格に突っかかる。銃声。飛びそうな意識が元に戻った。

父さんは厳格に脚を撃たれていた。うずくまりながらも、悪魔を見る目で厳格を睨む。

僕は恐怖と困惑と驚愕で混乱する。まだまだ厳格は僕の顔を、腹を、殴る蹴る。僕が倒れても、止める気配は微塵もなかった。

ようやく、若い兵士が厳格を止める。厳格の表情ーーひきつっていた。怒りとか悲しみとか憎しみとかが、やはり入り混じって、厳格も混乱しているらしかった。

厳格は若い兵士に何かを伝える。

「マイケル・コール大佐からの言葉を、私なりのニュアンスの解釈も含めて訳し、あなた方に伝えます」

厳格の名はマイケル・コールというらしかったが、僕は痛くて、父さんが心配でそれどころじゃない。

「貴様ら、あれだけ人を殺しておいて、自分達は呑気に恋愛ごっこか？ゴキブリ以下のケダモノが！恥を知れ！」

恥を知った。いや、前から知っていた。この人の言うとおりだと僕は思う。

だけど美佳は人間じゃなく、そういう倫理はきっと通用しやしない。いや、《通用しなかった》。

「貴様らの暴挙に、一体どれだけの血が、涙が流れていると思う？貴様らの行動に、どれだけの人間が耐え難い憤りを感じていると思う？」

突きつけられた言葉は、銃口よりも僕には怖くて、マイケルの暴力よりも遥かに遥かに痛かった。

そして僕は、僕が泣けない理由を悟る。

僕のせいで（今まで僕は、美佳のせいにばかりしていた気がするけど、止められなかったのは、いや、止めなかったのは僕のせいで）、血とか涙が流れまくって、悲しむ人が大勢いて（僕は人間で唯一、美佳を止める事のできた人間だったのに）、そんな原因を作った僕が、涙の原因を作った僕が、些細な悲しみや不条理で、泣いていいわけがない（止めるのがあんまりに遅すぎた！）！

混乱して混乱した。あぁやっぱり混乱してる。僕は誰に許しを乞えばいいんですか？教えて神様仏様。

「人類は貴様らを許さない」

許しを乞いてもそりゃ無駄ですね。

「人類は貴様らを根絶する」

そうだ、死のう。それがいい。僕が１００回死んだって、到底償いきれそうにないけど、僕は死のう。

でも、母さんと父さんはどうなる？

「以上です。では、次の質問です」

以上ですって、ええ？

「あなたは、ヒューマン・フェイクを滅ぼす銃を持っていますね？」

護身銃の事だ。

僕は彼らの来訪と、戦闘機が膠着する意味を悟った。

戦闘機はおとりだったのだ。鬼達の注意を引きつけ、この２人の兵士を僕の家に安全に侵入させるためのーー。

この２人の目的ーー鬼達に唯一通用する武器、護身銃の強奪。

ここで僕が護身銃を渡せば、美佳達といえど、その命はーー。

『異次元に送り返すだけ』

…命は大丈夫なのかもしれない。

でも、いいのだろうか？

「答えてください」

腹に痛み。マイケルが僕を蹴った。

「答えてください」

マイケルは銃口を父さんに向けた。

「１０秒以内に答えなければ、大佐はあなたの父親撃ち殺すそうです」

名無しの言葉が蘇る。

ーー無理していっぱい守ろうとすっと、結局何にも守れなくなっちまうとおもわねぇかいーー。

その通りだった。

美佳、君の事は本当に好きで、やっぱり何で好きなのかは解らないけど、それでも本当に好きなんだ。

だけど、僕には父さんや母さんを捨てる事ができない。

美佳、ごめん…。

「はい」

「それでは、それを渡してもらいます」

護身銃は僕の部屋の引き出しにしまってある。僕は、2人に了解を得て、2人と共に部屋に入った。

「父さんを、手当てしてもらえませんか？」

若い方の兵士に言うと、マイケルにそれを伝えてくれた。マイケルは舌打ちしたあと、若い兵士に英語で言った。

「銃を渡してくれれば考えるそうです」

僕は引き出しを開けて護身銃を手に取る。

「これが、そうです」

ほとんど水鉄砲の護身銃を怪訝そうに眺めてからマイケルは受け取る。また殴られるかと思ったが、
「確認されたものと同一」
であると若い兵士が僕に言ったので、ひとまず安堵した。
ところで、いつ護身銃の存在が確認されたのだろう？
「使い方を教えてください」
僕は使い方を説明した。
「ヒューマン・フェイクの視界と、使用者の視界が重ならなければ発動できず、さらに、それには数分の充電を要する？電気はどこから供給するのです？」
「それは解りません。自家発電みたいなものらしいけど…」
若い兵士が僕の言葉を説明すると、マイケルは腕を組んで何かを考えている素振りを見せる。
「大佐は、ヒューマン・フェイクを呼んで実証しろと仰っています」
「それは無理です。僕には彼らに対してそんな権限はないし、そういうのは全部美佳が…」
口を滑らせた事を僕は目一杯後悔した。当然、後悔しても遅すぎた。
「では、美佳を呼んでください」
僕は必死に誤魔化そうとする。とんでもないくらい想像力が働いた

のだ。この場合、美佳を呼んでしまうとーー。
多分、美佳が消えてしまう。
「どうしました？大佐は呼べと言っていますよ」
「出来ません」
「嘘ですね。あなたは美佳と恋人である事をさっき自分で認めたのです。なぜ恋人を呼ぶ事が出来ないのですか？」
「昨日別れたんです。本当です」
マイケルの拳が今度は顔面にめり込む。痛みがさっきまでとは段違いだった。あれでも一応、手加減していたって事だろう。鼻の骨が恐らく折れた。
憤怒の表情で、マイケル大佐が僕を睨みつけ、英語でまくしたてた。
「この期に及んで、まだあの化け物を庇うというのなら、俺にも考えがある」
若い方が訳し、僕をリビングに戻れと促した。
父さんは傷口を押さえて、息もたえたえで床に悶えていたが、僕が戻ってくると、
「大丈夫か」
と僕を心配してくれた。
僕は鼻の痛みに耐えながら、マイケルが何を考えているのかを考え

た。ろくな事じゃなさそうなので、やっぱりやめる事にした。
ろくな事じゃなかった。2人の兵士は、母さんを抱きかかえて運んでくる。
母さんを父さんの傍らに放った。父さんが母さんを気遣った。
銃口が、父さんと母さんに向けられた。
「あなたが美佳を呼ばないのなら、この2人を殺します。あなたが私達に渡した銃は確かに確認されたものと同一ですが、デザインがデザインだけに、ただの玩具という可能性も充分ありますからね。それに、あなたが説明した発動条件も、少しばかり都合が良すぎる気がします。ようするに、ヒューマン・フェイクがいなければ実証できない。我々は偽物を持って帰るわけにはいかないのです」
今美佳を呼んだら、僕は、僕の眼前で美佳を失う事になる。
今美佳を呼ばなかったら、僕は、僕の眼前で両親を失う事になる。
選択は、ついに簡単でなくなった。
美佳は、この2人に従う。護身銃の実験台を自ら買ってでるだろう。何故なら抵抗した場合、この2人が僕を人質に取るからだ。美香のスピードなら、僕だけを助けて2人を殺す事も可能だがーー。
美佳はこの2人の兵士を殺さない。僕が、もう、人を殺して欲しくないと言ったから。
どちらかを選ぶと、どちらかを失う。もはや比喩表現ではなく、現

実に。

『異次元に送り返すだけ』

そうなら確かにそれでいい。でもどうしても僕の懸念は拭えない。

《真っ黒》を見てから美香が鬼退治をさせなくなったーー《真っ黒》がいると、異次元に送り返してはならない理由がある。

《真っ黒》は異次元にいる。多分、きっと、そういう事なんだろう。

《真っ黒》が何なのか解らなくとも、あんな大きくてまがまがしいものの元に、間接的にせよ僕の手で美佳を送る事はできないーー。

「時間は貴重です。1分で決断してください」

それでも、若い兵士は無情に僕の決断を迫った。

アルマゲドンに至るまで　６　僕が美佳を好きな理由

「さぁ、どうするんです？残り４０秒を切りましたよ？」

僕の体中は汗だくで、恐らく鼻も折れていて、気持ち悪いやら痛いやらで仕方ない。

でもそういうのはひとまず置いて、僕は決断しなければならない。

美佳を取るか、両親を取るか。

「あと、３０秒」

淡々と若い兵士はカウントダウンを続ける。

マイケル大佐は躊躇なくお前の両親を撃つだろうーー。

その表情からはそんな意志が読み取れた。やれやれ、血も涙もありゃしない。

僕はまたまた、現実逃避気味になっている。そんなこんなで、僕はまたまた、自分の悪癖に気付く。

僕は現実逃避をしすぎるのだ。いつだって決断を後回しにしてきたために、収集のつかない選択を迫られる。

「あと２０秒」

もう、どのみち後戻りは出来ない。

僕は大切なものを捨てる。

「隼太！」

父さんが叫ぶ。

「躊躇するな！父さんと母さんを見殺しにする気か！」

父さんの言葉が、僕にはまるで呪詛に聞こえた。

そりゃあ、見殺しになんかできないよ。だけど、躊躇は仕方ないじゃないか。

「あと１０秒」

「隼太ぁ！！！」

父さんが母さんを抱きしめる。

「５、４」

僕は刹那に、美佳の事を思い出す。

「３」

僕は刹那に、美佳と過ごした日々を思い出す。

「２」

僕は刹那に、美佳の言葉を思い出す。

『隼太が死んだら、生きてる意味なんてゼロだもん』

『愛し合うって、そういう事でしょ？』

美佳が死んだら、僕の生きてる意味はーー。

「1」

ゼロなんだろうか。

「ゼ」

「決めました」

マイケルは銃口を父さん母さんに向けたまま、僕を興味深そうに見つめる。

「美佳を呼びます。それ下げてください」

若い兵士が、胸を撫でおろした様に見えたのは、僕の気のせいだったかもしれない。

僕は若い兵士とマイケルに挟まれながら、玄関を出た。

空を見上げる。相変わらず、鬼達と戦闘機がそこかしこに飛び回っていた。マイケルは銃口を僕のこめかみに押し付ける。

「保険として、万が一美佳が我々に攻撃に移る前に引き金を引けるようにしておく。安心しろ、今の所大事な人質のお前に死んでもら

うわけにはいかない。あくまで、保険だ」

少しも安心できないマイケルの言葉を、若い兵士が通訳した。

僕は空に向かって、美佳の名前を叫んだ。

出来ればこないでほしかったけど、美佳はやっぱり来てしまう。とっても膨れていた美佳は、僕の顔が傷だらけなことに気付くと、顔色を一変させる。

「どうしたの、その顔」

僕が両隣の兵士に交互に目を配ると、察知したように、美佳は頷く。

「こいつらにやられたのね。あんた達、隼太によくも！」

「動かないでもらおう」

若い兵士が言う。

「ミスター隼太の命は、我々の手中にある。あなたが下手な動きを見せたら、マイケル大佐は引き金を引く」

突きつけられた銃口が微かに震えだした。マイケルの腕が振動している。マイケルの顔は、憎悪一色に染まっていた。

美佳を今すぐ殺したい。

言わずも、意志は伝わってくる。

「どういう事なの。隼太、説明して」

説明した。美佳は動揺を隠しきれない。こんな時になんだけど、動揺した美佳がやけに可愛らしく見えてしまった僕の罪はやっぱり重い。

「私に護身銃の実験台になれって事ね」

「あなたじゃなくとも、あなたが1体仲間を呼べばそれでもいい」

僕はいけないとは思いつつ、美佳がそうしてくれる事を願った。

「駄目よ。《今》撃たれたら、仲間が死ぬもの」

その言葉を、若い兵士は通訳しなかった。

「隼太…」

「なん、だい？」

「私が撃たれたら、隼太は悲しい？」

「悲しいよ」

「でも、お母さんとお父さんを見捨てる事は出来ないんだね」

「ごめん」

「いいよ。隼太には今まで散々付き合ってもらったし、私、広い心で許しちゃうから」

ニッコリ笑って美佳が言う。ニッコリ笑っているはずなのに、美佳の顔はワンワン泣いてる子供と同じだった。

「さ、兵隊さん。ズバンとやっちゃってよ」

美佳の言葉を若い兵士が通訳すると、マイケルは僕に銃を突き付けたまま、もう片方の手で護身銃を握り、美佳に構えた。

充電が開始される。

「ねぇ、隼太。私のこと、なんで好きなのかまだ解らない？」

まだ、解らない。でも、こんな場面でそんな事を言える程、僕は残酷に出来ていなかった。

「僕は…」

美佳の何が好きなのだろう。

美佳と何度もデートして、何度も手を繋いで、何度も何度もキスをした。

女の子と付き合うのが初めてだったから？

違う。

女の子に好きと言われるのが初めてだったから？

違う。

女の子とキスをしたのが初めてだったから？

どれも違う。

「もう！最後くらいはっきり言ってくれないと、化けて祟って呪うからね！」

僕は美佳の何がーー。

ピーーーーーーー。

試合終了のホイッスル。充電完了の合図。

マイケルの顔ーー笑っていた。こんなに歪んだ笑顔を見るのは初めてだ。

美佳の顔ーー悲しそうだった。死ぬ事よりも、僕の口から答えがでないのが悲しそうだった。

「隼太のバーカ。せめて、私のこと、忘れないでよね」

美佳の瞳から、涙が一粒こぼれ落ちた。

マイケルが護身銃のトリガーに指をかける。全てがスローモーションになった。

僕はとっさにマイケルの体を突き飛ばす。

マイケルの突き付けた銃が火を吹く。

頭をかする。

僕は美佳の方に走り出す。
マイケルに一瞬振り返る。
護身銃のトリガーを引いた。
銃口の先に美佳。
エメラルドグリーンの光。美佳とエメラルドグリーン。狭間に僕は飛び込んだ。僕の体を光が包む。熱と痛みが迸る。薄れゆく意識さえもがスローペース。僕は気付く。美佳を好きになった理由。僕は美佳に伝えようとする。美佳は僕の元に駆け寄る。口を開こうとする。開けない。僕が美佳を好きになった理由。

僕は美佳に会おうとする度、いちいち命を賭けてきたんだ。命を賭けた女の子を、好きになれない筈がない。その証拠にほら、僕はなんだかんだいいつつ、最後にだって、結局美佳に命を賭ける。やれやれまったく、美佳さん君の思い通り。僕は君の画策の上で、しっかり君を好きになったよ。君の為なら、命だって惜しくもなんともなくなっちゃったさ。参った参った愉快愉快。こんなに愉快に死ねるなんて、僕はなんて幸せ者だ。だけど、父さん母さんのこともそりゃあやっぱり心配だから、出来たら助けてあげておくれよ。

『僕が死んじゃったらどうするの？』

『決まってるじゃん。隼太の後を追って私も死ぬよ』

ちょっと待った。これで君に死なれたら、僕はまったく無駄死に犬死に骨折り損のくたびれもうけもいいとこじゃないか。

頼むから死なないでーー。

美佳の涙を見つめながら、とうとう僕の意識が飛んだ。

アルマゲドンに至るまで　7　アルマゲドンに至る

闇の中で名無しに出会う。名無しは、なんだか残念そうな顔をしていて、僕はついつい首を傾げる。

【どうしたんですか？】

【大切なこと思い出してよぉ。でも、ちょっぴり残念なんだ】

【何が残念なんです？】

【名無しはおめえさんらに、嫌われちまうかもしんねぇ】

【嫌われちゃうって？そんな事ありませんよ。だいたい僕、どうやら死んじゃったみたいだし】

【なにいっているだおめえ？名無しと喋ってるおめえのなにが死んじゃったんだ？】

【だってここ、あの世か何かじゃないんですか？どこもかしこも真っ暗ですよ】

【真っ暗なのもこの世のうちだ。大丈夫。死んじゃったら喋る事なんて出来やしねぇもの】

【じゃあ、ここはどこなんですか】

【名無しの住む場所さぁ。名無しの家はこの真っ暗全てだったんだ】

【もしかして、僕帰れます？】

【あぁ、帰れるさぁ。でも、帰るにゃちっと骨が折れるし、あんまり時間もないんだなぁ】

【時間がないって？どのくらい時間がないんです？】

【今の名無しが、名無しじゃなくなっちまうまでの時間しかねぇ。それはきっと、もうちょっとで終わっちまう】

名無しが名無しでなくなるという事の意味が、僕には解らなかったけど、生きれるんならこのまま死ぬのは忍びなさすぎ。僕は闇の中に四方八方目を凝らすものの、どこまでいっても闇闇闇闇。闇のオンパレードで、こんな世界で朽ち果てるのは、少々、大々的にごめんなさいと言いたいところ。

【帰る方法、教えてもらえません？】

【いいよう。名無しについておいで。でも、絶対遅れちゃ駄目だ。ここで名無しを見失ったら、おめえは2度とおめえのところに帰れない】

言うと名無しはすう～と浮いて、僕の方を向いたまま、僕からどんどん遠ざかる。

焦って僕は走り出す。はぁはぁぜぇぜぇひぃひぃふぅふぅ。あたりが闇だと、距離感なんて皆無なせいか、疲労も徒労も2倍増し。それでも僕は走りつづける。もう1度美佳に会えると思うと、僕の気分はハッピーハッピー。

兵士の言葉が脳裏をよぎる。

『人類は貴様らを許さない』

『人類は貴様らを根絶する』

やっぱり、気分は重くなる。僕は帰らない方が、このまま死んだ方がいいような気がする。人間に撃たれて死んだ事になる方がいいような気がする。

僕の足が、徐々に失速していく。

【止まるな。おめえ帰れなくなるぞ！】

名無しの声も遠ざかりながら聞こえてくる。

【でも、帰ったって、今更、どうやって生きていけばいいか解らなくって】

【悔やむとかそういうの、生きてねえと出来ねえ。でも自分が生きてる事を悔やむくらいなら、わざわざ生きてる必要もねえ】

【名無し…】

【おめえはもう、おめえが決めるしかねえんだ。どんなに寂しくたって、どんなに悲しくったって、どんなに自分が許せなくったって、おめえがどうするか決めるしかねぇんだ】

僕にこれ以上、何を選択しろっていうんだ？

【生きて、おめえの世界を救うか、死んで、おめぇの世界を見捨てるか、どっちかしかねぇんだ】

【どういう事です？さっぱり解らないよ】

【生きれば解る。死んだら解んねえ。でも言っとくと、おめえの生は、死なんかよか遥かにつれぇぞぉ。それでもよかったら、まだまだ走れぇ！】

僕の生は死なんかよか遥かに辛い？

ウンザリだね全く。だけど、それじゃあ、僕が死んでいいわけもなくなる。

世界中の涙の元凶が、楽な道を進むわけにはいかないもんね。

やってやるさ、生きてやる。名無しの言うことは、どれもこれも荒唐無稽で信じるにはあまりに突拍子がないけどーー。

そもそも、美佳の存在自体が荒唐無稽で突拍子もないんだから。この頃忘れかけていたけどさ。

僕は決めた。

美佳の罪は僕の罪だ。ちょっとばかり重すぎるけど、僕が背負ってやるべきなんだ。

だってさ、僕は人間だもの。

僕は走り出す。そう考えたら、思う事色々。母さん父さんは大丈夫

かな？美佳はどうなった？あの兵士達は？

帰ったら、今まで以上に忙しそうだ。

おら、ワクワクしてきたぞ！

【名無し！聞いておきたい事があるんだ】

無意識にタメ語になっていた。

【なんだぁ？】

【大切な、ことは、何だった、のさ？】

走りながらで、息が切れる。

【約束したなぁ。おめえには言わないとなんねえ。でも、そりゃあおめえが帰ってからだぁ。帰ったらきっと、解るはずさぁ】

名無しの声は心なしか暗かった。

僕は名無しに向かって走り続ける。

やがて、光が見えてきた。

【よく頑張ったなぁ。出口についたぞ】

僕は膝に手をついて、ぜぇぜぇ息を吐きまくった後、名無しにむかって親指を立てる。

【さぁ、おめえは帰れるぞぉ。この光に飛び込めば、おめえの世界がおめえを待ってる】

【解ったよ、名無し、でもさ、僕は、何から世界を、救えばいい？】

【だから、それは生きたら解るぞぉ。解るまで死ななきゃ、しっかり絶対解るんだ】

【名無しの、言ってる事、いつも、簡単なようで、難しいよね】

【大丈夫大丈夫。おめえは名無しの友達だぁ。名無しの友達は、その時がくるまで死にゃしねえ】

【オッケイ、解ったよ名無し。これまでより敵だらけだし、これまでより辛い事がたくさんあるんだろうけど、僕はその時まで、死に物狂いで生きてやる】

【うん。約束なぁ】

名無しは小指を差し出す。僕は名無しと指きりをする。

【なんだか、もう会えない気がする】

【心配すんなぁ。名無しが名無しじゃなくなる前に、おめえさんらには、もう一度だけ会いにいく。友達だから、頼みがあるんだぁ。今はまだ、名無しにも勇気がなくって言えないけど、その時がきたら、名無しはおめえさんらに頼みがある。聞いてくれっか？】

名無しは何を憂いでいるのだろう。口調と裏腹に、その言葉からは確かに絶望に似たものが感じられる。

【遠慮しなくていいって名無し。僕ら友達なんだもの。それに、名無しには今、大きな借りができちゃったからね】

【ありがとなぁ。さぁ、もう行くんだぁ。こことおめえさんらの世界は、時間っていうものの流れが違う。こっちは緩やか、おめえさんらの世界は早い】

これはようするに〇神と時の部屋みたいなものだとすんなり解釈。浦島太郎になるのはごめんだ！

【本当にありがとう！色々助かったよ、名無し！】

【気にするなぁ。名無しもおめえに、多分頼み事を聞いてもらうんだからよぉ。それよか、気をつけろ。おめえの世界じゃ、もう、とっくに始まってんだぁ】

【始まってるって、何が？】

【アルマゲドンさ】

僕は名無しの口からアルマゲドンという単語が出てきた事にちょっぴり驚き笑いながらも、光の中へ全力ダイブ。

で、実際始まっていた。ま、言うなればそれは始まりの第１章に過ぎなかった訳だが。

アルマゲドンは、始まっていた。

当面、まず、僕がすべき事はーー。

どうやって、助かろうかって事だった。

光のダイブで出てきた先は、雲の上の空でだったとさ…。

中幕　3　英雄となったマイケル大佐が、その身に狂気を宿すまで

夜ーー。

パレードは、盛大に行われていた。

キャンプ内は一般解放され、そこかしこが出店で溢れている。

フランクフルトをかじる日本の少年が、樹木に背をもたれ、腕を組んで憮然としているマイケル大佐を見つけると、握手を求めてきた。

マイケル大佐は無表情でそれに応じる。傍らにいるクリスが、

「もう少し愛想よくしてやったらどうなんです？」

と、ため息混じりに囁いた。

「こんな馬鹿騒ぎをするのは、早すぎる。ヒューマン・フェイクはまだまだ残っているんだ。気の緩みは、俺達人間に死角を生み出す事になる」

「でも、大佐が持ち帰った銃のおかげで、ひとまず、奴らに前ほどの脅威はなくなったじゃないですか。我々にだって奴らを殺せる事が解ったんです。今まで散々やられてきたんだ。今日くらい、大佐も羽根を伸ばしたらどうです？」

出来る事なら、俺だってそうしたいさーー。

喉の奥まででかかった言葉を、無理矢理飲み込む。

モニカの笑顔が、泣き顔が、その他全ての表情が、俺の中に蘇るま

で、俺は休む訳にはいかないーー。

あの日、ヒューマン・フェイクのリーダー核である、Ｍｉｋａという少女に撃った光は、彼女を庇ったＨａｙａｔａ少年に直撃した。

少年はエメラルドグリーンに包まれた後、その姿を消失したのだ。

Ｍｉｋａは、嘆き、悲しみ、叫んだ後、マイケル大佐達の前から飛び去った。

運が良かった、としか思えない。あの時Ｍｉｋａが、Ｈａｙａｔａ喪失に怒るのも忘れる程に絶望していなかったら、マイケル大佐とクリスは、確実に肉の塊と化していた事だろう。

本部に、護身銃と呼ばれるその銃を持ち帰った時には、歓声がマイケル大佐達を出迎えた。

しかし、素直に喜ぶ事が出来ない。護身銃の使用法はあまりに制限が多すぎて、実用的でないのだ。

もっとも、それも杞憂に終わった。科学者達は、護身銃を徹底して調べあげ、１つの結論に至る。

ーーこの銃は極めて高いテクノロジーで成り立っているものの、構造事態はさして複雑ではないーー。

実用性の低さは、この銃に設けられたセーフティーであるという事が判明するまでに、それほどの時間は掛からなかった。どのような設計で、使用者と対象者の視界の重複を発動条件に設定できるのかは定かでなかったが、セーフティーを外す事自体は、実に容易だっ

たのだ。これによって、ヒューマン・フェイクの虚を突く作戦も可能となった。

充電によるタイムロスも、この（想定の上での）作戦によって解決される。

あとは、いかに数を増やすかであった。

護身銃の量産計画は、ヒューマン・フェイクの根絶に必要不可欠な要素であるものの、銃を形成している金属が地球上に存在していない事は明らかだったし、そもそもあのエメラルドグリーンの光の正体も解らずじまいであったのだ。量産など夢のまた夢である。

では、と一人の科学者が言う。

着眼点を変えてみたらどうだろうか？

それは、護身銃の数を増やすのではなく、一丁の護身銃で多くのヒューマン・フェイクを滅ぼす方法を考える、という意味の言葉であった。

実は、興味深い事が解ったのですーー。

エメラルドグリーンの光にふれた物質は、ほぼ大体において消滅する。消滅ーーこれほどこの形容が似合う現象もあるだろうかーー。それは完全な消滅である。残滓を一切残さず、物質はこの世界から損なわれるのだ。まるで、そもそもの初めから、そこには何も存在していなかったとでも言うように。

しかし、例外があったーー。

科学者達はあらゆる形状、材質、硬質の物体を光の実験に使用したが、１つだけ消滅しないものが発覚したのである。

鏡であった。

鏡だけは消滅する事なく、逆に光を跳ね返す（この反射によって、科学者が１人《消滅》した）。

これを応用し、防衛軍は極めて原始的な増幅装置をキャンプ内に建造した。

鏡のメガホンである。

メガホン型の巨大な筒。

それは作戦本部室の中から、基地の全体としての天井を斜めに穿ち、空へと至った。

しかも東西南北四方向に、１つずつ建造されたのである。

いずれも本部室内にあるメガホンの穴は護身銃の銃口と同じサイズであった。

それが空へ至るころには、実に直径１５０メートルを越す奈落へと変貌する。

護身銃は、もはや銃ではなく、大砲以上の兵器の名を冠する方が相応しい物となったのだ。

初弾は、新宿上空のヒューマン・フェイクの群れへと発射された。
トリガーは、護身銃強奪に成功したマイケル大佐によって引かれる。
筒を通り抜け、１５０メートルの円として昇華されたエメラルドグリーンは、一瞬にして人類の敵を消滅させる。

マイケル大佐は、このようにして英雄と呼ばれる事になったーー。

当初観測されたヒューマン・フェイクの総数は５６４１７体。消滅の後残ったのは、その半数に満たない数であったーー。

モニカの表情は、まだマイケル大佐に帰ってこない。

確実に変わったのはーー。

バーンズ司令官が、モニカの死後、初めてマイケル大佐にねぎらいの言葉をかけた事だけだった。

大量の消滅の後、ヒューマン・フェイクは新宿から姿を消した。

束の間の平穏の後、人類とヒューマン・フェイクの闘争は、かつてなく激化していく事になる。

人類が護身銃の力を得た事によって、その戦況は一時的にではあるが、若干人類側に有利となった。

この後、ヒューマン・フェイクは、再び世界中に現れ、虐殺と大量破壊を繰り返す。対抗するように、人類も護身銃の光を中継する為の巨大な鏡を、やはり世界中に建造した。いたちごっこが続いていく。

一年後…。

世界の総人口は半分に減り、ヒューマン・フェイクの総数もまた、十分の一以下にまで減少していた。

度重なる巨光の発射、そして目標の誤射は、地球の環境を激変させていってしまう。

それでも、マイケル大佐と地球防衛軍は、トリガーを引くのを止めなかった。防衛軍内で、この事態を憂う者は、バーンズ司令官を除いて、誰一人存在しなかったのだ。

世論は完全に2つに別れた。即ち、この人口減少の理由を、ヒューマン・フェイクの虐殺によるものとするか、防衛軍による強行が原因であるとするか、である。

どちらも間違っていない双方の意見に解決策はなく、ここにもまた、対立が発生する。

それは同時に、マイケル大佐を英雄とするか、悪役とするかという対立であったにもかかわらず、マイケル大佐の耳には、彼らの議論が届く事なく、変わりに、モニカの囁きが幻聴のように（否、客観的にそれは幻聴である）響いていた。

女神の音色でモニカは唄う。

【奴らを殺して。一匹残さず根絶やしにして。何もかもを省みず、私の為だけに、憎き仇を八つ裂きにしてーー】

そうすればーー。

お前の笑顔は、俺の元に帰ってくるのか？

【そうよ私は帰ります。あなたの元へ肉を伴い帰ります。だからあなたは、止まることなく殺し続けて。その終焉で、私はあなたを待っているから】

あぁ、解ったよモニカ。殺し続ける。奴らが一匹残らずこの大地から消えるまで、お前の笑顔に会えるまでーー。

俺は奴らを殺し続ける。

引き金を引き続ける彼の姿が、バーンズ司令官の目に、一匹の修羅として写った事など、彼自身には、もはや些細な事にすぎない。

アルマゲドンが終わるまで　1　全てが壊れた世界の上で（前書き）

これより物語は後半へと移行します。いいものを書けるよう努力いたしますので、どうか最後までお付き合い下さい。

アルマゲドンが終わるまで　1　全てが壊れた世界の上で

僕は落ちて落ちて落ちまくる。雲を突き抜けると、大地が段々見えてきた。というかここは何処ですか？そこかしこが月みたいなクレーターで溢れてるじゃん。

街とかどこにいったんだろう？

あぁでも結局僕は死ぬ？

そりゃそうだわ、この高さじゃ助からないよ。下が海ならよかったけど、残念ながら固い土だし。

いやそれ以前に、空気の抵抗で体がバラバラになりそうに痛い。痛すぎる。痛いの痛いの飛んでいけ。飛んでいるのは僕自身。違うよ僕は落ちてるの。

名無しには悪いけど、さっそく約束守れない。

僕は眼を閉じ死を受け入れた。受け入れた後、追い出した。

いくらなんでも、落ちてグチャグチャじゃ、色んな事に失礼すぎる！

僕は生き抜く方法を詮索する。どんどん地上が近くなる。とりあえず、足掻いて足掻いて足掻きまくる。

「何ジタバタしてるんだ、隼太君」

死の間際の幻聴に、僕は怒りを覚えずにはいられない。そりゃ無様

かもしれないけど、死ぬ前に足掻いたっていいじゃないか！僕にだってそのくらいの権利はある！もっと優しい言葉をかけろ！

ふわっと落下が収まった。

やばい、気付かない内に死んじゃったのだろうか？

「それにしても、よく無事だったな。どうやって《あれ》から逃げてきたんだい？」

何だか聞き覚えのある声がした。まぁそりゃそうだ。天国に行けば知り合いだっているだろうし。

「おい、隼太君。目を閉じて笑うのはよした方がいい。何だか、不気味だ」

僕は目を開く。あら不思議、大地はまだまだ遠かった。どうして僕は浮いてるんだろう？

というか僕の腰を誰かが抱いてくださってる。この態勢じゃ顔が見えない。

宙ぶらりんになりながら、僕は

「どちらさまでしょうか？」

と尋ねてみる。

「久しぶりだな隼太君。美佳の親父だ」

美佳の父さんが助けてくれたのか。いや人間でない事くらいは解っていたけど。だって空を飛べるんですもん。だけど、久しぶりって

？久しぶりも何も、しょっちゅう会ってた気がするけど。

「君が異次元に飛ばされてから、もう1年にもなる。あぁそうか、君の感覚ではさして時が経っていないのかな」

僕は名無しの言葉を思い出す。時の流れが違うって…。違いすぎるよ名無しさん…。

さて、僕が知らず知らずの内17歳になっていた事はこの際仕方ないからよしとしよう。さらに、僕の顔から痛みが消えて、多分折れた鼻が元通りになっている事もラッキーだからよしとしよう。

それより美佳は、どうなった？父さんと母さんは？そして世界はどうなったんだ？

僕は美佳のおじさんに、疑問をたくさんぶつけてみた。

「美佳は…、いや、これは後にしよう。君の両親は恐らく保護された筈だ。部下の1人が、あの兵士に連れていかれるのを目撃している。世界はご覧の通りだ。我々を滅ぼそうとする、君達人類の手によって、そこかしこが穴だらけだよ。あれを見なさい」

あれって言われても、どっちだか解らなかったけど、遠くに大きな長方形が光っていたから、あれとはあれの事なんだろうと理解した。で、あれは一体何かしら？

「鏡だ。君達人類が、増幅させた護身銃の光をあれに反射させて我々を狙っている。多くの同胞が殺された。正確には、殺したのは光ではなく、《奴》なのだがな。隼太君、君はどうやって《奴》から逃げてきたんだ？」

美佳のおじさんが言う《奴》とは、恐らく《真っ黒》の事なんだろう。でも僕が飛ばされた真っ暗の中に、少なくとも《真っ黒》はいなかった。

僕は美佳のおじさんに抱えられて、世界中を飛び回る。酷い光景だった。新宿だけじゃなく、世界中の都市、街、村はただの大きな穴になり、人間の姿なんてほとんど見えやしないのだ。ただ、巨大な鏡がいたるところで、無残な世界の姿を嘲笑うように映し出しているだけだった。

時々、エメラルドグリーンが鏡と鏡の間中をいったりきたりするのが見えた。

「君達人間の悪知恵には驚嘆したよ。あの光は、地上に落ちない屈折率で放たれている。我々に鏡を破壊させない為の防衛策だ。何かが割って入るまで、消える事がない。我々に向かって放つ光と、鏡を破壊させない為の光を使い分けて、じりじりと我々を追い詰めているらしい」

僕は空の上でおじさんの説明を聞く。

この1年で、何がどのようにして変化したのか。

名無し…、僕が救うべきは、この荒れ果てた世界だっていうのかい？だったらそれは、想像を超えて辛すぎる。ちっぽけな僕が救うには、少々救いがなさすぎたりはしないだろうか。

「なんにせよ、隼太君。君の帰還を歓迎する。運がよかった。たまたま私が飛んでいた空域に、次元の穴が開いたのだから」

「そういえば、おじさんは何処に向かっているんです？僕を何処に連れて行くんですか」

「今の我々の住まいだ。君達で言うところの、北極」

北極と聞いただけで鳥肌が立った。僕の格好で北極なんて、世の中で最悪のジョークよりも寒すぎる。

「安心しなさい。我々のチカラは、君1人の体温を保つ事くらいは造作ない」

おじさんの言葉は、おじさんが熊みたいな体つきと顔をしている事よりも、美佳の父親であるからこそ、説得力満点だった。

「美佳も、北極にいるんですか？」

おじさんは押し黙ってしまう。嫌な予感がした。

「教えてください。僕は美佳に会うために、この世界に帰ってきたんです」

それから、この世界を救う為？に。

「君が消えた後、君を追って異次元へ向かった。《奴》がこの世界に近付いていた事を、我々はその時初めて知ったよ。美佳が打ち明けたんだ。まったく、気付いていながらこんな事態になるまで言わなかったという事は、よっぽど君と離れたくなかったんだろう。私も妻も、美佳を必死に止めたが、無駄だった。諦めかけていた頃に、美佳は君と同じように、空から落ちてきたんだよ。まったくの無傷

でね。《奴》に接触しながら、それは奇跡と言っても過言じゃないな。我々は大いに喜んだ。しかし、美佳は…」

再びおじさんが押し黙る。僕は続きを促した。

「眠ってるんだ。我々が何を試みても、目覚める気配がない」

安堵と不安が同時に僕に押し寄せる。美佳が生きていた喜びと、眠ったままに対する危惧。

「しかし、君なら、美佳が初めて愛した男の君だったら、目覚めさせる事が可能かもしれない。根拠も何もありはしないが、私も妻もずっとそう感じていたんだよ。美佳の眠りを覚ます事は、君以外の誰にもできはしないってな。隼太君、美佳の父親として、君に頼む。娘を、救ってやってくれないか」

「もちろんです。僕に出来る事なら、何だってします。でも、教えて下さい。《奴》って、一体何なんです？」

僕を取り巻く環境は、《真っ黒》を見たあの日から変わっていった。僕はそろそろ、《真っ黒》の正体について知らなければならない。

「天敵さ。我々だけでなく、あらゆる次元に存在する全ての生物にとってのな」

おじさんは、さも忌々しそうに、吐き捨てるようにそう言った。

アルマゲドンが終わるまで　2　僕は美佳の目を覚ます

北極に来たのは初めてで、北極の氷の一つ一つが、僕の想像を遥かに越えて綺麗な事も初めて知った。

沢山の流氷の上に、沢山の鬼達が生活していた。1番大きな流氷の上に、美佳と美佳のおばさんがいた。

美佳は氷の上で、死んだように眠ってる。

僕とおじさんが氷の上に降り立つと、鬼達は歓喜（多分ね。よく解らないけどうれしそう）の雄叫びをあげた。

「隼太ちゃん！」

おばさんが僕の元へ走り寄って、僕をきつく抱きしめる。

「生きていたのねえ、あぁよかった。これで、美佳もきっと目を覚ますわ」

僕は横たわっている美佳を見つめる。顔を覗きこんで、耳を近付けた。

息づかいが確かに聞こえる。大丈夫、美佳は生きている。

鬼達が僕らの頭上に集まってくる。みな一様に、姫の目覚めを待ち望んでいるようだ。まいった。僕はどうやら過度に期待されている。

「さぁ、隼太ちゃん。美佳にブチュッとやっちゃって」

「はい？」

「隼太君。君達の世界で、眠り姫を目覚めさせるのは、王子様の情熱キッスと相場が決まっているだろう」

おじさんの情熱キッスという単語に少々引きつつ、眠り姫の凍った寝顔に触れてみる。

冷たい。

「気にすることないのよ。なんならディープも許しちゃうわ。ねぇあなた」

「そうとも。舌をジュルジュル掻き回すんだ隼太君」

僕はこの人達が美佳の両親である事をなんだかとっても納得した。

「あの、お言葉ですけど、僕にはそんなんで美佳が起きるとは思えませんが…」

「隼太君。何を弱気になっているだ」

「そうよ隼太ちゃん。やらないなら、おばさんが隼太ちゃんの舌引っこ抜いて塩焼きにして食べちゃうからね」

おばさんの目はマジだった。むしろ僕の舌を引っこ抜いて塩焼きにして食べちゃう事もそれはそれで悪くないという様子なので、僕は渋々従うことにした。

僕は何をやってるんだ？

美佳の顔がとっても近い。こんなにオーディエンスに囲まれながらするキスは初めてなので（なんせ廃墟がデートスポットだ）、僕の心臓はバクバクドキドキ。

「さぁ！いっちゃって隼太ちゃん！」

「いくんだ隼太君！何なら胸を揉んでも構わんぞ！」

黙れ馬鹿親共と頭の中で言いながら、僕は美佳に唇を重ねた。

そして僕は、美佳の中に吸い込まれる（何が起こっているんだろう…）。

美佳の中で僕は浮遊し、眼下に大海原が見える。

透明な海だった。何もかもが透けていて、海底までもがくっきり見える。

僕はどうやって海に潜ろうか考える。何故って、海の底に美佳がいたのだ。これがやっぱり眠っているのだ。

僕は浮遊した事が人生で一度もないので、浮遊した状態で人間はどうやって上昇だの下降だのをするのか解らない。

しかしそこらへんは都合が良かった。僕の体は下降を始める（ここはやはり現実じゃない）。

海面を突っ切って、そのまま美佳へ。この海に生物はいないようだ。
僕は美佳を両腕に抱える。美佳の名前を呼んでみる。
美佳は僕に応えない。
ちょっと起きてよ美佳ってば。
これで君が寝たままだったらモチベーションが続かないって。
よくは解らないけど（僕にはよく解らない事が多すぎる）、僕は世界を救う事になるらしいんだ。君がいなきゃ到底無理だしごめんだよ。君がいなきゃ世界を救う意味がない。だってこれは罪滅ぼしだ。僕が背負った君の罪を、世界を救って減らそうと思います。そんなの甘いと、きっと皆は言うだろうけど、それでもゼロより大分マシだと思うんだ。
何より君が大好きです。だから起きてよお願いだ！
僕は叫びを愚痴にする。水中なのに何で喋れるんだろうと思ったが、ここは本当は美佳の中だし、ここは本当の水中じゃないんだろう。
僕は自棄になって美佳にキス。
美佳は目覚める。
頭突きを一発、僕の頭に食らわせて。
「何すんのよ痴漢！ぶっ殺して…」
僕の首をバッサリいこうと美佳は手刀を構えるも、痴漢が僕である事に気付くと…、

「…嘘」

と言って、

「…嘘でしょ？」

と言って、

「本当に隼太なの？」

と言って、

「夢じゃない？」

と言った。

この世界が夢じゃないと断言する事は出来なかったけど、ひとまず僕は、

「夢じゃないよ」

とニカって歯を出し笑ってあげた。

美佳は唇を噛む。どうやら涙を堪えようとしているらしい。うんうん、とってもプリティーガール。

美佳が僕に歩み寄る。僕は唇をおちょぼ口にして待った。なんせこの展開は情熱キッスに決まっている。

決まっていなかった。情熱キッスの代わりに、僕の頬に痛恨の平手打ち。頭が飛ばなかったのは、ここが現実世界でない事に起因するでしょう。

僕は頬を押さえて美佳を見る。ワッツ？何故僕は殴られなければならない？それも現実世界なら生存が困難な程に強烈な一撃で…。

あぁ、僕の生活は不条理に満ちている。

美佳は僕の胸に顔を埋める。

「バカ隼太…。死んじゃってたらどうすんのよ！隼太が死んだら生きる意味なんてないんだからって、私前に言ったじゃん！」

我慢しきれず声を上げて美佳は泣く。ここ最近、随分と僕は美佳を泣かせているみたいだ。

僕は美佳の頭をそっと撫でる。

「ごめんよ。でも、どうやら僕にとってもそれはおんなじらしいんだ。美佳が死んだら、生きてる意味が、ゼロかどうかは解らないけど、極めてゼロに近いくらい薄くなるのは、どうやら間違いないらしい。だから僕も、美佳を救わずにいられなかったんだ」

「そこは、素直に、ゼロって言いなさいよ！バカバカ隼太！調子乗ってるとぶっ殺すわよ！」

両の拳で僕の胸をポンポン美佳が叩いてた。

「まぁ、結果的に2人とも生きてるんだからよしとしよ。僕はもう、

決めたからさ」

「何をよ」

「二度と美佳を離さないよ。この先どんなに選択肢が増えたって、僕は美佳を選んでいく。だからきっと、もうこんな事はないんじゃないかな？」

美佳はその言葉にワンワンギャンギャン泣いちゃって、僕はこの言葉がすごい罪深い事を知ってたけど、それでも言って良かったと思った。

人類が僕らを許さないなんてのは当然だし、もう許して貰うには世界が大分痛々しくなっちゃったから…。

僕は美佳と世界を救う。史上最悪の矛盾を抱えてヒーローになるんだ。

「それじゃあ美佳、そろそろ起きてよ。何にせよ、眠りっぱなしは体に悪い」

「眠りっぱなしって、起きてるじゃん」

「でも寝てるでしょうよ。周りを見て」

美佳は周囲を見回して、首を傾げる。

「海ですけど何か問題でも？」

あぁ、そういや僕の彼女は人間じゃなかった。僕は水中で会話が出来る事がどれほど不自然であるか説明しようと思うものの、美佳に

とっては自然だったら何の意味もありませんねと思い直した。
という事で、そこは省いて経緯を説明する。
美佳は神妙な面持ちで、合間に何度か頷いた。
「そんな事になってたんだ…。そういえば私、隼太を追って異次元に飛び込んで…。何だろう、そこで私、何かを見た気がする。何かとてつもなく怖い事。それを境に気を失って…」
「それって、僕が見た《真っ黒》じゃないの？」
「うん、多分そうなんだけど、私が怖かったのは《あいつ》がいる事じゃなくって、なんかもっと別な事…」
でもまぁ思い出せないから、思い出したらまた言うねと付け加えて、美佳はひとまず上を、海面を見上げる。
「私、寝てるんだよね？」
「うん、寝てるよ」
「起きたらどうしよっか？」
「決まってるさ」
「決まってるの？」
「美佳にはよく解らないだろうし、僕にも当然よく解らないけど」

「何よ」

「僕と美佳で、この世界を救うんだ」

世界最悪の大量殺人鬼と、殺人鬼に殺人をさせる理由を作った人間のコンビが世界を救う。

悪くない、というより、悪すぎる。悪すぎてもう、逆にそれが良くなったという感じ。

美佳はポカンと口を大きく開けて、

「隼太、いつからオタクになっちゃったの？」

と呆れたように言った。

やっぱり僕の生活は不条理に溢れている。でも1話のラストを思い出せ。

僕にはどうやら、Mっ気があるのだ…。

アルマゲドンが終わるまで　3　僕は鬼達と議論を交わし

さてさて、美佳が目を覚ますと、おじさんおばさん始め、鬼の一族は大喜び。

鬼達は日本語で、

はやた！はやた！

と僕の名前を賛唱した。いつのまに日本語喋れるようになったのかしら？

そのあと、緊急のミーティングが開かれる。氷の上、もしくは上空に、あらゆる種類の鬼達が集まってきた。

おじさんが言う。

「さぁ！我等の姫も隼太君のお陰で無事に目を覚ました！これより人間共との最終決戦に打って出る！目指すは日本！相模原の地球防衛軍キャンプだ！護身銃の光には充分注意しろ！《奴》に食われたらおしまいだ！」

呼応するように鬼達が雄叫びを上げる。

ていうか、おじさん達は人類を滅ぼす気なんですね。

「戦の女神の帰還により、勝機は再び我々に戻ってきた！殺された同胞の仇を討つべきは、今なのだ！」

僕はこっそり美佳に耳打ちする。

「戦の女神って？」

「私の事。今まで、たくさんの異世界で戦争してきたけど、ほとんどの勝利が私１人の手によってもたらされてきたんだって。なんでも、歴代の一族の中で、私の戦闘能力ってピカ一なんだって。パパとママも私にはかなわないらしいよ。戦った事ないから本当にそうなのかは知らないけどさ」

異世界っていうのがどれだけあって、どれだけ美佳達が戦争してきたのかは、あんまりにも恐ろしいから聞く事が出来なかった。

おじさんが言うには、美佳のスピードなら護身銃の光をかいくぐって、敵の大元を叩く事が充分に可能らしい。だからこそ美佳の目覚めを待っていたということらしいのだけど…。

僕は質問せざるを得ない。

「あの、一応聞きたいんですけど、この戦争を回避する事は出来ませんかね？」

「隼太君。無理だ」

「いや、でも、僕も一応人間なんで、さすがに全人類を滅ぼされる訳にはいかないんですよ」

「隼太君、何が言いたいんだ？」

僕の心臓はトクトク唸る。僕はとんでもない事を言おうとしている。

「皆さんが、どうしてもそれをやるっていうなら、僕は皆さんを止めなきゃならないって事です」

空気が変わる。ここが北極である事を差し引いても、あまりの寒気にガチガチな僕だが、言葉は口をついて出た。

「戦ってでも」

どよめき。蔑みとか、憐れみとかいうニュアンスでそこら中に溢れた。

この人間は、我々相手に何を馬鹿げた事を抜かしている？

「隼太君。君は自分が今、何を言っているか解っているのか？」

「解ってます」

「本気という事か」

「はい」

「では、君は我々とどのような方法で戦うというのだ？」

「議論です」

美佳のおじさんとおばさんが、顔を見合わせた。

「今の状況のどこに議論の余地がある？君は我々に、指をくわえて滅ぼされろと言いたいのか？議論で我々を止めるというなら、納得

のいく説明をしたまえ」

僕は胸に手を当てる。美佳はそんな僕を無言で見つめる。そんな美佳に、僕は無言で笑いかける。

「皆さんと人間の価値観が違う事はもう充分承知してます。だから、どっちが悪いとか、そういう事を考えるんじゃなくて、皆さんにとっても人間にとっても、マイナスにならない案を模索するべきじゃないでしょうか？」

「何故、我々が人間にそこまで譲らなければならない？」

キッパリおじさんは言い放つ。そりゃ先に女の子を殺しまくったのは美佳なんだから、その程度は譲歩して欲しいと言いたいところ。

しかし、そういう意見はおじさん達に通用しないし、僕だって美佳の罪を背負ったからには、そんな一般論に頼るわけにもいかなかった。

「いくら美佳が強くたって、人間の手に護身銃がある以上、これから先に皆さんの犠牲がゼロであるという保証はないでしょう？犠牲を最小限に留める為です」

何より、美佳に死んで欲しくなかった。美佳は僕の手を握る。

僕達の議論は平行線をキープしていた。おじさんが言うには、犠牲を気にするにはあまりに同胞が死にすぎている、彼らの為にも命を賭けて戦わなければならないし、今までもそうしてきた、という事らしい。

僕が言うのは、だからつまり、そうは言ってもどれだけの犠牲が出るかは解らないんだし、可能性が少ないにしろ、返り討ちにあう事だってあるかもしれないんだから、ひとまず人類根絶は待ちましょうお願いという事だった。

父さんや母さんが１年かけたって全く説得できない相手を、まだまだ１７歳（本当は１６歳）の僕が、こんな短時間で論破できるとも思えなかったけど、とにかく僕は全力を尽くす。

「そもそも隼太君、人類根絶の範疇に君は含まれていない。つまり、我々は君を人類とみなしていないんだ。だから君が自分の命を憂いで人間を庇うなら、この議論は無意味なんだよ」

「そうじゃなくって、ええと、だからですね、僕はもう誰にも死んで欲しくないんです。おじさん達にも、人間にも。双方が何とか納得して、うまい具合に共存出来る方法はないのかなって、そういう事です」

ーー大切なものは１つにしておいた方がいいぞぉーー。

名無しの言葉が再び僕の頭をよぎる。解っている。でも、もう少し考えさせてよ名無し。

僕なりに世界を救おうとしてるんだ。君との約束を守る為にも。

「無茶だ隼太君。今更どうやって共存する？《奴》がこの次元域に存在している以上、我々はこの世界で生きていかねばならない。この世界で生きていく為には、もはや人類根絶は避けて通れぬ道なのだ」

《真っ黒》がいるとおじさん達は他の次元に移動する事が出来ないらしい。《真っ黒》を掃討する事も、なんたって天敵だから無理らしい。《真っ黒》って結局何なのさという疑問は、論点が変化してしまいそうなのでここでぶつけるのは止めておいた。

そして答えの出ぬまま議論は続く。僕もそろそろ疲れてきたなという頃に、ようやくそれはやってきた。

「ていうか」

唐突に口を開いた美佳に、その場にいた鬼達みんなが視線を投げる。

「私、人類根絶しないんだけど」

さらっと言い放ったその言葉とは裏腹に、僕の手を握る美佳の力は強くなっていった。

アルマゲドンが終わるまで　4　答えを美佳とおばさんが出す

何を言っている？

おじさんがそう言うのも無理はなかった。顔の筋肉が引きつって、熊みたいな顔が、熊らしさを失っていく。

「だから、人類根絶しないってば私」

困ったおじさんの顔を見つめながら、美佳はきっぱりと言い放つ。

「何故だ？」

「だって隼太と約束したんだもん。もう誰も殺さないって」

おじさんが僕を睨んだ。熊らしさを失ったおじさんの顔が、徐々に鬼へと変貌していく。

「隼太君、君は…」

「だから私は誰も殺さない。隼太の言う通りにする」

僕を見つめながら美佳はそう言う。

「待ちなさい美佳」

おばさんが口を開いた。

「私達が人間と戦争した理由は、元々あなたのワガママにあるのよ

ボンクラが。いい？あなたのせいで同胞がたくさん死んだのよ？そのあなたが、自分の責任をとらないでどうするのマザファッカ」

まくしたてるおばさんを、おじさんがたしなめる。何もそこまで言わなくても…と、しどろもどろのおじさん。

「大体、あなたが甘いからいけないのよ！昔っから甘やかしてばっかりで、美佳はこんなにワガママになっちゃったじゃないダメ亭主！しっかり美佳を叱りなさいよ！」

おばさんはおじさんの頭をはたく。おばさんの顔も鬼へと変わった。

美佳はさらにさらに、きつく僕の手を握り締める。美佳の顔を覗く。怯えていた。何に？多分、自分の言葉とその選択に。

「とにかく、人間と戦わないっていうなら、私があんたをぶちのめすわよ」

おばさんだった鬼は憤怒の形相で美佳を怒鳴りつけた。いやだからそれはまずいって…、とおじさん。

「いいよ。私、ママと戦う」

何だか事態は恐ろしく変な方向に向かっていた。

「みんなも、そうした方がいいと思うでしょ？」

美佳は鬼達に尋ねるが、返事は返ってこなかった。

「やってやるわよ美佳。あんたには一度、キツいお灸が必要だった

みたいだからね」

おじさんの制止を振り払い、おばさんが戦闘態勢をとる。

「オッケーママ。私だって一回くらい親子喧嘩してみたかったもん」

美佳が僕の手を離す。僕を見つめる。大好きと呟く。

僕がちょっと待ってと言う前に、美佳とおばさんが空へ跳ぶ。

美佳とおばさんの戦いは早すぎて見えない。ただ、痕跡として周囲の流氷がどんどん砕け散ってった。

僕はおじさんの元へ駆け寄る。

「おじさん、止めてください！」

「無理だ。妻の力は私の1，5倍程、美佳の力は2倍以上ある。手出しの出来る領域じゃない」

情けなさそうにおじさんが言った。実際とても情けなかった。やれやれ、お父さんの権威が失墜しつつあるのは人間に限った話じゃないみたい。

美佳の言ったように、一番強いのは美佳らしいけど、それじゃおばさんの敗北は必至のはずだ。それなのに…。

美佳が空から、ズサッと落ちた。傷だらけで。

僕は美佳に駆け寄り抱き寄せた。

「美佳、大丈夫？美佳？美佳！」

美佳は息を荒げながら、平気、と何とか言葉を口にする。

おばさんが降りてきた。おばさんも、やはり所々に傷を負っている。

「美佳、元の姿に戻りなさい。いくらあんただって、人間の姿のまま私に勝てると思ったら大間違いよ」

元の姿っていうのは鬼の姿なんだろう。そうか、美佳もやっぱり元々はああゆう姿をしているんだろう。そして真の力はその姿に戻らないと発揮できない。

何で美佳は鬼の姿に戻らないんだ？

「だって、隼太の前だもん」

胸を痛くさせる言葉だった。

「呆れたわね馬鹿娘。隼太ちゃん、どきなさい。まだまだ、折檻は終わってないわ」

おばさんが僕達に近付いてくる。僕は美佳に覆い被さるように、おばさんに背を向けて抱き締めた。

美佳は責任と戦っているんだと思った。自分が招いた結果に対し、その身をなぶる事で、償おうとしているのだと思った。僕の前なら元の姿に戻れない。だからおばさんには抗えない。

この場合の責任というのは、人間達に対するものではなくて、鬼達に対してのものだけだ。

僕は僕なんかが守れる訳ないと知りながら、美佳を守ろうと必死だった。

僕はあっさりおばさんに摘まれ、軽くポイと投げられる。

転がって立ち上がった。おばさんへ走る。氷に滑ってまた転がった。立ち上がった。

おばさんは片手で美佳の髪の毛を掴んで、宙にぶらぶらさせている。

「自分の足で立てるわね？」

美佳が目だけで頷くと、おばさんが手を離した。僕は走る。

「隼太ちゃん」

おばさんが僕を止める。

「邪魔しないで。これは母と娘の問題なのよ」

僕は止まる。

おばさんは美佳の頬を平手で叩く。美佳は抵抗せずにおばさんの目をじっと見つめていた。

「あんた、好き勝手にやりすぎたわ。今までもずっとそうだったわね。自分の思い通りにならないと、思い通りになるように、たくさ

んの世界を壊してきた。それはあんたが、自分が一番強いと思い込んでいたから。そして周りの大人が、それを認めてしまったからよ」

そこでおばさんはおじさんの方へ振り返り、キッと睨んだ。おじさんは目を逸らしてたじろいでいる。

「それは確かに、その通り。あんたは強いわ。間違いなく。けれど、こうなる事もある。あんたの強さに振り回されて、挙げ句の果てに死んでいった命がある」

なぜか、おばさんの言う命には、人間のものも含まれているような気がした。

「だからあんたには義務がある。死んでしまった命に対して、償う意味での義務がある。あんたは人間を殺し、人間に仲間を殺された。解る？命を奪うっていうのは、それがどんなに小さな生き物でも、しっぺ返しを食らう可能性があるって事なの。だから、それを防ぐ為に、私達は人間を殺さなければならない」

おばさんの言葉は、倫理とかそういうものからはかけ離れていたけれど、論理として正しいように思われた。

「だから私達は人間を滅ぼすわ。復讐と防衛。その２つの目的を果たす為に。もしあんたがそれを拒否するなら、あんたが私達を滅ぼしなさい。人間を守りなさい。人間はあんたを許せないだろうし、私達だってあんたを許さないわ。それでも良ければ、あんたの最後のワガママ、ママがきっちり聞いてあげる」

ざわざわと鬼達が騒ぎだした。おじさんは頭を抱えている。

美佳は目を閉じ、それについて必死に考えているようだ。

ややあって、美佳が口を開いた。

「それで、いい」

静寂が周囲を支配した。

「私、隼太と生きる。他の全部を棄ててでも、隼太と一緒に生きていく」

「そう。解ったわ」

おばさんが美佳の頭を撫でる。僕は訳の解らない気持ちになった。凄く嬉しいし、凄く悲しいのに、それらは僕の中でぶつかり合わず、等しくすっぽり納まっていく。

「私達はあんたを許さないけど、親としてあんたの覚悟は受け入れてあげる。行きなさい」

おばさんが僕の方を向いて、お辞儀した。

「隼太ちゃん。娘をよろしくお願いします」

僕はお辞儀を返すだけで、何も言えなかった。

「美佳、あんたに2日チャンスをあげる。その期間で人間を止める事ができたら、とりあえず人間の根絶を見送る隼太ちゃんの意見を飲むわ。出来なかったら、あんたと隼太ちゃんを殺してでも、私達は人間を滅ぼします。いいわね？」

それはおばさんの優しさなんだと思う。2日というのはかなりシビアな猶予だけれど。

美佳は頷いて、ありがとうと呟いた。そりゃあどれだけ覚悟を決めても、おじさんやおばさんと殺し合うのは嫌なはずだ。

「あんた達もそれでいいわね？」

おじさんを含めた鬼の面々は、誰も反論しなかった。

美佳は僕の元へ歩み寄る。僕は美佳の元へ歩き出す。

僕達は顔を見合わせる。これで僕らは、完全に2人だけになってしまった。

美佳は小さく
「行こう」
と僕に微笑んだ。

僕も小さく
「うん」
と美佳に微笑んだ。

「さよなら」
と美佳が全ての鬼達に呟いた。

「さよなら」
と僕も全ての鬼達に呟いた。

美佳は僕を抱えて空を飛ぶ。

おじさんやおばさん達の顔があっという間に見えなくなってしまったが、美佳は一度も振り返らなかった。

中幕　４　Ｈａｙａｔａの帰還を、マイケル大佐が祝福する

それを地球防衛軍が捉えたのは、それがキャンプに到達する１５分前の事だった。

北の空域を超スピードで飛行する2体のヒューマン・フェイク。否、1体は人間であった。

マイケル大佐は驚きを隠せない。それがＭｉｋａとＨａｙａｔａであるからだ。

人工衛星は確かにその2人の映像をキャッチしていた。

何故だ？あの少年は1年前、俺が撃ったＭｉｋａを庇って死んだはず…。

作戦本部は騒然としていた。先程から護身銃で射撃を試みるも、まるで当たる気配がない。

誰もが恐怖に震えていた。ーー殺される。

しかしマイケル大佐だけは、体の奥底から湧き上がる歓喜を隠せず、思わず快心の笑みをこぼす。

モニカ。やはりお前の言うとおりだ。死者は蘇る。そういう事だったのだ。お前もあの少年の様に、この世界に帰って来るんだな。

【ええそうよ。私は帰ります。あなたの元に肉を伴い帰ります。だからあなたは殺し続けて】

マイケル大佐は作戦本部室の長椅子に腰掛けて、目を瞑り、自身の幻想と対話した。

「大佐！奴らはあと１０分程でこのキャンプに辿り着きます！もう駄目だ。逃げましょう！」

クリスがマイケル大佐に駆け寄ってきた。

問い掛けに返事がないので、クリスは怪訝そうにマイケル大佐の顔を覗く。

「大佐？」

マイケル大佐はクリスの姿など、まるでそこに存在しないというように、宙を眺め続けている。

「大佐！」

マイケル大佐の体を揺さぶりながら、クリスが叫んだ。

やがて、今まで目を開いたまま眠っていたとでもいうように、気だるそうに、マイケル大佐は視線を移す。

「クリスか。どうしたんだ、そんなに慌てて」

「何を言ってるんです？奴らが来たんです。あの少年は生きていたんですよ！恐らく、我々に復讐する為にやってきたんだ。早く、逃げましょう！」

生きていた？

マイケル大佐はクリスの言葉がさも信じられないという素振りで、顔の前で手を振った。

「何を言っている？あの少年が生きていた訳ないだろう？生き返ったんだよ。あの少年は一度死んで、それから生き返ったんだ」

この時初めて、クリスはマイケル大佐が狂気に浸食されている事に気が付いた。明らかに、自分が知っているマイケル大佐の言葉ではない。焦点もどこか定まっていないのだ。

「大佐こそ何を仰いますか。死んだ人間が生き返るはずないでしょう！彼は《生きていた》んですよ！」

クリスは必死に、マイケル大佐を現実に引き戻そうとしていた。彼の言葉は、それを願うからこそ発せられた言葉なのだが、いかんせん、クリスは気付くのが遅すぎた。

「生き返るはずないだと？」

マイケル大佐が立ち上がった。

「えぇ、生き返るはずありません。そんな事より、早くここから…」言い切る前に、クリスの頬に衝撃が走った。痛みに変わるまで、時間はあまりかからない。

「貴様に何故そんな事が解る！？」

間髪入れず、もう一撃。クリスが床にしりもちをついた。マイケル大佐はさらに、クリスに覆い被さり、マウントポジションを取る。胸倉を掴みながら、殴る。頭突き。殴った。

「言え、貴様に何故そんな事が解るんだ！」

混乱した作戦本部室の面々は、逃げる事に必死で、誰も2人に気付かない。

殴り、殴り、殴った。クリスの顔が文字通り、腫れ上がって歪んでいく。

クリスはこれまで、こういった狂気が根底にある暴力を受けた事がなかった。それは彼にとって、あまりに理不尽で、あまりに耐え難い暴力だった。

得体のしれないマイケル大佐の怒りに対して、クリスはなすすべもなく、ただ恐怖し、ただ殴られた。

何かを言おうと思ったが、何を言えばいいのか解らない。それ以前に、口内が血で満たされて、そもそも言葉を発する事事態、今の彼には困難であった。

「生き返るんだよ。人間は生き返るものなんだ。あの少年は身をもってそれを証明したんだ。逃げるだと？馬鹿を言うな！俺達は彼の帰還を祝福するべきなんだ！」

恐るべき矛盾だった。その矛盾が、一層クリスを恐怖させる。

1年前、確かにマイケル大佐はあの少年を憎み、人類の怨みを代弁して暴力に打ってでた。暴力に正当性が生まれるかは別としても、その行為は少なくとも納得できるものだったのだ。

しかし、マイケル大佐は今、その少年の生存を祝福しろと言っている。それをしないクリスに暴力を働いている。

マイケル大佐の暴力に、もはや納得出来るものはなかった。マイケル大佐は、すでにマイケル大佐で無くなっている。

クリスは、訳も解らず泣いた。痛みによるものなのか、それとも尊敬していたマイケル大佐の変貌に嘆いているのか。

いずれにせよ、クリスは声をあげて泣いた。

「泣くな！俺達は笑うべきなんだ！少年の帰還を、モニカの帰還を、俺達は笑うべきなんだ！」

なおもマイケル大佐は殴り続ける。クリスの視界が虚ろになり、意識の線が切れそうになった頃、マイケル大佐は吹き飛んだ。正確には、誰かに顎を蹴り上げられた。

クリスはその人物を見る。厳格と強靭を形にしたらこの男になるだろうというその人物の名を、傷だらけの唇で、何とかクリスは口にした。

「バーン、ズ、司令、官」

バーンズはクリスの体を抱き起こし

「1人で立てるか」

と優しく尋ねる。

ふらつくものの、問題はなかった。

「お前は先に逃げろ。私はこの男と話がある」

バーンズの視線が、立ち上がろうとするマイケル大佐の元に向けられた。

「し、かし、大佐や、司令官も、早くしないと…」

息も絶え絶え2人を気遣うクリスの姿勢に、バーンズは悲しそうな表情を見せた。

「いいんだ。すまなかったな。この男がこうなってしまったのには、私にも責任の一端がある」

本部室に警報が鳴り響いた。それに伴い、赤いランプが至るところで点灯を始める。

「時間がない。間もなく、奴らはここにやって来る。私達を気遣ってくれるなら、お前は今すぐ、ここを去るんだ」

射抜くようなバーンズ大佐の眼光に、クリスは断る事が出来なかった。ここで断るという事は、なにか、バーンズ司令官の、人間的な尊厳を損なう行為に思われたからである。

痛みに耐えながら、しかし、きっぱりと敬礼した後、マイケル大佐の豹変を憂いつつ、クリスは本部室を出た。

マイケル大佐は唐突な顎の痛みに、しばし事態を把握出来なかった。しかも、自分の顎を蹴り上げたのがバーンズだという事実に気付くと、さらなる困惑が彼の思考を乱し始める。

立ち上がり、バーンズを見据えた。

「何をするんです」

返事はない。ただ、バーンズの空虚な視線がマイケルに返ってくるだけだ。

沈黙。

けたたましい警報が確かに鳴り響いているのに、周囲は静寂に包まれていた。

静寂を切り裂いたのは、バーンズの行動だった。深々と、マイケル大佐に頭を垂れる。

「お前にはすまない事をしたな。謝ってすむとも思えないが、それでも、聞いてくれないか。私が、間違っていたよ。悪かった」

驚愕、混沌、その他ありとあらゆる理解不能を示す感情が、マイケル大佐を駆け巡る。

司令官は、何を言っている？

「娘が死んだ事を、お前の責任になどするべきでなかった。お前を責めるべきではなかったんだよ」

小さいながら、バーンズ・ヘルムスリー司令官の懺悔が、警報にかき消される事はなかった。

アルマゲドンが終わるまで　5　そして、終局は近付き

僕は美佳に両脇を抱えられながら空を飛ぶ。

「ねぇ、隼太。これからどうするの？」

どうしよう。

「うん、そうなんだよね。やっぱりどちらにせよ、護身銃は取り戻さないといけないな」

「それじゃ、光の大元へ行く？」

僕はそれについて考える。美佳が一緒なら、あるいは誰も傷付けずに護身銃を奪い返すのも、そこまで困難ではないだろう。けど、単に奪い返すだけだったら根本的な解決には繋がらないんだよな…。

かといって、あのマイケルという兵隊さんを見る限り、どう考えても話し合いが通用する次元じゃないし…。

「ねぇ、どうするの隼太？」

実を言うと、何をするにも、その前に、僕にはしたい事がある。

父さんと母さんを探すのだ。多分無事だと思うけど、母さんの体調も大分悪かったし、どうしても気にかかってしまう。

とはいえ、美佳のおばさんが与えてくれた2日間の猶予をそれに費やす訳にもいかないし、それに、美佳の気持ちも察しないといけな

い。

美佳は家族を捨てて、僕を選んだのだ。その僕が、今ここで家族の安否を気遣うのは少しばかりアンフェアだと思う。

無性に名無しに会いたくなった。名無しなら、何か適切なアドバイスをしてくれる気がする。

「ねぇ、ちょっと聞いてるの隼太？」

「ごめんごめん。色々考えてたんだ。美佳ちょっと疲れない？よかったら、一度下に降りようよ」

「私は別に平気だけど、隼太が言うなら」

美佳と僕は着地した。

ここはどこだろう？僕が地理に弱い事を別にしても、ちょっとばかり荒れ過ぎていた。

元々は森だったんだと思う。折れた木々の残骸が何とかそれを思い起こさせるのだけど…。

木が折れすぎて、森特有の、ある種の匿名性みたいなものが失われていた。

つまり、木々に隠れて、ひっそりと生きている生物の面影みたいなものが、綺麗さっぱり損なわれている。

だから太陽の光が遮られる事もなく、ガンガンに日を照らしつける

事によって、地面もカラカラにひび割れているのだ。
僕と美佳は大きな切り株（折れ株？）に、背中合わせで腰を下ろした。
「酷いね。これも護身銃の影響かな？」
何気なく、美佳にそう尋ねてみる。
「多分。降りる前、南の方向の大きな鏡がこっちに向いて立ってたのが見えたから」
僕は溜め息をつく。
鬼達が隠れられないようにこんな事をしたんだろうか？
「やれやれ」
「隼太って、やれやれって台詞がやたら似合うよね」
僕は心の中でやれやれと呟く。
「で、どうする？休憩したら、行くの？」
行くのか行かないかと言えば、行くべきだよね、やっぱり。
問題はどうやって、停戦を促すかなんだ。
「隼太が何を迷ってるのかよく解らないけど、私はずっと一緒なんだから、どれをしたって大丈夫だよ」

僕はドキリとする。背中合わせなので、美佳の表情は見えない。僕のドキリもバレてない。

ずっと一緒なんだから…？

そうなんだよね。ずっと一緒なんだ。でもずっと一緒だという事は、僕があれほど躊躇していた結婚をするって事で、でも結婚をするには法律的な手続きがいる訳で、法律的な手続きをするには、僕と美佳はあまりに世界の敵に過ぎる。

そういえば、僕も美佳も、もうどこにも属してないんだ。人間と鬼達の中間で、どちらからも疎まれている。

この世界に、僕らの居場所はもうないんだ。

泣きそうになる。それでも涙は出てこない。

『おめぇはもう、おめぇが決めるしかねぇんだ。どんなに寂しくったって、どんなに悲しくったって、どんなに自分が許せなくったって…』

こういう時、僕は必ず名無しの言葉を思い出す。名無しの言葉は、いつも僕の未来を言い当てる。

解ってるさ。大丈夫だよ名無し。世界は必ず救ってみせる。

「美佳」

「何？」

「全部終わったらさ、２人でどこか遠くへ行こうか」

「何々、新婚旅行？」

浮かれてる美佳の顔が、見えなくたって僕には見える。

「悪くないね、新婚旅行も」

「絶対、行こうね」

「うん、約束するよ」

背中から、美佳の体温が伝わってくる。

僕の中で、美佳の体温が勇気へと変換されていく。

いいさ、何とかしてやるよ。これまでだって行き当たりばったりで何とかやってきたんだから。今回も行き当たりばったりで、世界を救うまでの事さ。

「隼太のパパとママにもキチンと挨拶しなきゃいけないね」

美佳に、僕の悩みはバレていたらしい。美佳は僕の思っている以上に、僕の事を理解しているようだ。

「ありがとう」

と僕は言う。

「気にしないで」

と美佳が言う。

父さんと母さんにするのはきっと、別れの挨拶になるだろうけど、それでも、ここまで僕を育ててくれた両親に、何も言わずに消えるのはよくない。

顔を見ないで話し合うと、普段できない会話が成立するって事を初めて知った。

美佳の体温が名残惜しいけど、僕は重い腰を立ち上げる。

「行こうか」

僕は美佳に振り返る。

「どこまでだって、一緒にね」

美佳は僕に振り返る。

いつもの笑顔。そこにあるのが当たり前の笑顔。

美佳は僕を抱えて空を飛ぶ。

途中、護身銃の光が何発も僕らにとんでくる。

「しっかり捕まって！」

美佳は高速でジグザグに光を避けまくった。頭がガンガンする。

「ていうか、何で連射が出来んのさ？」

「充電の仕方によっては、１０発まで撃てる仕組みになってるの！」

当時の僕も、それを知ってれば楽だったのに…。

「いくわよ隼太！」

「オッケー美佳！かっ飛ばしてくれ！」

あまりの速さに視界から色が消えていく。というか普通、生身の人間が耐えられるスピードじゃないでしょうに。

北極で美佳のおじさんが、僕の《体温を保った》ように、鬼の一族には、何かそういうものをコートするチカラがあるみたい。

あっという間に日本へ到着。護身銃の光はもう襲ってくる事はない。

彼方に、巨大な鏡のラッパ？というかメガホンが見える。

あれが地球防衛軍のキャンプなのか。

何もかもが、上手くいきますように。作戦は何もないけれど。

僕は神様に祈る。

もっとも、世界中の大体における神様がそうであるように、やっぱり僕が祈った神様も、願いを聞いてくれる事は無かった。

それから、空で《真っ黒》の気配を感じた。今回は姿が見えなかったけど、確かに空の奥で僕達を見ている。名無しと話したあの闇の中に行って以来、僕はそういう気配に敏感になっているようだ。

どうやら、終わりは近付いている。そんな予感がしていた。

アルマゲドンが終わるまで　6　最後の扉が開かれる

それにしても広い。娯楽施設やら宿泊施設が混在していた。

僕は軍隊の基地とかそういうものに詳しくないので、まさか映画館とかハンバーガーショップまであるとは思っていなかった。

たくさんの建物の間に街路樹とかも並んでいて、一見テーマパークを思わせる。

その中心に、一際大きな建物があった。

横長の長方形で、灰色。天井部分からあの巨大な鏡のメガホン。

僕と美佳は着地して、その建物の入り口を目指す。

激しい攻撃を予想していたのに、キャンプ内はガランとしていて、人気がほとんど感じられなかった。

「みんな逃げちゃったみたいだね」

「私にびびったんでしょ。都合いいじゃん」

僕と美佳は特に走る必要がないのに走った。美佳もどうやら空からの《真っ黒》の視線に気がついたらしい。

ゆっくりと事を運ぶ余裕がない。そんな気がしたのだ。

ガラス張りの入り口が見えてくる。僕達が入ろうとすると、1人の

兵士がそこから出てきた。

あれは、僕の家でマイケルの通訳をした若い兵士だ。

「どうする隼太？捕まえて、案内させる？」

「う～ん、確かにあんまり時間がない気がするし、気は進まないけどそれでいこう。でも手荒な真似はしちゃだめだよ美佳？」

「解ってます。ちょっと脅すだけ」

美佳は猛スピードで若い兵士の眼前へ。若い兵士は両手を上げて降参のポーズ。その表情は…赤い？というか、顔中血だらけだ。何があったんだろう？

美佳は首をちょんぎる仕草でその兵士を脅しつける。可哀想に…。兵士は亀の子みたいに地面に縮こまってしまった。

僕は急いで駆け寄って、美佳に、あとは僕がやりますと促す。

「顔を上げてください」

ゆっくり兵士が顔を上げる。僕はちょっとギョッとする。

遠目で見るより、兵士の顔は酷かった。目が腫れ上がって、唇はぶよぶよ。どういう暴力を食らえばこうなるんだろう…。

「こ、殺すのか？」

「殺しません。それよりその顔どうしたんですか？」

兵士は口をつぐんでしまう。聞かれたくないみたい。
「殺さないから、教えてもらえません？」
「…大佐に、マイケル大佐にやられたんだ」
僕と美佳は顔を見合わせる。仲間割れ？
「どうして？」
美佳が興味深そうな顔で尋ねた。
「知らない。大佐は、君の生存を喜んでいた。早く逃げようと促したら、この有り様だ」
マイケルが僕の生存を喜ぶ？タチの悪い冗談に思えた。
「何で僕が生きているのが嬉しいんです、あの人は？」
「だから、知らない。生きているというか、大佐は君が生き返ったと言っていたが」
生き返った？
「じゃあその大佐はどこにいるのよ？」
「バーンズ司令官と、作戦本部室に…」
「そこに護身銃もあるんですね？」

兵士が罰の悪そうな顔で目を反らした。正解らしい。

「案内してもらえますか？」

「大佐と司令官を殺すのか？」

僕は溜め息をついた。美佳はともかく、僕まで殺人鬼と思わせるのは心外だねもう。

「殺しませんてば。あの銃を返してもらって、ちょっと話し合いをしたいんです」

兵士は首を振る。

「信じられない。あの時の復習に、殺すに決まってる」

「あ～、めんどくさい！」

美佳が建物の壁に久々のワンツーパンチで貫通パンチ。固そうだった壁が発泡スチロールみたいに砕け散る。

「いいから早く案内しなさい！あんた殺して探す事だって出来るんだからね！」

あぁ、美佳そんな事したら逆効果だって…。

「やはり、殺す気じゃないか」

兵士は震えて今にも泣きそう。

「解りました。いいです、もう行ってください」

「ちょっと、隼太？」

「この人には多分何を言っても無駄だよ。それに、美佳の言う通り、ちょっと時間掛かっても僕達で探すのだって不可能じゃないから」

何より、誰かを虐めるのは好きじゃないのだこの僕は。

「さ、早く立って。もういいですから」

口をあんぐりあけて、腫れ上がった目で兵士が僕を見つめた。

「殺さないのか？」

「だから、元々殺す気なんてないんですってば」

煮え切らないので、思わず僕は手を差し出す。

兵士は少々躊躇したものの、僕の手を握りしめて、一気に立ち上がった。

「それじゃ、気をつけてください。何に気をつければいいかは解らないけど」

え～、いいの～？と膨れっ面の美佳をなだめて、僕達は入り口に足を踏み入れる。

と、その時僕は思い出す。

振り返って兵士を見る。彼は呆然と僕達を眺めていた。

「あの、僕の両親どうなりました？」

何を聞かれているのか、最初兵士は解らなかったようで、変な間が生まれた。

やがて思い出したように兵士が口を開く。

「君の母は、この近くの病院に入院している」

僕はその後兵士が言った住所を記憶する。

「父は当初、ある施設で我々の取り調べを受けていたが、ヒューマン・フェイクとは無関係である事が解ったので解放された。今では政府の与えた仮設住宅に住んでいる。毎日、君の母の見舞いに行っているようだ」

「僕の事、何か言ってました？」

言いにくそうな表情の兵士。

「言ってください」

「…、化け物に命をかけるような人間は、もう私達の息子じゃない…そうだ」

痛み。胸？心？とにかくどこかに穴が開いた。

そろそろ、泣いてもいいだろう？と僕が聞く。
まだだ、泣くのはまだ早えぞと名無しが答える。
美佳が心配そうに僕を見つめて、背中をさする。
僕は美佳の手を握る。
美佳がその手を、さらにもう片方の手で包む。
大丈夫。
僕は僕に言い聞かせる。
「解りました。ありがとう」
僕と美佳は手を繋いだまま、奥を目指す。
「待ってくれ」
兵士の声で、再び振り向く。
「話し合うと言っていたが、君達は英語を話せるのか」
僕は美佳に
「話せる？」
と聞いてみる。
当然美佳は首を振る。

「通訳が必要だろう。私も行く」

驚いた僕は、いいんですかと聞き返す。

「大佐の事が気にかかる。それに、君達もどういうわけだか、本当に我々を殺すつもりじゃなさそうだ。ならば、まだギリギリで議論の余地はあるだろう。何を話すつもりか知らないが、今まで我々と君達の間には対話がなかった。この戦争も、そろそろ終結させなくてはならない」

僕達は兵士の案内で作戦本部室へ向かう。けたたましいサイレンの音がそこら中で響いていた。

エレベーターに乗り、地下へ。ドアの先には、一本の長い廊下が続いている。

その一番奥に、大きな扉が見えた。

「あの中だ」

僕と美佳は頷いて、それからしっかり床を踏みしめ歩き出した。

心の準備は、もういらない。

中幕　5　崩壊

『父さんはね、ああ見えて、あなたの事すごく気に入ってるのよ…』

いつかのモニカの言葉。

『あなたは真っ直ぐな人だって。真っ直ぐな人は、正しい道を進んでいる限り、間違う事はないって。だから、安心して私を任せられるって』

いつかのモニカの言葉。

『無愛想で、なかなかキチンと人を認められない人だけど、大丈夫。あなたの事、父さんはしっかり認めているわ』

いつかのモニカの言葉。

『大丈夫よ』

『ねぇ、もうすぐ、私達夫婦だね。恋人同士の、最後の旅行になるんだよ。楽しもうね』

『ずっと一緒なんだ。そんな事にこだわらなくてもいいだろう』

俺の言葉。

『いいの。恋人と夫婦は違うんだから。けじめをつける事も大事でしょ？』

モニカの言葉。

『でも、本当の意味であなたとずっと一緒にいられるなんて、夢みたい。ふつつか者ですが、これから一生、よろしくお願いします』

…死ぬ直前の、モニカの言葉…。

マイケル大佐は振り返る。過去を、バーンズの懺悔の真意を探る為に。

『ふざけるな！貴様、何故娘を守れなかった！』

バーンズ司令官の拳。痛みはなかった。あの時から、肉体をあらゆる方法でなぶっても、痛覚が反応する事はない。

『娘を、私の娘を返せ！』

変わりに、心の痛覚が過敏になっていた。些細な言葉の一つ一つが、鋭利なナイフに、口径の広い銃になって、俺の心を裂いていく。

全てヒューマン・フェイクに奪われた。

モニカの命も、記憶の中の表情も、義父になるはずだった、バーンズ司令官の信頼も。

取り返そうと思った。取り返す為なら、何もかも、あらゆる犠牲を厭わないつもりでいた。

【そうよ私は帰ります。あなたの元へ、肉を伴い帰ります】

いつからか、モニカの声が聞こえてきた。

【だからあなたは殺し続けて】

殺し続けた。

『よくやった』

とバーンズ司令官は言った。

最初に信頼が戻ってきた。モニカの言うとおりにすれば、何もかもが戻ってくる。

確信した。

だから殺し続けた。俺の過ちを修正する為に。

モニカを守れなかった、あの瞬間の俺を殺す為に。

少年が蘇ったのは、恐らく兆しだ。どこかに黄泉の国の扉が開いて、死者は各々大切な者の元へ帰るのだろう。

俺の過ちは、修正されつつあるのだ。

その筈なのに…。

『私が間違っていた』

何を言う？

『お前を責めるべきではなかったんだよ』

何を言う？

俺を責めるべきではなかったーーバーンズ司令官が間違っていた？

ーー俺は間違っていなかった？

違う。違う。

俺はモニカを守れなかった。間違っていない筈は

「奴らの戦闘能力の前に、生身で立ち向かえる奴なんぞおりはしない。私にだってそんな事は解っていたよ。解っていたが、モニカの父親として、誰かを責めずにはいられなかったんだ。すまない。本当にすまなかった」

バーンズ司令官は床に頭がつく程に、深い土下座で懺悔した。

「死んだ者は帰ってこない。私が悪かった。不毛な復讐は、もうやめろ。そろそろ、お前の人生を元に戻してやるんだ」

【だからあなたは殺し続けて。その果てで、私はあなたを待っているからーー】

そうだ。

バーンズ
は
嘘を
ついてる

高らかにマイケル大佐は笑った。

何だ

何だよ。

あんたも俺の邪魔をするのか。

それじゃあ、まるでヒューマン・フェイクと一緒じゃないか。

あんたもそんなちっぽけな嘘で、俺からモニカを奪おうとするのか。

【殺し続けて】

解ってるさモニカ。

殺し続ける。お前の表情を取り戻すまで、再びお前に出会える日まで、

邪魔する奴は、1人残らず殺し続けてやる。

マイケル大佐は、窪みに設置してある護身銃の元へと走る。警報の赤いランプが彼を照らす。

鬼であった。赤い光を纏った彼の姿は、人の皮を被った復讐鬼であった。

彼はすでに、人間もどき（ヒューマン・フェイク）になりつつあったのだ。

バーンズは彼を眺める。絶望と悔恨の念をもって。

立ち上がろうとはしなかった。逃げようとも思わなかった。

いかなる懺悔や詫びをもってしても、もはや彼には雑音にしか聞こえないのだろう。

ならば彼を追い詰めた罪を、彼に殺される事で償うしかあるまい。

こんな形で、お前に会いに行く父を許してくれーー。

バーンズはモニカに祈った。うつ伏せのまま、十字を切る。

神よ。どうか、彼を救いたまえーー。

マイケル大佐は銃口をバーンズに向ける。

感情が超越されていた。そこにあるのは純粋な廃絶の意志のみである。否、意志はもはや本能にまで進化を遂げた。

殺し続ける。モニカの復活を邪魔する者は、1人残らず皆殺し。

護身銃が淡く光る。

どこまでも真っ直ぐな男よ、それが愚直である事に、何故お前は気付かないーー。

『父さん。私、あの人と結婚する事にしたの。いいよね？』

思えば、どこかでこの男を疎んでいたのかもしれない。娘を奪われる父親の気持ちーー。

そんなものが、私にもあったのだな。

今にして思えば、それが全ての過ちか。それがこの男にあたってしまった、私の罪の因子なのか。

せめて、笑顔で祝福してやるべきだったなーー。

バーンズは無意識に涙を流していた。床にそれが零れ落ちさえしなければ、バーンズ自身、気が付く事はなかっただろう。

年甲斐もない。涙などーー。

流すべきではない。私にそんな資格はないのだ。

バーンズは立ち上がり、敬礼した。

「マイケル・コール大佐。貴君の行く道の果てに、望む答えが存在する事を切望している」

そんなものはない。解っていたが、切望しているのもまた本心であった。

バーンズは両腕を大きく広げる。

「さらばだ。息子になるはずだった男よ」

甲高い音が護身銃から鳴り響く。

マイケル大佐の耳に、バーンズの声は届かない。

聞こえるのはーー

【殺し続けて】

ーー撃った。

アルマゲドンが終わるまで　7　ついに僕は涙を流し、自身の死を切望する

若い兵士が先頭に立って、作戦本部室の扉に手をかけたその時、護身銃充電完了の音がした。

僕は美佳の手を引っ張って、慌ててその場に倒れて伏せた。

ギュオーンという発射音。僕は目をきつく瞑る。

…あれ？

ゆっくり目を開ける。何ともない。警報のサイレンだけが相変わらず周囲に鳴り響いているだけだった。

護身銃は誰に向かって放たれたんだろう？

何かを悟ったかのように、若い兵士が扉を開けて、中へ駆け込んだ。僕と美佳も続く。

作戦本部室は円形の広い部屋で、長いテーブルとか椅子とかそれから学校で見かけるような簡易スクリーンのちょっと大きめなバージョンのがあったりした。

その奥に小部屋みたいなのがあって、そこにはモニターが沢山あって、モニターの下には窪みが必ず一個ついてた。

僕はここから光を増幅させた護身銃を発射していたんだろうと、瞬時に悟った。という観察力の高さをひけらかすのはひとまず止めて、マイケルは部屋の中心で、誰もいない方向にむけて護身銃を構えて

いた。

というより、恐らく誰かに撃った後だったっぽい。

若い兵士はマイケルに駆け寄って、英語で何かをまくし立てていた。

マイケルは若い兵士を突き飛ばし、今度は彼に護身銃を突き付ける。

『充電の仕方次第では１０発まで連射が可能なの』

やばい。なんだか悪い展開だ。護身銃が淡く光る。

すると隣にいた美佳が猛スピードで若い兵士の元へ跳躍。

彼を抱きかかえて、僕の所へ戻ってきた。

「ナイス美佳！」

僕はガッツポーズで美佳を誉める。美佳はニコッと胸を張る。

どうせならマイケルから護身銃を奪ってきて欲しかったという所見は言わないでおく。

かなり前から気付いていた事だけど、美佳はどこか抜けているのだ。

マイケルは僕達の存在を確認する。美佳に対して、世にも恐ろしい嫌悪と恨みを込めた視線を送った後、僕に対して、世にも恐ろしい優しい視線を送った。

英語で何か、僕に叫んでいる。意味は当然解らなかったけど、そこ

には、何か肯定的なニュアンスが感じられた。

「よく帰ってきてくれた、と言っている」

若い兵士の通訳。

そのあと再び、マイケルが僕に叫ぶ。今度は僕でも理解できる簡単なフレーズだ。もっとも、なんの事を言っているのかはさっぱりだけど。

「モニカはどこだ？」

しかも、そう言うマイケルは、昔、山手線のとある駅で、新宿への行き方を尋ねてきた外人の雰囲気にどことなく似ていた。

なんというか、日本人にはない、あの独特のフレンドリーな感じ。

僕には、1年前（僕からしたらついさっきだ）のマイケルと目の前の人間が同一人物である事が、にわかに信じられなかった。

「モニカって？」

僕は若い兵士に尋ねてみる。

「ヒューマン・フェイクに殺された、大佐の恋人だ。2人の詳しい経緯を私は知らないが、大佐の彼女に対する愛は、並大抵のものでなかったらしい」

また、胸だか心だかに穴が開く。

僕の背負った、美佳の罪の重さを実感する。マイケルの様に大切な者を美佳達に奪われた人間は、世界中にごまんといるんだ。

僕は拳を握り締める。美佳を見る。

少しだけ、表情が揺らいでいた。おばさんとの一件で、美佳の心にも僅かな変化が生まれたようだ。

マイケルがもう一度、僕に叫んだ。

「モニカはどこだ？」

マイケルは僕が生き返ったと思ってる。だから僕の帰還を喜んでいる…。

合点がついた。

マイケルは恋人も生き返ると思ってるのだ。

僕の中で、何かが壊れた。それは今まで大洪水を何とか抑えていたくたびれきった古いダムが、轟音と共に決壊するような崩壊だった。

「隼太…」

美佳の言葉で、美佳を見る。

美佳の眼には、当たり前だけど僕が写っていた。

僕は泣いていた。ボロボロボロボロ、涙の粒が零れて零れて止まらない。

そろそろいいかなと僕は尋ねる。

あぁ、おめぇが泣くんなら、今しかねえと名無しが答える。

僕はその場に崩れ落ちて、声をあげて泣いた。

「モニカはどこだ？」

マイケルの言葉が聞こえる度に、目の奥から涙が溢れて溢れまくる。

僕は何で泣くんだろう。

おめえはもう、自分の為に泣いたら駄目だと自分に言い聞かせていたからさ。

名無しが言った。

僕はマイケルの為に泣いた。僕は美佳と鬼達に殺された全ての人達と、全ての人達にとって大切だった全ての人達の為に泣いた。

『隼太は悪くないのに何で泣くの！男なら胸を張っちゃいなさい！』

最後に泣いた時、美佳は僕にこう言った。

美佳の罪は余りに深い。僕は美佳の為にも泣いた。

マイケルが護身銃を向けて僕に歩み寄って来る。

「モニカはどこだ？」

涙でマイケルの顔がよく見えない。けれど、その表情が希望に満ちている事は充分解った。

僕の涙は一層激しく、体中の水分を全部奪っていきそうな具合に、容赦なく止めどなく流れては零れて、流れては零れた。

何を言えばいいんだろう？

マイケルは僕を抱き締めた。

耳元でマイケルが囁く。さっき若い兵士が僕に通訳してくれた意味の英語だ。

「よく帰ってきてくれた」

そして

「モニカはどこだ？」

何を答えるべきなんだろう？

誰かに教えを乞いたかった。名無しでも、美佳でも、若い兵士でも、父さんでも母さんでもいい。

誰か教えてくれ。

僕は何て答えればいいんだ？

「ごめんなさい」

僕はそれ以外の言葉を知らなかった。

「ごめんなさい」

謝ってもすまない時に、それでも謝るしか方法がない事だけ僕は知っていた。

「モニカはどこだ？」

マイケルの声が、次第に無機質になっていく。

「モニカはどこだモニカはどこだモニカはどこだモニカはどこだ」

マイケルは僕の体から離れて、僕の額に銃口をくっつける。

「隼太、危ない！」

「来るな！！」

初めて美佳に怒鳴った。

「君は、きちゃいけない。見てるんだ。何があっても、動いちゃだめだ」

「でも、隼太…？」

「今ここで僕を助けたりしたら、僕は二度と美佳に口をきかない」

気配で、美佳が思いとどまるのが解る。

僕はマイケルの目を見つめた。焦点の合っていないその目は、すでに自分を見失っている。

僕は美佳を喪った僕の事を想像してみた。

多分、僕はマイケルになるんだと思う。

そしてマイケルのような人は、世界中に溢れているんだろうと思う。

僕の背負った美佳の罪を償うには、それでも全然足りないけれど、僕が美佳を殺さなければならない気がした。

そして、そんな事は僕にできないという事も、同時に解った。

あぁ、そうか。そういう事だ。まったく、僕とした事が、とんでもない勘違いをしていた。

美佳の罪を背負う？

とんでもない。一番罪深いのは、美佳を愛した僕自身じゃないか。

僕の言うべき事は決まった。

「ごめんなさい。モニカさんは、帰ってきません」

若い兵士は、それを訳さなかったし、だからマイケルに日本語が通じているとは思えないけど、それでも伝わる言葉というのはある。

マイケルの顔が、鬼へと変わっていく。

「僕を殺してください。そんな事で償えるとは思えないけど、僕を殺してください」

僕は美佳を殺せない。だから、僕が死んだら後を追うという美佳の言葉を信じて、僕はマイケルにそう言った。

護身銃が光り出す。

「だめえ！！！」

と美佳が叫ぶ。

ごめん。美佳との約束も、名無しとの約束も、結局僕は守れなかった。

やっぱり、一番罪深いのは僕自身だ。

愛してるよ。美佳。

今度撃たれたら、その時は僕を食らってくれよ？

いるんだろう？名無し。

いや、僕は君をこう《名付けて》いたね。

《真っ黒》。

アルマゲドンが終わるまで　8　友達について

僕の望みは叶わない。

マイケルがトリガーを引いた瞬間、護身銃から光が消えた。

そして、周りの空間が闇に変化していく。

闇の中で、再び護身銃が光り出した。マイケルの手元から離れて、宙に浮く。

時が止まった。マイケルが完全に静止すると僕は振り返って背後を見る。

若い兵士も止まっていた。

この空間において、時の流れと共にあるのは、美佳と僕だけのようだった。

「隼太！」

美佳が僕に駆け寄って、思い切り僕を抱き締めた。

「なんでよ！なんで勝手に死ぬなんて言い出すのよ？さっき、ずっと一緒って約束したばっかりじゃない！」

「ごめん」

バカバカバカバカと僕を責めまくる美佳に、言えるのはそんな言葉

しかなかった。

「隼太、私の事、本当は好きじゃないんでしょ？」

「違うよ。本当に好きだから、だからやっぱり、僕は死ななきゃならないと思ったんだ」

「なにそれ、もう、全然意味わかんない！」

ごめんよ、と、僕は美佳の頭を撫でる。

【本当に、意味わかんねえぞおめえ】

《名無し》、あるいは《真っ黒》の声。

宙に浮いた護身銃が、やがて僕の友達へと姿を変える。

【おめえさんらが死んじまったら、誰が世界を救うんだぁ？】

相変わらず間延びした、おっとりとした声で名無しが言った。

「名無しじゃない！どうして、こんな所にいるの？」

【そりゃあ、おめえさんのカレシに聞いてみるといいぞ、どうやら、おめえはもう気付いているみたいだからさぁ】

美佳は怪訝そうに僕を見る。

「どういう事？」

僕は溜め息をついた。

「名無しが、《真っ黒》だったんだよ」

ますます、美佳の怪訝レベルが上がる。

「え？」

【いつから気がついてたんだぁ？】

「前に護身銃で撃たれた時に、僕は《真っ黒》に食われなかった。よく考えたらおかしいよ。人間より遥かに強いあの鬼達だって恐れている《真っ黒》から、どうやったら生きて逃げれる？」

そう。しかも撃たれた先にいたのは《名無し》で《真っ黒》じゃなかった。さらに僕を追って異次元に入った美佳だって、やっぱり無傷で帰ってきてる。

「美佳、よく思い出してみて？僕を追って辿り着いた、その先の異次元で、君は一体何を見て、何を恐れたんだい？」

頬に手を当てて、美佳はゆっくりしっかり思い出す。そして、ハッと両手で口を抑えた。

「うん、そうだ。私、あそこで名無しに会ったんだ。そしたら名無しが、《奴》に、《裁く者》の姿に変わっていって、それで…」

「《裁く者》って？」

「隼太が《真っ黒》って呼んでるヤツの事。そっか、私それで…」

名無しが《真っ黒》である事を悟った美佳は、ショックで、その瞬間の記憶を失った。

「名無し、何で僕達を食わなかったんだい？」

【友達だからさ。それにまだまだ名無しは本当の意味で《真っ黒》じゃねぇ。名無しは《真っ黒》を導く者だったんだ。名無しにとって大切な事は、《真っ黒》をこの世界に導く事だったんだぞ】

僕は名無しの言う事がチンプンカンプンだったので、とりあえず名無しに僕の願いを聞いてもらう事にする。

「空間を元に戻してくれないかな」

【それで、また撃たれる気だろお？ダメダメ、ダメだ。名無しはそれを許さねえ】

「何故？」

【友達に死んで欲しくねぇし、友達に世界を救って欲しいからさぁ】

「ごめん。でも、僕にはそんな資格、やっぱりないよ。ここでマイケルに殺されるべきだ」

美佳が僕を思い切り睨む。

「まだそんな事言ってるの？」

「仕方ないんだよ、美佳」

仕方ないんだ。

【仕方なくねえ！】

ギョッとして僕は名無しを見る。今まではどんな時でもぼんやりしていた名無しの顔が、明らかに怒っていた。

【仕方なくねえぞ！友達との約束を守る事に、資格なんていらねぇはずだ！それに、おめえが人間達に責任を感じているなら、なおさら世界を救うべきだろ！】

「この上、僕に何が出来るんだよ名無し。僕は何から世界を救えばいいんだ？」

美佳と僕がいなくなる事が、一番それに近いじゃないか。

【おめえは誤解してる。おめえさんらが救うのは、人間だけでも、鬼だけでもねぇ。その両方だ。何から救うかって？】

決まってるじゃないかといわんばかりのニュアンスで、名無しはキッパリ言い放つ。

【名無しからだ】

僕と美佳は、確認するようにお互いの顔を見合わせる。

名無しから、というか《真っ黒》から世界を救う？

「もしかして、《裁く者》が、形を成す？そういう事なの？」

《真っ黒》については美佳の方が詳しい。そのせいか名無しの言う事を僕よりは全然理解しているようだ。

僕には相変わらず何のことだかさっぱりだった。

【おめえの言うとおりだ。名無しはもうすぐ、導かなきゃなんねえ。導いたら名無しは《真っ黒》に食われて《真っ黒》になる。そうすると、もうおめえさんらを助ける事も出来なくなる。《真っ黒》は形を成して、この世界を、そして他の次元に存在する全ての異世界を食い尽くしちまう】

「名無しが導くのを止められないの？」

美佳が尋ねる。

【無理だ。名無しは思い出しちまったから止められねぇ。思い出しちまったからには、名無しは導かなきゃなんねえんだ。《真っ黒》の肉にならなきゃなんねえんだ】

とことん理解不能な名無しの言葉に、僕の頭はパンク寸前だ。

【いいか。おめえさんらと会えるのは、おそらくこれで最後になる。名無しはもう導く力を使っちまった。空から《真っ黒》が降りて、この世界を喰い始める。そしたら、おめえさんらが、《真っ黒》を殺すんだ。これが、友達に対する最後の頼みだ】

「《真っ黒》を殺したら、名無しは？名無しはどうなるんだい？」

名無しは答えない。

変わりに【名無しは《真っ黒》になる】と、一言ぽつりと呟いた。
冗談じゃないよ、名無し。僕の罪をこれ以上増やさないでくれ。友達殺しなんて、僕にはできない。

「名無しが死ぬのは嫌だよ私」

僕は美佳に頷いた。

【ありがとう。名無しが出会えたのが、おめえさんらで本当によかった。でも本当によくなかったぞ】

支離滅裂な言葉を言いながら、名無しは悲しそうな表情をする。

【おめえさんらに出会えたから、名無しは導く事を思だした時、辛くなっちまった。おめえさんらがいるこの世界を、壊したくないと思っちまった。大切なものが、たくさんになっちまったんだ】

大切なものがたくさんある事の苦悩を、僕は知っていた。名無しに教えられたのだ。

大切なものは、1つ。そうじゃないと、守りきれない。

《真っ黒》が形を成すとか、そういう事の意味はまだ全然不明だけど、そんなものは後から美佳に聞けばいい。

僕が美佳を選んだように、名無しも《真っ黒》を選んだのだろう。いや、選ばざるを得ない理由があったんだ。そうじゃなきゃ、あんなに悲しそうな表情は出来ない。

【こんな辛い気持ちを知るくらいなら、おめえさんらと出会わなければよかったぞ。けど、こんな素敵な気持ちを知れたから、おめえさんらに会えてよかった。名無しはもう、1人じゃねえ】

悲しみと喜びが名無しの顔に混在していた。

【名無しは、おめえさんらの友達だよな？】

僕と美佳は口を揃える。

「友達だよ」

【よかった。それじゃあ、頼むな。時間、が、もう、ない】

名無しの姿が薄くなる。

「名無し！」

解ったよ、解った。名無しとの約束は僕と美佳が必ず果たす。それはとっても辛い事だけど、名無しにはたくさんの恩がある。

《真っ黒》だけじゃなくって、名無しはしっかり僕の事も導いてくれたんだ。

世界中の人々に対する僕の罪は、美佳と共に、《真っ黒》から世界を救う事で、償う。

それでも全然足りないから、それ以上の事は、救った後に考える。

【お別れだ、おめえさん、ら。いい、か、銃を、使、え。元々《真っ黒》だった、この、銃に、名無しの、最後の力を、込めておく。一発だ、あと、一発使えば、この銃は壊れ、る。だから一発で、弱点に当てて《真っ黒》を、名無しを仕留める、んだ。】

名無しの体は、もうほとんど見えなくなっていた。

「やだよ、私、名無しがいなくなるのはやだ！初めて異世界に出来た、友達だったんだもん！」

【名無し、も、初めて、の、友達、だった。なぁ、はやたに、みかぁ？】

初めて、名無しは僕達の名前を呼んだ。

【友達って、あったけえなあ】

最後に、にっこり優しい笑顔で、名無しは言って、完全に消える。

護身銃が地に落ちて、闇が消え、空間が元通りになっていく。

護身銃を僕が拾うと、マイケルと若い兵士にも時が戻る。

最後の戦いが、始まろうとしていた。

そして、それが、正真正銘のアルマゲドン…。

それについて

それは、限りなく膨大な闇に生まれた。

それがいつから、どのようにして発生したのかは、それ自身にすら解らない。

しかもそれは、自身の存在意義すら理解していなかった。

あるいは、理解する必要がなかった。

存在意義とは、同一の種族、あるいは同一の集団がある上で初めて生まれるものだからである。

つまるところ、それは単一であった。

単一であるが故に、無限に等しい闇の中においてさえ、それは孤独を知らなかった。

それが初めて、本能に目覚めたのは、それが唐突に空腹を覚えた時の事である。

正確に言えば、空腹に近い、何か別の渇望であった。

渇望の正体は生存本能であり、肉をもたないそれに《喰う》という概念は存在していなかったが、それでも、生物でいうところの《喰う》に近い事をしなければ、消滅を免れない事にそれは気付いた。

闇の中で、糧を探す。

糧は闇の中に見つからなかった。

このままでは消滅してしまうかもしれない。

糧を探した。

見つかる。糧は闇の外にあった。闇に外がある事をそれは知った。

それは闇をこじ開ける。光が見えた。光の中に糧があった。

光の中へ行こうと思う。光の中へ行けなかった。糧を得ることができなかった。

それは糧を狩る方法を探した。

探すまでもなかった。それには生来的に糧を狩る力が備わっていた。

それには触手があった。触手は光に似ていた。その触手は捕縛した糧をそれの元へ運ぶ。

そのようにして、それは生活リズムを確立した。

闇をこじ開け、糧を探し、捕縛し、喰らう。

単調であった。

闇の外には様々な光があって、様々な糧があった。

糧の中には、闇の中へ飛びこんで、それと闘おうとする糧もいた。

それは肉を持たない為、糧に滅ぼされる事は無かったが、それでも触手を奪われる事があった。

それは怒り狂い、以来、触手を奪った糧を執拗に狩り続けた。

その糧達は、それの追撃を避ける為に、光から闇を移動し、別の光へと逃げ続ける。

それは追い続けた。

恒久的ないたちごっこに思われた。

糧が逃げ、それが探す。

ある時、それは思い付いた。

【光の中へ行けさえしたら、あの糧を完全に滅ぼす事が出来るのではないだろうか】

それは光の中へ侵入する方法を考える。

そして、それは自身の肉を創る事を閃いた。

【そのようにすれば、光の中へ侵入する事が出来るのではないだろうか】

それは、その光に存在する糧に対して、触手を伸ばし、その糧を己が肉とする方法を試みる。

それは触手に自らの意志を込める事が可能であった。

さらに、意志には、その意志を形にするチカラがあった。

当初、成功に思われたその方法は、それの意図とは別の方向に進んでいく。

肉になる予定の糧に、それの意志が伝わりきらなかったのである。

伝わりきらなかったそれの意志は、糧を混乱させ、糧の自我と記憶を奪い、新しい、独自の思考を持つ生命体を生み出した。

その糧には、それと同じように、名前が無かった。

本来の目的を混乱の中から思いだそうと、糧は光をさまよっていた…。

アルマゲドンが終わるまで　9　蛇の降臨と僕のプロポーズ

僕は護身銃をマイケルに向ける。

マイケルは相変わらず

「モニカはどこだ」

と言い続ける。

僕は《真っ黒》の気配を強く感じていた。《真っ黒》は僕らの頭上にいる。まもなく降りてくるんだろう。

ここは危険だった。

このままマイケルとにらめっこを続けているわけにもいかなかった。

ちなみに僕は彼に銃を向ける事について、両親を殴るのと同じような罪悪感に苛まされている。それも理由の１つ。

とにかく、今は強行的な手段にでるしかないのだ。これは自己弁護の為ではなくて、現状そうせざるを得ないから。

僕は美佳にその意志を伝える。美佳は音速と光速の中間くらいのスピードでマイケルの首筋にちょんと手刀でノックアウト。

そのまま若い兵士と僕とマイケルを抱えて建物の外へ猛ダッシュ。

外に出ると空が暗い。暗くなるには時間が早すぎるのに空が真っ暗。

美佳は僕らをキャンプからちょっと離れた街の一角に降ろす。

商店街で、ひっそりとしていた。戒厳令というものが出ていると若い兵士の言葉。

僕は若い兵士にマイケルを頼んだと言った。もし、何もかもが上手くいったらまた会いにくると付け加える。

僕と美佳は空へ舞い上がる。

空がうねりを見せ始めていた。そのうねりがどんどんうねうねしてくると、ぽかっと、真っ暗な空の中に、さらに真っ暗な穴が開く。

とてつもなく大きな穴だった。僕はブラックホールを思い出す。見たことはないけど、恐らくブラックホールというものはこういうものなんだろうなという印象をもった。

何かが吹っ切れていた。僕の中の、迷いとか悔恨とかそういったものが吹っ切れていた。

全てを後回しにする事が、いい結果を生むとも思えないけど、全てを後回しにする事で、少なくとも《真っ黒》との戦いには集中出来る。

「来るよ、隼太。びびんないでね」

「今更、怖いものなんかないよ」

美佳を除いて、という言葉は怖すぎて却下した。

穴から、巨大な闇が這いずるように出てきた。

言葉を失う光景だった。

その生物？は、馬鹿みたいに太くて、馬鹿みたいに長くて、馬鹿みたいに黒いのだ。

蛇…。

何かに例えるなら、そう、それは蛇のような生き物だった。

空から大地へ蛇は降りる。その下に防衛軍のキャンプ。東西南北に伸びる巨大な鏡のメガホン。一瞬で蛇に潰された。

地上に蛇の頭が付いても、穴からはまだまだ尻尾らしい部分がする出てくる。

蛇の顔には赤い目が１つ付いていた。

爬虫類というより大きな人間の目という方が近い。

端的に言って不気味だった。

蛇がようやく、全長をあわらにした。

尻尾もそのまま大地に落ちる。

衝撃が大地に走り、地震が起こった。

それだけで、まだ残っていた高いビルが崩壊するのが空から見える。

「おいおい、これは想像以上だよ美佳」

「本来にヤバいのはこれからだよ隼太」

美佳の言うようにこれからだった。

蛇の体が光る。エメラルドグリーン。幾千幾万の細い光が、放物線を描いて飛び出した。

僕らにもその光が襲いくるも、美佳は華麗に旋回してそれをかわす。酔いそうだ。

大地から悲鳴が聞こえた。

だけど、今の光で何かが壊れたようには見えなかった。

「食べてる…」

美佳がポツリと言う。

「人を食べてる」

蛇が頭を上げた。赤い目で僕らの方向を見る。というか僕らを見た。

「ねぇ、美佳はあいつの弱点知ってるんだよね？」

「知らない」

戦況が絶望的である事を再確認。

「それじゃ、探そう」

「どうやって？」

「成り行きと運で」

「隼太のそういうとこ、嫌いじゃないかも」

アオーンーー。

蛇が雄叫びを上げた。

次の瞬間、さらに信じられない事が起きる。

蛇がその巨体からは到底有り得ないスピードで空に舞う。

それでもって頭から僕らに突っ込んでくる。

ギリギリで美佳は高度を上げて、何とかそれを逃れた。胃が痙攣して気持ち悪い。

「勇気ある撤退をお願いします」

「依存ありません」

僕らは猛スピードで蛇に背を向け敵前逃亡。てか美佳が逃げなきゃいけない相手がいる事が今日3番目くらいに信じられない。

上位の2つは同率1位といったところか。

蛇は追ってこなかったが、彼方からたくさんの影が見えた。
鬼達だった。
おばさんとおじさんを先頭に、やっぱり猛スピードでこちらへ向かってる。
「美佳！隼太君！」
おじさんの叫び声。初めて鬼達の存在が心強くて喜ばしかった。
「無事なの？」
心配そうにおばさんが言った。なんだかんだで娘が心配なんだろう。
うんうん、感動の再開だ。
僕は父さんと母さんを思い出す。
「美佳！」
「何隼太？」
「ごめん、僕を降ろしてくれ！ちょっと急用を思い出したんだ」
「ママとパパでしょ？私も行くよ」
ありがとう、と僕は言うべきで、でもここへきての美佳の鋭さにビックリして感動して、何も言えずに押し黙ってしまう僕だった。
「いや、隼太君のご両親は私たちに任せなさい」

おじさんの言葉。

「あんた達には役目があるはずよ」

おばさんの言葉。

「どうして、ママ達が知ってるのよ？」

「あんた達の友達が、教えてくれたのよ。消え入りそうに小さな声だったけどね」

名無し…。

「いい？《裁く者》が狙っているのは実際のところ私達の一族なの。隼太君のご両親を助けたら、私達は一族総出で奴の注意を引きつける。あんた達はその隙をついて奴を滅ぼしなさい」

「でも、それじゃママ達が…」

同感だった。あの大きな蛇相手に、注意を引きつける事がどれだけ困難で危険かは言うまでもない。

「何を言ってんの。美佳、あんたに心配される筋合いはないわ。私達はもう親子の縁を切ったんだから」

「おばさん、こんな時にそんな事言わなくても…」

いいじゃないですかと言う前に、おばさんが次の言葉を放つ。

「こんな時だからよ。私達の心配なんかしたら、奴に勝てる可能性はゼロに等しいの」

毅然なおばさんの態度には、もう覚悟が見えていた。僕はそれが解ったので、それ以上何も言えなかった。

「隼太君のご両親はどこにいるんだ？」

僕はおじさんに病院の場所を伝える。

そして、僕も覚悟を表明する事にした。

「父さんと母さんには、僕が生きている事を伝えないでください」

「隼太…？」

「いいんだ。もう、決めたから」

おじさんは戸惑いの表情を見せたが、僕の覚悟を少しでも察してくれたのか、それ以上言及する事はなかった。

後方から轟音と雄叫びーー蛇が世界を壊しながら、僕らの元へ迫り来る。

「あいつの弱点に、心当たりはない？」

美佳が尋ねた。

腕を組んでしばし天を仰いだ後、おじさんが思い出したように言う。

「太古の傷…」

「太古の傷って？」

「もう数千年前になるが、我々が《裁く者》と闘った際に、奴を傷つける事に成功したんだ。肉を持たなかった奴にとって、それは唯一の傷となった。護身銃は、その時千切れた奴の《肉のない肉片》から我々が創りあげた物なんだよ。一族の中に反逆者が出た際などは、よくその銃で異次元送りの刑に処したものだ。《裁く者》が近い次元域に迫り来た折りには、死刑の意味合いも兼ねてな」

《裁く者》って、そういう経緯で付けられた名前だったんだ。納得。

「その太古の傷が肉を持った奴の体に残っていれば、あるいは、それが奴の弱点になるかもしれない」

僕と美佳にとって、それだけが勝機だった。やっぱり成り行きと運に賭けるしかないようだ。

「そろそろ行かなきゃならないわね」

おばさんが鬼達を促す。

でもその前に、僕には言わなきゃならない事があった。

「おじさん、おばさん。あなた達が、美佳と縁を切ったと言っても、それでも、僕はこの世界の敷きたりに乗っ取って、言わなきゃならない事があります」

なにかしら。なんだい。おばさんとおじさんの返事は同時。

「娘さんを、美佳さんを、僕にください。僕と美佳さんの結婚を認めてください。必ず、僕が彼女を幸せにします」

両親への許可の願いを兼ねたプロポーズ。しかも僕は美佳に抱えられて宙にぶらぶら。形としてはムードもクソもないけれど、贅沢は言ってられない。

頬に水滴。多分美佳の涙だろう。

だっておじさんもボロボロ泣いてるんだもの。

「…了解した」

「ありがとうございます」

胸のつかえは取れた。全てが終わったら、やっぱりマイケルに殺されようと思う。僕と美佳はその時まで夫婦になった。

「者ども！」

おじさんが鬼達に吠えた。

「これより、我々一族は最後の決戦に打って出る！決着の一撃を、この新しいつがいに任せる事に異論の無い者は、命を懸けて付いて来い！」

鬼達の叫び。

「パパ、ママ」

美佳の声。

「今まで、ありがとう」

おじさんを筆頭に、鬼の群れが蛇に向かう。最後におばさんが残った。

「ご両親は必ず助けるわ。隼太ちゃん。美佳を、お願いね」

僕がはいと答える前に、おばさんは猛スピードで鬼の群れの最後尾に付いて行った…。

アルマゲドンが終わるまで　１０　さよなら

《真っ黒》の蛇は、世界をジャンジャン破壊する。人間対鬼のより、それは終末的な光景だった。

蛇が地上に表れて僅か３０分。他より大分ましだった防衛軍キャンプの半径数１０キロ強の街並みは、跡形もなく潰される。

尻尾がビルをなぎ払い、頭が家屋を全壊させた。光で人々を喰らい、蛇はご満悦にさらにさらにデストロイ。

美佳のそれとは規模が違う。

またまたミサイルが打ち込まれたりするんじゃなかろうか、あるいは核とか落ちてきたりしちゃったりして…。

様々な懸念が僕の頭をよぎる中、蛇は今、鬼達との攻防を始めた。

僕と美佳は、そこから3キロほど離れた小高い丘の上の公園でそれを眺める。

なんたって文明の痕跡を蛇がぐちゃぐちゃにしたものだから、見通しは素晴らしい。

「大丈夫かな」

「今、パパ達の被害は千百ちょっと」

美佳の視力は凄まじい。太古の傷を探す役目は美佳に一任する事に

した。

放物線の凄まじいエメラルドグリーンの光の数々が、鬼達を喰らっていく。

僕は護身銃を握り締める。チャンスは一度。

鼓動が高鳴っていくのが解る。全世界の命運が、僕の一発に懸かっているのだ。

鬼達はびゅうびゅう飛び回り、時々蛇を攻撃する。でも余裕で弾かれてしまう。人間を豆腐のように扱う鬼の攻撃が全く効かないとなると、やはり護身銃も弱点以外に効き目は薄そうだ。

蛇が体からとんでもない数の光を発射する度、その三分の一程度の鬼が喰われる。

急がないと…。僕は衝動に駆られる。

美佳は目を細くして蛇を見つめている。

と、美佳は目を見開く。

「ちょっと待ってて」

美佳は蛇に向かってダッシュジャンプ。

「おいおい！美佳？」

いつだって僕の叫びは届かない。

あっという間に美佳は見えなくなっていく。

さらに蛇が光をバビュン。

美佳の安否が気になって、僕は丘を駆け下りようとした時に、空から美佳が戻ってくる。

「どうしたんだよ？急に飛び出して」

「さっきから気になってたんだけど、弱点見つかったっぽいよ」

思わぬ美佳の収穫に、僕はついつい跳ね上がる。

「本当に！？」

「うん。あのね、隼太には見えないだろうけど、あいつが光を出す時って、一瞬体中に小さな穴が開いてるのね」

僕は体中に小さな穴が開いた蛇を思わず想像してしまう。うげ、気持ち悪い…。

「で、その穴から光が出てるんだけど、一個だけ、穴が開いてるのに光が出てない部分があるの。ここからじゃよく見えないから近くまで行ってみたんだけど、やっぱりその穴、他のに比べてもいびつなんだよね。なんていうかギザギザしてるの。私の一族の爪痕みたいのが、確かについてるんだ」

決定打だった。間違いなく、それがあの蛇の、《真っ黒》の弱点なんだろう。

「それじゃ、その部分を撃てば…」

美佳は頷く。

「だけど、その穴は光を出す時にしか開かないの。だから…」

マリオブラザーズの８面より難易度が高い。あの光の網をかいくぐってそこに当てるのは、東大の試験に全問正解するのに等しいかそれ以上に確率が低いと言える。

「僕じゃ無理だ。美佳がトリガーを引いてくれ」

情けないけどそっちの方が現実的だった。ちなみに僕の成績は学年の真ん中程度である。

「だめだよ。あいつ、人間より私達に対しての方が敏感に反応するもん。私じゃ絶対かわされる」

困った。

「ちなみに、その傷はどのあたりにあるの？」

「赤い目の右上。大きさは隼太の頭くらいかな…」

絶望的だった。とてもじゃないけど当てられる気がしないし、そもそも僕にはその傷すら見えないんだから。

名無し…。君は最後まで難しい事を言ってくれる…。

蛇が雄叫びをあげた。光。そして鬼達の数がまた減っていく。

「パパ！」

美佳が叫んだ。

とても悪い予感がする。

「パパが…やられちゃった…」

美佳は歯を食いしばってそう言った。

泣かないようにこらえている。

僕は美佳の肩に腕を懸けて、頭を僕の肩に抱き寄せた。

光。鬼達の消失…。

「ママも…」

美佳の歯がかたかた震えている。鬼達は命を懸けて、僕達のチャンスを創ろうとしているのに…。

なんでいつも、僕だけが無力なんだ。

鬼達が悲鳴をあげている。もう、数えられる程しか残っていない。

「行こう、美佳。イチかバチかやってみる」

美佳は僕を抱え、再び戦場に舞い戻る。

蛇の雄叫び。蛇の赤い目。僕達を見据えていた。

【最後はお前達だ】

確かに聞こえた。名無しの声だった。でもそれは名無しじゃなかった。

「隼太。さっきの言葉、嬉しかったよ」

唐突に美佳が言う。

「急にどうしたんだい？」

「何でもない。言いたくなったから言っただけ」

「そっか」

僕と美佳は蛇の頭上を旋回する。光の網。かろうじてかわした。目を凝らしたけど、やっぱり傷も穴も見えない。

緊急避難で大地に降りる。もう当て勘しかないのかな？赤い目の右上を狙ってトリガーを引く。僕の頭程の大きさしかないのに、当たる訳がないが…。

でも、もうすぐ鬼達は全滅する。そうなったら、０，０００００００（以下数十桁略）１の可能性すらゼロになってしまう。

やるしかないか…。

突風で飛ばされそうになる僕を美佳が押さえた。蛇がちょっと体を動かしただけで、台風が起こる。

蛇の頭との距離ーー僕の目算で８００メートル。瓦礫やらなにやらが砂に混じって飛んでくる。つまり視界もモストバッド。

さらに桁を増やす必要がありそうだ。

「やれやれ、何に祈ろう？」

「大丈夫だよ。隼太は絶対成功する。だから、神様なんていらない」

美佳の目。様子がおかしい。僕はこんな目をついさっき見た気がする…。

そうだ…。死を覚悟したおじさんの目。

全く同じ目を美佳がしていた…。

「美佳？」

「私、いい事思いついちゃった」

美佳はいいことについて説明した。

鬼達が全滅する前に、美佳が蛇の傷口へ飛ぶ。美佳自身が、目印となる。光が蛇から発生したら、僕が美佳目掛けて護身銃をぶっ放す。

いいことは、方法として最悪だった。

「だめだよ、できるわけないだろう！？」

「じゃあ他にどんな方法があるっていうの！？」

美佳が初めて僕に怒鳴る。僕は言葉を失う。立ち尽くす。

あんまりだ。美佳に対してあんまりだと思う事は今まで何度もあったけど、これはあんまりにあんまりだ。

「しっかりしてよ！世界を救うんでしょう？」

「そうだけど、でもそれは…」

「隼太が死んで、私に後を追わせるより全然いいと思うけど」

再び言葉を失う。

「だからさ、私は隼太より全然鋭いんだよ。何となくさっき気付いちゃったもん。全く、あざといんだから」

僕は言葉を探すーー見つからない。

「私さ、人間を殺したりする事が何で悪いのか、正直今でも全然わかんないんだけど、それでも、１つだけ自分の中で決めた事があるんだ」

言葉を探すーーまだ見つからない。

「隼太を悲しませる事は、全部悪い事なの。そう考えたら、私大分悪い事しちゃったなって。私の悪い事の為に、隼太が死ぬのは絶対

嫌。絶対嫌なの」

まだ言葉が出てこない。

「それに、あいつがこの世界に出てきたのは私の責任でもあるし。隼太があいつを見たって事パパ達に言ったら、私達別の世界に行かなきゃならなくなるから、隼太と離れるのが嫌で、私言わなかった」

美佳は泣く。いつからこんなに泣き虫になったんだろう？

「パパもママも、一族のみんなも私のせいで死んじゃったから、最後くらい、私も命懸けなきゃでしょ？」

泣きながら笑った。

言葉を探すーー見つかった。

「行くな」

美佳の涙の笑顔。くしゃくしゃになった。

「行かないでくれ」

僕の顔もくしゃくしゃだと思う。

僕達は抱き合う。

「行かないでくれ」

「ねぇ、隼太のその涙、私の為だけに流れてる？」

喉が痙攣して、声を持ってこれなかった。僕は首だけで肯定を示す。

「それじゃあいいよ、うん。私、最高に幸せ。隼太の奥さんにもなれたし、ベリーハッピーです」

美佳は僕に唇を重ねた。

「最後のキスくらい、舌入れてみればよかったね」

僕の涙は止まらない。さっきあれだけ流したはずなのに、壊れた水道栓みたく、とどまることを知らない勢い。

「前にも言ったけど、私の事、忘れないでね」

「行くな」

「それから、隼太は私の後を追っちゃだめだよ?私の為に死んだら、あの世で祟りまくるから」

「行くな」

「撃つの躊躇っても祟るからね」

行くなーー声にならない。

「さよなら隼太。全ての異世界を含めた世界で、一番誰より愛してる」

「行くな!!」

美佳は僕を突き飛ばす。空を飛ぶ。立ち上がり、美佳を追って走る。瓦礫、砂が目に入る。走る。石が頭にぶつかる。血が出た。走る。蛇の胴に近付く。上を見上げる。美佳が仰向けに赤い目の右上に張り付いていた。

赤い目ーー空を見上げている。鬼達を補足していた。

何でだよ、何で最後まで君は自分勝手なんだ。1人で世界をめちゃくちゃにして、1人で世界を救うなんてズルすぎるだろう？僕は君を愛してる。異世界とか知らないけれど、世界で一番愛してる。その僕に君を殺せだなんて、悪魔に等しく残酷じゃないか！

僕は地面を叩く。両手で交互に叩きまくる。

見上げる。美佳は目を閉じている。

今ここで撃たなきゃ、死んでいったおじさんやおばさん、鬼達、そして美佳の覚悟は全て無駄になる。

解ってる。

《僕は撃たざるをえない》

僕がその結論に至るのを計算して、美佳はこの強行に打って出た。

かつてないほど美佳を憎み、かつてないほど美佳を愛した。

僕は泣きじゃくりながら、護身銃の銃口を彼方の美佳に定める。

色んな事に謝った。とりわけマイケルに謝った。

ごめんなさい。もう僕は、あなたに殺される訳にいかなくなってしまいました。

許せとは言いません。だけど、ほんの少しでいい。1ミクロくらいでいいから、世界中の皆さん。

美佳を解ってやってください。

蛇の体が光る。

護身銃が光る。

さよなら、と呟こうと思ったが、それに一体何の意味があるだろうと思い直してやめた。

代わりに叫んだ。

エメラルドグリーンの光が、美佳と蛇を貫いた。刹那に、美佳の笑顔が見えた気がした。

蛇は断末魔の叫びを上げて、体中から闇を撒き散らし、破裂した。

破裂した闇が、世界を覆った。

終幕　星に願いを（前書き）

終幕とありますが、最終回は次回になります。

終幕　星に願いを

世界が闇に覆われる1時間前ーー。

マイケル大佐の目が覚める。クリスの顔があった。心配そうに見下ろしている。

「ここは？」

「キャンプにほど近い、商店街の一角です」

「どうなった？あの少年は？モニカは？」

上体を起こして周囲を見回す。本屋、雑貨屋、洋服屋。確かに商店街だった。シャッターは全て降りている。モニカの姿も少年の姿もなかった。

クリスは経緯を説明する。

「化け物だと？」

立ち上がり、商店街を出る。空を見上げた。暗い空の中心から、巨大な異形が這いずり出てきていた。

「あれは、黄泉の穴か？あそこから、モニカが出てくるのか」

マイケル大佐は両手を掲げた。

俺はここにいるーーモニカに対する意思表示であると、クリスの目

に映った。

クリスは、今やマイケル大佐を憐れんでいた。狂気に取り憑かれ、あろう事かバーンズ司令官まで殺してしまったマイケル大佐は、もはや人には戻れないであろう。

いっそ、ここで殺して差し上げるべきなのかもしれないーー。

クリスもまた憔悴しきっていた。この最終戦争勃発以来、有り得ないものを見すぎてしまった。彼の現実感も、マイケル大佐には及ばないにせよ希薄になってきている。

防衛軍標準装備のベレッタを、マイケル大佐に向けた。

背後のクリスの殺気すら、マイケル大佐は気付かない。

信じられなかった。

あの強靭なマイケル大佐が、あろう事か未熟な私の殺気に気付かないなど、信じられない。

あぁ、やはりここで殺して差し上げるべきだーー。

「おじさんたち、何やってるの？」

少女の声に、クリスは振り返る。

小学生だろうか？雑貨屋のシャッターの隙間から、こちらを覗き込んでいるようだ。

クリスはベレッタを下ろし、少女の元へ歩き出した。

屈んで少女を見る。

「君はここの？」

「うん。パパもママもいなくなっちゃったの。私はお留守番」

戒厳令下でいなくなるという事がどういう事か…。

考えるまでもなかった。

あの化け物の降臨を見る限り、こんな年端もいかぬ少女を一人きりにさせておくには、この周辺は危険すぎる。

「出ておいで」

「でも、私お留守番だから」

「パパとママに頼まれたんだ。君を連れて逃げて欲しいって」

「本当に？けど、パパとママはどこにいるの？」

クリスは昔から、嘘を付くのが苦手であった。嘘とは、彼にとって背徳の象徴でもある。だからこそ、彼はマイケル大佐に対しても、死者の帰還が有り得ない事を毅然と言い放ったのだ。

しかし、彼の口から出た言葉は、

「先に逃げてる。パパとママに会いに行こう」

罪悪感を感じた。これは緊急事態であるという言い訳を自身に言い聞かす。

「よかった！じゃあ、今から外にでるね」

うんしょ、うんしょと言いながら、少女はシャッターの隙間を懸命に這い、外に出る。

殺して差し上げるのは、後にしよう。

少女の手を取ってから、クリスはマイケル大佐へ歩み寄り、肩を叩いた。

「大佐、ここは危険です。早急に退避しましょう」

両手を掲げたまま、首だけでマイケル大佐が振り返る。

「その少女は？」

「民間人です。今保護しました」

「そうか。ではその子を連れて先に行け。俺はモニカを待つ」

マイケル大佐の瞳に、狂気はすでに宿っていない。モニカに会えるという希望を確信し、狂気を正常に変えているように見える。

つまり、モニカに会えるという妄想と、それがもたらす注意力の散漫を除いて、マイケル大佐はマイケル大佐に帰還したのではないか？

クリスは、そんなマイケル大佐を殺すべきか、迷い始めていた。

所詮真実など、人間一人一人の中の主観にしか過ぎないのではないであろうか。ならば恋人が甦るという客観的な妄想も、マイケル大佐にとっての真実として受け入れるてやるべきではないだろうか。

「解りました。後で落ち合いましょう。集合はどこで？」

「いや、俺はモニカとモンゴルに行こうと思う。あの星空をもう一度眺めたいんだ」

「大佐…」

「もう、会う事はないだろう。クリス、さっきはすまない事をしたな」

胸が張り裂けた。

マイケル大佐は、もしや、完全に自分を取り戻しているのではないか？

全てを妄想であると悟り、それを承知で、一度自分の歩んだ道の上を、真っ直ぐに、足掻くように歩いているのではないか…？

「さぁ、もう行け」

あるいは、その道の上で奪ったバーンズ司令官の命に対する贖罪の意味を兼ねて…。

死のうとしているんじゃないか？

傍らの少女が、マイケル大佐のズボンの裾を引っ張った。

「おじちゃんは一緒に行かないの？」

「クリス、この子は何と言っている？」

クリスは少女の言葉を訳した。

マイケル大佐が少女に微笑んで、頭を撫でる。

こんな優しい表情の大佐を、私は見たことがないーー。

「おじさんは、大切な人に会いにいかなきゃならないんだ」

英語は少女に通じない。マイケル大佐の言葉は、クリスに向けられたものだった。

決定的であった。

マイケル大佐は、《待つ》という表現を捨て、《会いに行く》という表現を使った。

止める事など出来はしない。先程までマイケル大佐を殺そうとしたクリスにそんな資格があるはずもなかった。

まさかーー。

マイケル大佐は先程の殺気に気が付いていたのではないか。気が付いてなお、私に殺される事をよしとしたーー。

浅はかであった。クリスは浅はかさを呪った。後悔が頭の中で奔走する。

余りに未熟な自分が、マイケル大佐を己の物差しで計ってしまった事に、罪の意識すら感じていた。

「申し訳、ありませんでしたっ！」

深々と、地面に付いてしまいそうな勢いで、クリスは思い切り頭を垂れる。

再び、両手を空の穴に向かって掲げたマイケル大佐が、振り返る事はなかった。

敬礼。マイケル大佐の勇姿に対する、最後の礼儀であった。

「行こうか」

促すと、少女は頷いた。そのあとすぐ、思い出したように少女は言う。

「あ、パパが買ってくれたお人形さんとってくるの忘れちゃった。ちょっと待ってて」

クリスの手を離して少女が雑貨屋兼住宅のシャッターに向かって走った。

次の瞬間…。

闇に覆われた空が光り出す。正確には、地上の異形の凄まじい発光

が空に反射していた。
光の帯が見えた。放物線を描き、こちらへ飛んでくる。
クリスはその光景に、思わず一瞬魅入られてしまった。残酷なまでに、それは美しかったのである。
だから、その光の一本が、少女を狙っている事に気が付くのが一瞬だけ遅れた。
致命的な遅れであった。
危ないと、叫ぼうとする。光はすでに商店街に侵入している。視界を何かがよぎった。
何かーー少女に向かって疾走するマイケル大佐。そして細い光の粒子。
少女に向かって、マイケル大佐が跳んだ。
光がマイケル大佐を包み込んだ。
「大佐ぁあぁ！！」
まどろみの中で、マイケル大佐が完全に消滅するまでに、一秒もかかっていなかった。
俺の体を光が覆う。不思議と痛みも苦しみもなかった。あるのは、

奇妙な心地よさだった。

ふと、視界から景色が消えた。

これは、闇か？

違う…、闇にしては、暖かすぎる。それに灯りがある…。

そうだ。ここは闇ではなく、夜だ。満天に輝く星空の下、モンゴル大草原の夜なんだ。

「お帰りなさい」

傍らにモニカがいる。顔をモニカに向けなくとも、確かにそれを感じた。

不思議と懐かしさは込み上げてこなかった。

「当然でしょう？私はずっとあなたの傍にいたんだから」

「そうだったのか」

モニカが俺の手を繋ぐ。俺はまだ、怖くてモニカの顔を見れない。

「大丈夫。勇気を出して？」

恐る恐る、顔をモニカに向けてみた。

満面の笑顔が、ありとあらゆる歓喜の表情がそこにあった。

そうだ。これがモニカの、本当の顔なんだ…。

涙が頬から伝う。

俺はモニカを抱き締めた。

「今度は、ずっと一緒にいましょう？」

「あぁ、当然だ」

優しいメロディーが耳に響いた。

モニカの歌声ーー星に願いを。

これが死の間際の幻覚だとしても、何も構う事はない。

今度はずっと一緒にいる。

モニカと、星空に願いを込めて、俺は誓った。

最終話　忘れちゃっても、忘れない

世界が闇に覆われて、その闇の中で、やっぱり僕は名無しに出会う。

【お疲れさん】

【うん、とても疲れたよ】

【よくやってくれたよ、みかとはやたは】

【僕は大した事してないよ。命を懸けたのは美佳なんだ。それより、世界は？】

【《真っ黒》の爆発が思いの外大きくてなぁ。異次元の穴を広げちまって、世界は異次元の闇に包まれちまった】

おいおい、それはないよ名無し。それじゃあ命を懸けた美佳やおばさん達は、無駄死にって事になる。

【そんな事ねぇぞ。前に言ったなぁ？この闇は、おめえさんらの世界とは、時の流れってのが違うって】

【覚えてるよ】

【爆発の反動で、その流れが逆流してんだ。異次元に包まれた世界は、急速に時を遡ってる。世界は、自分で元通りになろうとしてんだ】

よかったなぁと名無しが僕にピースサインを送ったので、きっとそ

れはいい事なんだと理解する。

ん？世界が元通りになる…？

【それじゃあ、美佳は！？美佳はどうなるの？】

【みかも、死んだみんなも、一応元通りになるぞぉ。世界がどこまで時を遡るかは、名無しにもわかんねえけどな】

僕は嬉しさの余り、名無しに飛びついて、彼の手を握って、ぴょんぴょんぴょんぴょん跳ねまくった。

【ん～、だけどなはやた。みかは元々この世界の住人じゃないから、遡り方によっちゃ現れないかもしんねえんだ】

僕は止まる。

【どういう事だい？】

【いいかぁ？元々みか達の一族は、《真っ黒》から色んな異世界を逃げ回って飛び回っておめえの世界に辿り着いたんだ。でも、《真っ黒》はおめえが滅ぼしたからもういねえ。つまり、みか達は異世界を移動する必要がなくなんだ。時間がみか達がこの世界に来る前まで遡ったら、みか達はこの世界には来ないんだ】

【でも、命が元通りになるんなら、美佳は僕に会いにくるよ】

会いにくるに、決まってる。

【はやた。残念だけど、記憶も一緒に遡るんだぁ。だから、おめえ

の頭の中からも、みかの頭の中からも、お互いの思い出は消えちまう】

久しぶりに絶望した。

僕も、美佳も、お互いを忘れる？

そんなありがちすぎるバッドエンドは冗談じゃない。

【嘘だろう？】

名無しは残念そうに首を振る。多分残念に思ってくれているんだ。

僕はというと、残念どこですまなかった。

【何とかならない？】

名無しは首を振る。

僕はなんとかならない事を悟った。

【そっか】

【すまなかったなぁ、はやた。名無しは悲しいぞ】

悲しそうだった。

【いいよ。名無しのせいじゃないだろう？僕だって男さ。一度覚悟を決めたんだ。すっぱりさっぱり、諦める】

【それじゃあ、何ではやたは泣いてんだ？】

僕は名無しの無粋さに呆れる事なく、名無しの胸の中で、赤ん坊みたく泣きじゃくる。

美佳に会えない事よりも、美佳が死んだ事よりも、何よりも美佳を忘れる事が悲しくって仕方ない。

名無しは優しく、僕を抱き締めてくれた。

そういえば…。

【名無しはどうなるの？】

【名無しはもうとっくに消えた。はやたの前にいる名無しは、名無しがあの銃に込めた名無しの思い出さ。それも、もうすぐ消えてなくなる】

僕は本当に、色んなものを失った。世界が元通りになったって、色んなものは取り戻せない。

【今まで、よく頑張ってくれたなぁ。名無しは本当に、おめえさんらが、おめえさんらの住んでる世界が、大好きだったぞう】

【僕も名無しは大好きだよ。もちろん変な意味じゃなく、友達としてね】

【うん。ありがとなぁはやた。はやたが名無しを忘れても、名無しははやたを忘れねえぞ】

忘れないよ。名無しの事も、美佳の事も、忘れちゃうかもしれないけど、忘れない。

【はやたは結構矛盾した事を言う事があるなぁ。でも、はやたの矛盾は素敵な矛盾だと名無しは思う】

名無しはゆっくり、僕の体を離れていった。

【本物の名無しがもうお別れ言ってるから、思い出の名無しはお別れ言わねえ。お別れ言わなかったら、またどこかで会えんじゃねぇかって、そんな気がするんだ】

【そうだね。僕もまた、いつか名無しに会いたいよ】

【楽しみにしてるぞお。みかに、会えるといいなぁ】

【ありがとう】

名無しは闇の中へ、溶けるように消えていった。

僕も、闇の中に溶けていく。

僕は原初の記憶を思い出した。母さんのお腹の中をたゆたう感覚。

やり直せるなら、今度は親孝行しなきゃならないな…。

記憶と一緒に、今の僕が消えるまで、僕は美佳を思い浮かべ続けていた。

［エピローグ］

夏休みが目前だった。僕は自転車をこぎながら、朝の甲州街道を新宿に向かってこぎまくる。

南口の対面にあるサザンテラスに辿り付くと、自転車を降りて、コーヒーショップで軽くブレイク。

うん、ナイス日常。期末テストで赤点もなく、めでたく終業式を迎えられる僕の人生順風満帆だ。

人混みを掻き分けて、新宿と中野の間にある高校へ到着。

クラスのアイドル、ユミちゃん（宮崎あおいとあややを足して2で割った感じ）におはようと言われて、さらにさらに順風満帆。

校長の長話は日本全国お決まりで、僕は欠伸を担任教師に怒られた。

それが終わって、体育館から出ようとすると、僕は声を掛けられる。

振り向いても誰もいなくって、あれれと首を傾げると、もう一度、声が聞こえた。

《隼太》

うん？何だか知らない女の子の声だ。

いやいや待て待て、どこかで聞いた事のある声…。

「おい、隼太、何ボケッとしてるんだよ。行こうぜ」

友達が声をかけてきて、僕は先に行っててと返事して、がらんとした体育館で、1人声の正体を思い出そうとする。

そうだ。あれは《記憶の幼なじみ》の声に似てる。

母さんや父さんには、僕に幼なじみなんていないと言われてるんだけど、僕には確かに、幼少時に、幼なじみの女の子とよく遊んだ記憶がある。

というか、その子の家族と、僕の家族でキャンプに行った記憶すらあるのに、父さんと母さんは断固それを否定した。

キャンプはどこかの河川敷でしたと思う。夕方まで、僕はその子と遊んでた。その子はお父さんからもらった、ちょっとデザインの変わった水鉄砲を大切にして、西部劇ごっこみたいのにハマっていたっけ。

そうそう、確かすごいわがままな子で、僕はずっと悪役をやらされてた。

僕はその子に追われて、水鉄砲から逃げ回るんだ。

ははは、よく泣かされたんだよね。

そろそろご飯の時間だっていうのに、その子は僕を追いかけ続ける。で、それが祟って、石ころに足をつまづかせて、顔面から地面にダイブ。

その反動で、その子は水鉄砲を離しちゃって、それが川にポチャンと落ちて、大号泣したんだ。

その川は結構流れが速くって、大人を読んだら間に合わないから、子供ながらにやれやれと呟いて、僕は、そう、川に思い切り飛び込んだ。

目が覚めると母さんと父さんがいて、僕はめちゃくちゃ怒られた。その子のおじさんが助けてくれなかったら、水をガブガブ飲みまくった僕は死んでしまったらしい。

てか、そんな事があったにも関わらず、何で父さんと母さんは覚えてないんだろう？

《隼太だって最近思い出したくせに》

うん、そう、あの子はどうしてるんだろう？

幼いながらに、僕はあの子に命を懸けた訳で、幼いながらに僕はあの子を好きだったんだと思うんだけど。

《私も、あの時から隼太がずっと好きだったよ》

懐かしいな。あの子、名前は何て言ったっけ？

それがどうしても思い出せなくて、僕は毎回、諦める。

確かに声がした気がするけど…、やっぱり気のせいか。

《隼太》

僕はちょっと余韻に浸ってから、体育館を後にした。陽射しと蝉の鳴き声が、これから始まる夏休みに、素敵な事が待ってるような、そんな予感を抱かせた。

《大好き》

最終話　忘れちゃっても、忘れない（後書き）

いかがでしたでしょうか？一月たらずでガーっと書き上げたのと、実力不足が重なってツギハギだらけの物語になってしまったかもしれません（特に、モニカとマイケルの関係あたりが…）。

正直、１話を書き始めた時は個人的な理由から、もう何か書かなきゃならん！という強迫観念に駆られて、後先考えずに書いたら、最後まで行き当たりばったりで、ああこれ絶対終わらないと絶望していましたが、とにもかくにも完結できて、それが何よりよかったです。

何分未熟者ですので、ちょっと読み返すと誤字脱字が目につきました。申し訳ありませんでした。次の作品では文章、物語ともに、その辺りをもっとキチンとしていこうと思います。

ともあれ、こんな僕の作品を最後まで読んでくださった皆様方には、本当に感謝しております。機会があったら、次回作も見てやってください。

本当に、ありがとうございました！

太郎鉄

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7968a/

僕と彼女とアルマゲドン

2010年10月10日07時32分発行